

令和3年度
『産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務』

事業実施報告書

令和4(西暦2022)年3月

観光庁 参事官(国際関係・観光人材政策)付

目次

1 章 事業実施概要.....	4
1-1) 背景と目的.....	4
(1) 背景.....	4
(2) 目的.....	5
(3) 事業内容.....	5
1-2) 本業務内容.....	5
(1) 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施.....	6
(2) コンソーシアム共通教育プログラムの開発にかかる資金管理及び必要経費の支払.....	6
(3) 令和2年度採択された山口大学への教育プログラム構築にかかる資金管理及び必要経費の支払.....	6
(4) フォローアップ調査事業.....	6
(5) 事業総括.....	6
(6) 実施スケジュール.....	6
(7) 実施体制.....	7
(8) コンソーシアム14大学における本年度の教育プログラム.....	8
1-3) 先行業務(昨年度における研究調査)に対する整理.....	9
(1) 昨年度のフォローアップ調査における課題と改善案.....	9
(2) 昨年度の「事業総括」.....	10
2 章 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施.....	12
2-1) 第1回全体会議 実施記録.....	12
(1) 開催目的.....	12
(2) 開催概要.....	12
(3) 実施内容.....	13
2-2) 第2回全体会議 実施記録.....	15
(1) 開催目的.....	15
(2) 開催概要.....	15
(3) 実施内容.....	16
2-3) 合同研修.....	20
(1) 開催目的.....	20
(2) 開催概要.....	20
(3) 実施内容.....	21
2-3) 講座の枠を越えて情報交換を行える場.....	24
(1) 場の設計と提案.....	24
(2) 提示を行った場.....	25
3 章 フォローアップ調査.....	27
3-1) 令和3年度の教育プログラム実施体制等の調査.....	27
(1) 目的.....	27
(2) 調査対象大学(3校).....	27
(3) 調査記録.....	27
(3.a) 愛媛大学.....	28
(3.b) 滋賀大学.....	35
(3.c) 北陸先端科学技術大学院大学.....	46
(4) 調査対象大学(3校)におけるフォローアップ調査結果まとめ.....	51
(4.a) 調査対象3校の整理.....	51
(4.b) 課題の整理.....	51
3-2) 受講者へのインタビュー調査(3校).....	53
(1) 目的.....	53
(2) 調査対象者.....	53
(3) インタビュー調査記録.....	54

(4) インタビュー調査まとめ	63
(4.a) インタビュー調査対象者から見える中核人材の姿	63
(4.b) 調査対象3校の機能や役割のまとめ(受講者の声から)	66
4章 本年度に開発された教育プログラム	70
4-1) 山口大学により開発された令和3年度教育プログラム	70
4-2) 北陸先端科学技術大学院大学により開発されたコンソーシアム共通プログラム設計指針	77
5章 事業総括	82
5-1) コンソーシアムおよび大学における問題・課題の整理	82
5-2) 観光産業に対する問題・課題の整理	82
5-3) 最後に(産学官の連携における課題)	83

1章 事業実施概要

令和3年度
『産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務』
事業実施報告書

1章

事業実施概要

1章 事業実施概要

令和3年度「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務」は、以下の各大学(コンソーシアム14大学)の社会人の学び直しのための教育プログラム(リカレント教育)構築・実施を事務局により構成され、実施された。

1	本業務名称	令和3年度 「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務」
2	本業務受託者 (事務局)	株式会社日本能率協会コンサルティング 東京都港区芝公園三丁目1番22号
3	本業務の目的	「観光の中核を担う人材」に対し、地域の観光産業の中核を担う人材を育成・強化することを目的として、大学における社会人の学び直しのための教育プログラム構築・実施に向けた支援、自立・持続可能な産学連携による教育プログラムの構築・実施の仕組みづくりについての検討、実証事業を事務局として支援、運営を行う。
3	本業務項目	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施 2. コンソーシアム共通プログラムの開発(北陸先端科学技術大学院大学)への必要経費の支払い 3. 令和2年度採択された山口大学への必要経費の支払い 4. フォローアップ調査(平成31年度採択3校) <ol style="list-style-type: none"> (ア) 令和3年度の教育プログラム実施体制等の調査 (イ) 受講者へのインタビュー 5. 事業総括
4	大学における事業名称	令和3年度 「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業」
5	採択大学 (コンソーシアム14大学)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小樽商科大学 2. 大分大学 3. 和歌山大学 4. 青森大学 5. 鹿児島大学 6. 東洋大学 7. 明海大学 8. 関西国際大学 9. 信州大学 10. 横浜商科大学 11. 愛媛大学 12. 滋賀大学 13. 北陸先端科学技術大学院大学 14. 山口大学

1-1) 背景と目的

(1) 背景

我が国の観光産業は、国内総人口の減少・少子高齢化、世界規模での産業構造の転換、国内観光需要の成熟、訪日外国人観光客の飛躍的な増加やICTの発展など、大きな環境変化に晒されている。加えて令和2年1月より新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大以降、水際対策を徹底したこと、また国内においても緊急事態宣言発出の影響等もあり旅行控えの動きが生じたことにより、国内外の観光需要は大幅に減少している。

この状況を観光先進国実現に向けた助走期間と捉え、観光庁では観光産業の担い手を「観光産業をリードするトップレベルの経営人材」、「観光の中核を担う人材」、「即戦力となる地域の実践的な観光人材」、「次代の観光産業を担う子ども達への観光教育」の4層構造により育成・強化しているところである。

観光先進国 実現	第1層	観光産業をリードするトップレベルの経営人材
	第2層	観光の中核を担う人材
	第3層	即戦力となる地域の実践的な観光人材
	第4層	次代の観光産業を担う子ども達への観光教育

(2) 目的

本事業では上記4層構造のうち「観光の中核を担う人材」に焦点をあて、地域の観光産業の中核を担う人材を育成・強化することを目的として、大学における社会人の学び直しのための教育プログラム構築・実施に向けた支援並びに自立・持続可能な産学連携による教育プログラム構築・実施の仕組みづくりについての検討及び実証事業を行うことを目的とする。

これまでに実施した事業成果を踏まえ、大きく以下の2点を実施している。

1. 令和2年度に採択された山口大学において効果的な教育プログラムが構築されるよう支援
2. これまでの採択校において今後も自立的な同事業継続のための支援及び、複数の大学間の連携を実現

(3) 事業内容

本事業は、以下の14大学により実施された。14大学のまとまりを「コンソーシアム14大学」と称している。下表、10番までの大学は、自走化校として継続して教育プログラムの実施を行っている。11番から13番までの3大学(愛媛大学、滋賀大学、北陸先端科学技術大学院大学)は、今年度から自走化校となったため、その実施状況を「フォローアップ調査」において調査を行った。14番、山口大学は本事業の採択2年目となり、その教育プログラムについて4章において「本年度に開発された教育プログラム」として整理を行っている。

さらに本年度は、教育プログラムの一部を標準化することを目的に、北陸先端科学技術大学院大学により「コンソーシアム共通プログラム」として教育プログラムの開発が行われた。その内容についても4章において整理を行っている。

自走化校とは、国費の支援なく各大学による実施費用の調達を行い、教育プログラムを改善、実施を継続する採択校のことをいう。

〔採択時期〕	〔採択校〕
1 平成27年度	小樽商科大学
2 平成28年度	大分大学
3 同上	和歌山大学
4 平成29年度	青森大学
5 同上	鹿児島大学
6 同上	東洋大学
7 同上	明海大学
8 平成30年度	関西国際大学
9 同上	信州大学
10 同上	横浜商科大学
11 平成31年度(令和元年)	愛媛大学
12 同上	滋賀大学
13 同上	北陸先端科学技術大学院大学
14 令和2年度	山口大学

1-2) 本業務内容

本業務において、コンソーシアム14大学が円滑に計画どおり教育プログラムを実施し、情報交換を行なえるよう、事務局は運営を行っている。事業は本年度に7年目となり、各大学間の連携も進み、大学間において教育プログラムの講師の相互乗り入れや、共同開催講座も昨年度から継続し、行われている。

本業務における事務局の運営事項について、以下の項で整理を行った。

(1) 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施

本項で行った運営は、以下の3点である。

1. 全体会議(第1回および第2回)の実施
2. 合同研修の実施
3. 講座の枠を越えて情報交換を行える場の設定

第1回全体会議は、令和3年8月30日(月)に実施し、本年度の各大学の取り組み計画、事務局の運営内容等について共有化を行うとともに、講座の枠を越えて情報交換を行える場として、事務局からオンライン・プラットフォームの設置について、コンソーシアム14大学に対し提案を行った。第2回全体会議は、令和3年2月7日(月)に実施し、令和2年度採択校である山口大学の本年度実施内容、及び各自走化校の実施内容、北陸先端科学技術大学院大学による共通プログラムの内容や使い方について共有化を行った。

合同研修は、令和4年2月7日(月)に実施し、本年度の各大学の受講者、過年度の受講者を迎え、京都大学・若林直樹教授からの基調講演、本年度の山口大学の受講者による優秀ビジネスプラン(2本)の報告、各大学における受講者の成功事例(優れたプラン、活動等の実施、受講者の成長例等)の紹介を行った。

その他に、第1回全体会議では集約しきれなかった各大学の問題・課題を共有化する場として、問題・課題等共有化ミーティングを令和3年9月14日(火)に実施した。加えて、オンライン・プラットフォームに係る説明と、その実現可能性を検討するため、令和3年9月02日(木)、9月07日(火)、9月10日(金)の3回、各大学の関係者の都合に合わせて参加できるよう場を設定し、議論を行った。

これらの内容については、<2章 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施>において述べる。

(2) コンソーシアム共通教育プログラムの開発にかかる資金管理及び必要経費の支払

北陸先端科学技術大学院大学において開発されたコンソーシアム共通プログラムの開発に関し、その資金管理を行い、必要経費の支払いを行う。

コンソーシアム共通プログラムの内容については、<4章 本年度に開発された教育プログラム>において述べる。

(3) 令和2年度採択された山口大学への教育プログラム構築にかかる資金管理及び必要経費の支払

山口大学において開発された教育プログラムの構築に関し、その資金管理を行い、必要経費の支払いを行う。支出額を確定する調査では、その支出が適正に行われたこと、またその証憑書類が確実に保管されていることを確認し、支出明細と証憑書類の突合と確認を行った。

山口大学において開発された教育プログラムの内容については、<4章 本年度に開発された教育プログラム>において述べる。

(4) フォローアップ調査事業

本項で行った運営は、以下の3点である。フォローアップ調査は、本年度から自走化を開始した3校(愛媛大学、滋賀大学、北陸先端科学技術大学院大学)に対して下記の調査を実施した。

1. 教育プログラム実施体制等の調査(大学関係者への調査)
2. 過年度の受講者9名へのインタビュー調査

これらの内容については、<3章 フォローアップ調査>において述べる。

(5) 事業総括

上記、(1)から(3)の実施内容、(4)の調査内容等を踏まえ、事業総括としてまとめを行った。これらの内容については、<5章 事業総括>において述べる。

(6) 実施スケジュール

本業務は図1<本業務の実実施スケジュール>にあるスケジュールにおいて実施された。日程およびその内容は、令和3年8月に設定を行った計画どおりに遂行されている。

■ [図1 本業務の実施スケジュール]

	2021年					2022年		
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営の仕組み	実行計画書作成 各種準備	問題・課題等の共有化 オンライン・プラットフォーム構想に対する意見集約 全体会議①					合同研修 全体会議②	
	講座の枠を越えて情報交換を行える場 コンソーシアム14大学間における各種連絡、調整等							
フォローアップ調査			受講者へのインタビュー調査			教育プログラム実施体制等の調査		
教育プログラム							山口大学の教育プログラム 共通プログラム	
	対象2校に対する経費の確認、支払い等							
事業総括							事業総括、報告書とりまとめ	

(7) 実施体制

本事業および本業務は、以下の体制で実施した。教育プログラムの開発・実施(共通プログラムを含む)を行った責任者、事務局の構成を記した。また、経費支出管理、連絡担当等、各大学の職員の方々に多大な協力をいただいた。本報告書をもって感謝申し上げる。

	名称	責任者	所属
1	小樽商科大学	李 濟民 平尾 雅道	グローバル連携推進センター産学官連携推進部 特任教授・部門長 学術研究員
2	大分大学	松隈 久昭 仲本 大輔	経済学部 教授 経済学部 准教授
3	和歌山大学	出口 竜也 木川 剛志 金岡 純代	観光学部観光学科 教授 観光学部観光学科 教授 観光実践教育サポートオフィス 特任助教
4	青森大学	佐々木 豊志	総合経営学部 教授・学部長 青森大学観光文化研究センター長
5	鹿児島大学	萩野 誠	学術研究院 法文教育学域 法文学系 教授
6	東洋大学	森下 晶美	国際観光学部 教授
7	明海大学	阿部 佳 神末 武彦 渭東 史江	ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授
8	関西国際大学	高根沢 均	国際コミュニケーション学部観光学科 准教授
9	信州大学	加藤 彩乃	全学教育機構 講師
10	横浜商科大学	小林 雅人	商学部観光マネジメント学科 教授
11	愛媛大学	和田 寿博	法文学部 教授
12	滋賀大学	上田 雄三郎	産学官連携推進機構 特任教授
13	北陸先端科学技術 大学院大学	敷田 麻実 片岡 瑞貴	地域連携推進センター 教授 地域連携推進センター 研究員

	共通プログラム	小川 将友 小竹 望	地域連携推進センター 研究員 地域連携推進センター 研究員
14	山口大学	西尾 建	経済学部 准教授
-	事務局	大谷 羊平 小谷 茂生	株式会社 日本能率協会コンサルティング 取締役 株式会社 日本能率協会コンサルティング

(8) コンソーシアム14大学における本年度の教育プログラム

	大学名	注	期間	テーマ / 講座名称	定員	受講料
1	小樽商科大学		令和3年 10月27日(水) 28日(木) 11月8日(月)9日(火) 12月7日(火)	観光産業の中核を担う経営人材育成講座	20名	無料
2	大分大学		令和4年 2月、3月	宿泊業の伝統と経営革新 (オンデマンド)	-	-
3	和歌山大学		令和3年 10月14日(木) 21日(木) 11月11日(木)25日(木) 12月9日(木)	和歌山大学「観光・地域づくり」講座	300名	無料
4	青森大学		-	食をコンテンツにしたツーリズム	-	-
5	鹿児島大学		(不明)	(不明)	-	-
6	東洋大学		(不催行)	ビジネスリーダーを目指す女性のための 「最新・観光講座2021」	30名	無料
7	明海大学		令和4年 2月2日(水) 2月9日(水) 2月16日(水)	地域観光産業の強化を担う宿泊施設のための 中核人材育成プログラム 第4期	20名	無料
8	関西国際大学		-	ツーリズムプロデューサー養成講座	-	-
9	信州大学		令和3年 6月12日(土)～ 令和4年 3月	ユニバーサルフィールド・コンシェルジュ養成講座	-	55,000 円
10	横浜商科大学	※	令和4年 3月14日(月)～ 9月30日(金)	観光立国の再起動に向けて ～しなやかな成長の戦略とそれを担う人材～ (オンデマンド)	100名	無料
11	愛媛大学	※	令和3年 9月28日(火)～ 12月7日(火)	愛媛・四国の儲かる観光サービス業を担う 中核人材育成講座	10名	無料
12	滋賀大学	※	令和3年 8月18日(日) 9月1日(水) 9月29日(水)他 10月12日(火) 13日(水) 10月27日(水) 11月17日(水) 12月15日(水) 令和4年 1月19日(水)	ウェルネスツーリズムプロデューサー養成講座	15名	無料
13	北陸先端科学技術 大学院大学	※	令和3年 10月6日(水)～ 令和4年 2月25日(金)	北陸観光コア人材育成スクール	20名	80,000 円
14	山口大学	※	令和3年 8月25日(水)～	SDGsによる山口県のスポーツ観光講座	15名	無料

		11月25日(木)		
--	--	-----------	--	--

※10) 横浜商科大学: 本年度3月からの開始である。

※11) 愛媛大学: <3章 フォローアップ調査>において、そのプログラムの概要等を記述した。

※12) 滋賀大学: 同上

※13) 北陸先端科学技術大学院大学: 同上

※14) 山口大学: <4章 本年度に開発された教育プログラム 4-1) 山口大学により開発された令和3年度教育プログラム>においてそのプログラムの概要を記述した。

1-3) 先行業務（昨年度における研究調査）に対する整理

本業務を開始するにあたって、先行業務において述べられた課題、改善、提言について整理を行い、本業務をより効果的に遂行するよう努めた。『令和2年度「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業」報告書』に以下の項目において述べている。

(1) 昨年度のフォローアップ調査における課題と改善案

昨年度の報告書「4. フォローアップ調査事業」(4) 総括と課題整理 および (5) 次年度に向けた改善案」の項で、以下の内容が提起されている。

1 受講生の成果状況	<p>キャリアチェンジ、起業、講義でのビジネスプラン実現などが数名いたものの、コロナ禍もあり実質動けていない方が多数いた。転職の断念、ビジネスプランが白紙に戻ったという事例もあった。ただ、講義内容に関して、一部ミスマッチは感じていたものの全員満足度は高く、特に人脈形成においては例年通り満足度が高い。過年度受講生による勧誘で受講した方もいたほどである。</p> <p>一方、費用を支払ってでも継続的に受講したい、2年目講義はないのか、実践的な学びを深めたいという要望もある。またこれらの内容は観光MBA受講者もほぼ近い回答であることがわかった。</p>
2 各大学の体制作り	<p>コロナ禍があり、講義を開催できない大学があったことに加えて、専属教員や事務員が離れることで講義開催難易度が上がるなど問題が発生するケースも散見された。</p> <p>その中でも、鹿児島大学と信州大学との共同テキスト開発や愛媛大学では戦略MGの実施、青森大学と小樽商大では共同講義の実施と今後の継続に向けて検討をしている。</p> <p>一方で、考え方の違い、リソース分担など検討案件が多く開催速度が落ちる等共同開催に否定的な意見があるのも確かである。</p>
3 民間企業回答	<p>先進的な企業は採用が肝と考えており、特にビジネススキルやリテラシー、ビジョンマッチを重視していることに加えて、成長意欲、変化適応力を求める傾向にある。そして人材の思考が固定化されている場合が多いがゆえに、結果的に同じ業界・業種経験者の採用はほぼしない。それは、業界外からの採用を増やすことで異文化を取り込み、会社や事業の変化、進化成長速度を上げる狙いもある。</p> <p>一方、上記人材は企業文化によって定着しにくい現状もあり。社内での育成はOJT中心。権限移譲、機会創出など。企業ごとに研修機会提供は様々であるが、大手は充実している。</p>

これらから、より効果的な講座を実施していくための要素は、以下の3点だとしている。

- ◆ 人脈形成、講義内容への満足は高い。しかし成長・学習・改善など意欲的な方には物足りなさあり。
- ◆ 実施側におけるリソース不足は変わらないまでも、コンソーシアムの意義、共同開催の意義などは更なるすり合わせが必要で、全校コンセンサスを得るには労を要する可能性が高い。
- ◆ 観光業界の先進企業は、日々変化する外的環境下で対応力、実行力等を重視する傾向にあり。

これら要素に対する改善案が別途提示され、その改善案を踏まえ、本報告書<5章 事業総括>を組み立てることとした。

(2) 昨年度の「事業総括」

昨年度の報告書「5.事業総括」の項には、以下の課題や検討事項が挙げられている。

1. 各大学の教育プログラムは、地域のニーズが反映された独自性があり、様々な特色ある講座の機会を提供できた。しかし、産業界へ意見を求めながら継続的にブラッシュアップしていく必要がある。
2. 共通カリキュラム等の発展について議論を進める必要がある。
3. 対外的な取り組みとして、観光産業の中核人材育成に対する機運を高め、中核人材育成の裾野を広げていくようなシンポジウムを今後も継続的に開催していくことが重要である。
4. 自走化を継続していくためにも講座の共同開催やテキスト開発は、重要な要素である。
5. オンラインを活用した講座は、遠隔から講師の登壇が可能となる、受講者も遠隔から参加しやすくなる等、メリットがある。オンラインと対面の相互活用を今後も検討が必要だ。

「1」については、昨年度までの教育プログラムの継続となり、大幅な改定はなかった。今後、教育プログラムの充実を図るその必要性、上記にある「継続的なブラッシュアップ」については熟考する必要があると考え、本報告書<5章 事業総括><5-1>コンソーシアムおよび大学に対する問題提起と課題仮説>において、その方向性を示した。

「2」については、コンソーシアムにおける連携強化の方策として、<2章 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施><2-3>講座の枠を越えて情報交換を行える場>に記述したオンライン・プラットフォームの導入を試みたが、コンソーシアムにおける14大学の中での合意形成が得られず、実装、運用までには至らなかった。また、北陸先端科学技術大学院大学によって、コンソーシアム共通プログラムの開発となった。その内容は、<4章 本年度に開発された教育プログラム><4-2>北陸先端科学技術大学院大学により開発されたコンソーシアム共通プログラム>にその内容を記述した。

「3」において、「シンポジウムを今後も継続的に開催していくことが重要」となっているが、本年度においては、一部の大学同士での実施はあったものの、全体としては本年度および過年度の受講者に対して合同研修を行うに留まる。

「4」については、本年度も大学間における個別の取り組み、自己組織的取り組みとして、講座の共同開催や協力関係は維持された。

「5」について、本年度のコンソーシアムにおける会議はすべてオンライン・ビデオ会議とした。各大学の教育プログラムもオンラインと対面のハイブリッドによる講座の実施が行われている。

これら、先行業務により行われた課題、改善、提言事項を踏まえ、本業務を推進するとともに、本報告書を作成した。

2章 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施

令和3年度

『産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務』

事業実施報告書

2章

自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施

2章 自立・持続可能な運営の仕組みの企画・実施

2-1) 第1回全体会議 実施記録

(1) 開催目的

本年度の事業方針を観光庁から伝達するとともに、各採択校の教育プログラムを、観光庁を含む関係者間で共有する。本年度の事業方針に沿ったプログラムの実施、プログラムのブラッシュアップを行い、観光産業の中核人材のさらなる強化に資する教育を実施することを目的とする。

(2) 開催概要

(2-1) 日時・場所

日時	令和3(2021)年08月30日(月) 15:30 - 18:30
場所	オンライン・ビデオ会議 (Zoom)

(2-2) 次第

時間	説明者	項目	時間
1 15:30-15:45	観光庁	観光庁の取り組み、事務局紹介 本事業の説明、本年度の方針・特徴 コンソーシアム交流の場の説明(仮) など	15分
2 15:45-16:00	事務局	本事業の進め方(実行計画)の説明	15分
〔教育プログラムの開発校 計1校〕			
3 16:00-16:20	山口大学	教育プログラム内容の説明、質疑応答	20分
〔フォローアップ調査とコンソーシアム共通プログラム 計3校〕			
4 16:20-17:20	愛媛大学 滋賀大学 北陸先端科学技術大学院大学	本年度の取り組み 教育プログラム内容の説明、質疑応答	各20分 計60分
5 17:20-17:40	コンソーシアム共通プログラム	コンソーシアム共通プログラムの概要について 説明、質疑応答	20分
	(休憩)		5分
〔自走化校 計10校〕			
6 17:45-18:20	14大学間における意見交換	特筆事項(例えば令和2年から令和3年の 変更点など)がある場合の報告、および質疑応 答	35分
7 18:20-18:30	観光庁	まとめ、講評、各大学への期待など	10分
計			180分

(2-3) 参加者

愛媛大学	和田 寿博	法文学部	教授
関西国際大学	高根沢 均	国際コミュニケーション学部 観光学科	准教授
滋賀大学	上田 雄三郎	産学公連携推進機構	特任教授
信州大学	加藤 彩乃	全学教育機構	講師
明海大学	阿部 佳	ホスピタリティ・ツーリズム学部	教授
横浜商科大学	小林 雅人	商学部観光マネジメント学科	教授
小樽商科大学	李 濟民	グローバル戦略推進センター産学官連携推進部門	特任教授 部門長
	北川 泰治郎	グローバル戦略推進センター産学官連携推進部門	教授 副部門長
	平尾 雅道	グローバル戦略推進センター産学官連携推進部門	学術研究員
大分大学	松隈 久昭	経済学部	教授

	仲本 大輔	経済学部	准教授
東洋大学	森下 晶美	国際観光学部	教授
北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST)	敷田 麻実	地域連携推進センター	教授
	片岡 瑞貴	地域連携推進センター	研究員
山口大学	西尾 建	経済学部	准教授
	木寺 航大	農学部	大学院生
青森大学	佐々木 豊志	総合経営学部	学部長・教授
		青森大学観光文化研究センター	センター長

※和歌山大学は、当日欠席のため、別日に説明および質疑等の内容について共有を行った。

※他、観光庁から参事官および担当官、事務局(2名)が参加した。

(3) 実施内容

(3-1) 観光庁の取り組み等

「観光庁の取り組みについて」資料に基づき、参事官から説明が行われた。その説明内容は、大きく次の3点であった。

①観光の動向、②新型コロナウイルス感染症を踏まえた観光の新たな展開、③観光庁の人材育成事業

(3-2) 本事業の進め方

「コンソーシアム14大学様向け 全体会議①説明資料」に基づき、事務局から事業全体の流れ、計画等の説明が行われた。

(3-3) 山口大学教育プログラム

資料に基づき、山口大学から、本年度に開発を行う教育プログラムについて説明が行われた。

- ◆ 実施体制(担当者、講師等)
- ◆ 講座のコンセプト(SDGs、アフターコロナ、地域、ネットワーク構築等)
- ◆ 講座は全6回。受講生は、17名他。DMOからの参加もあり
- ◆ 昨年度実施できなかったSDGs項目を取り入れた
- ◆ 他大学との交流(信州大学や滋賀大学)を行い、講座内容の充実を図る
- ◆ 講座のテーマはブラインドマラソン、ジオパーク、アドベンチャーツーリズム、スポーツとまちづくり等
- ◆ 課題は、グループワーク、個人ワークにて行う
- ◆ スピンオフ企画を予定している
- ◆ 7月3日にテーマセッションを行い、昨年度の実施状況についてなど報告を行った。

(3-4) コンソーシアム共通プログラム

「コンソーシアム共通プログラム開発への協力のお願い」資料に基づき、北陸先端科学技術大学院大学および観光庁から説明が行われ、同大学と観光庁からの提案に合意して、協力することとなった、なお関連して各校の連絡先、担当者情報を提供することとなった。

- ◆ 定義と目的(教育プログラムの共通テキスト、標準化を目的)
- ◆ 具体的な項目(指針、マーケティング、マネジメント、教授方法の一定モデルや基準、効果測定・評価方法等)
- ◆ コンソーシアムにおける共通プログラムの必要性
- ◆ プログラムはオンラインにて実施を想定
- ◆ プログラム構築のスケジュールは3か年と考える
- ◆ 各大学へのお願い事項(カリキュラム、シラバスの共有、連絡先の共有)
- ◆ 将来構想(標準設計指針、共通カリキュラム標準化)
- ◆ プログラム評価(レポートの点数などの標準化)

(3-5) フォローアップ調査対象大学〔愛媛大学〕

- ◆ 9月末から講座を開始
- ◆ 感染が収まってから正式な募集を開始する予定
- ◆ 道後プリンスホテルは道後地区の周辺に立地するためその工夫が参考となる
- ◆ 地域協働センター中予を開設し、地域医療や観光振興を行っている
- ◆ 地域でコンソーシアムを作り、交流、勉強会を行っている
- ◆ 小樽商科大学との共同研究と教材開発を行っている

- ◆ 起業した受講者による西条市の工芸応援プロジェクトが始動
- ◆ 近日、自走化講座の観光サービス人材リカレントプログラムを公表予定
- ◆ 講座は9月28日(火)から12月7日(火)までオンラインで実施予定
- ◆ 視察を2回実施予定しているが遠隔になる場合がある
- ◆ 12月7日の修了式の後、オフ会の交流会を検討する
- ◆ コロナ禍により道後地区・松山市への修学旅行がなくなり、業界は厳しいが学習時間ができたとの声もある

(3-6)フォローアップ調査対象大学〔滋賀大学〕

- ◆ 引き続き、ウェルネスツーリズムプロデューサー(WTP)養成講座を行う
- ◆ 講座で考えたビジネスプランを実際に実施できるよう図る
- ◆ プログラム:ピワイチ(琵琶湖1週)、昨年度最優秀賞プログラムのテストツアー(9月から10月に実施、コロナの影響あり)実装に向けたプロタイプづくり
- ◆ 滋賀県の地域支援事業の一環として実施
- ◆ 受講者には、経験、モチベーションなどに差、バラつきがある
- ◆ WTP(ベーシック+アドバンス)は人が多くなるなど大変な側面がある
- ◆ WTPを観光事業者のプラットフォームとなることを目指す
- ◆ 課題:プロタイプの作り方(観光の場合は難しい)、観光事業者がプロトを作ることは難しい
- ◆ B/Pは、経営トップに入ってもらいたい

Q: 大学と滋賀県の間はどのようになっているのか? 補助金の獲得方法を知りたい。

A: 滋賀大学では、広域DMOから委託を受けた事業者から人材育成業務を再委託された費用で、運営をしている。来年度以降は未定である。

(3-7)フォローアップ調査対象大学〔北陸先端科学技術大学院大学〕

- ◆ 令和元年:16名、令和2年:19名の受講者となった
- ◆ コロナ感染には注意を払っている
- ◆ 受講者から北陸先端大に進学した人が1名出た、小松市長になった人もいる
- ◆ 自走化においては、履修証明プログラムを予定する
- ◆ 厚労省の教育訓練給付制度の一般教育訓練に申請中、その他人材開発支援助成金も検討(課題は残る)
- ◆ 修了者の組織化が来ている(140名のネットワーク、修了者同士の繋がりも重視)
- ◆ コア人材育成スクールは、令和3年10月から2月までを予定、北陸地域から15名受講予定
- ◆ 費用は、10万円程度
- ◆ 15日間(19講義=計90時間)

(3-8)14大学間における意見交換

〔関西国際大学〕

Q: 受講者の実負担額はどの程度になるのだろうか。

A: JAISTは、受講料8万円+研修実費2万円で案内している。受け入れられる受講者は、20名が最大だと思われる。受講者募集は、修了者からの紹介(8割)、チラシの配布で20名。そのため、同じような人が集まる問題もある。

〔滋賀大学〕

Q: 自費で講座に参加する人はどの程度いるのだろうか。

A: JAISTの大半は企業派遣だろう。申し込み時点ではわからないが、一部に自費の人もある。職場から派遣される人は出席率が高い傾向にある。

〔愛媛大学〕

Q: 企業は、勉強させたいが、金もかかる。受講者にとって金は大きな課題だ。今回の講座はオンラインとなるのか。対面が基本なのか。

A: 給付金には対面で行わなければならないなどの制約がある。そのためJAISTは、対面で実施する予定。申し込みは15名の予定。20名程度までなら対応が可能と考える。自治体の補助金等を求める場合は、他の行政機関等から支援を得た場合は、実績にならない。

〔小樽商科大学〕

- ◆ 今年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録され、これは1つのきっかけではあるが、10月から函館で自走化講座開催を予定している。

〔青森大学〕

- ◆ 獲得できる助成金にトライしている。
- ◆ ノウハウの蓄積、共通カリキュラムの構築など、コンソーシアムへ期待する。

〔信州大〕

- ◆ 地方創生交付金を県から獲得し、受講費に補填している。
- ◆ 修了者の活躍として、白馬登山の宿泊の案内、コンシェルジュ対応、指導員がいる。(長野県、長野県以外のも)

〔横浜商科大学〕

- ◆ 首都圏の緊急事態宣言が延長されているので講師を依頼できない状況にあり、準備が遅れている。11月頃からオンデマンドで講演会を開催する予定である。

〔明海大学〕

- ◆ 昨年度はオンラインで行った。今年の開催もオンラインに決めた。オンラインは全国から集まりやすいメリットがある。
- ◆ テーマは当初から変わらず、人、金のマネジメントとネットワークを3つの柱としているが、今年はDX、デジタルイノベーションも加える。

〔大分大学〕

- ◆ 有料にすることが課題。募集はまだであり、冬に実施したいと考える。
- ◆ 実地内容として、別府などの特色のあるホテルや旅館の施設を見学することを考えている。
- ◆ これまでの学習教材を活かして、プログラムを作成したい。

(3-9) 観光庁まとめ

- ◆ 共通プログラム(北陸先端科学技術大学院大学作成)を活用してもらいたい。このプログラムは、職業教育の意義も大きい。
- ◆ 自治体等への申請など、苦労も多いが頑張ってもらいたい。観光庁にも、オンデマンドプログラムがあり、活用してもらいたい。

2-2) 第2回全体会議 実施記録

(1) 開催目的

本年度のコンソーシアム14大学の取り組みを振り返り、課題や改善点を整理し、令和4年度に向けた施策等を関係者間で共有する。それにより教育プログラムのブラッシュアップを行い、より良い教育プログラムを提供するとともに、コンソーシアム14大学の連携を深めることを目的とする。

(2) 開催概要

(2-1) 日時・場所

日時	令和4(2022)年02月07日(月) 13:15 - 16:20
場所	オンライン・ビデオ会議 (Zoom)

(2-2) 次第

時間	説明者	項目	時間
1 13:15-13:30	観光庁	観光庁の令和4年度の取り組み等	15分
2 13:30-14:10	山口大学	採択継続校による令和3年度の取り組み報告と質疑	40分
3 14:10-14:50	北陸先端大	共通プログラム開発に向けての説明と質疑 令和3年度の取り組み等と質疑	40分
4 14:50-15:30	各大学	令和3年度の実施状況、令和4年度以降の 進め方、課題、方向性等の報告と質疑	40分
5 15:30-16:15	14大学間における意見交換	本事業の総括、その他コンソーシアム、教育プログラム、今後の運営に関する意見交換等	45分
6 16:15-16:20	観光庁	まとめ、講評、各大学へのお願い事項等	5分
計			185分

(2-3) 参加者

愛媛大学	和田 寿博	法文学部	教授
滋賀大学	上田 雄三郎	産学公連携推進機構	特任教授
信州大学	加藤 彩乃	全学教育機構	講師
明海大学	阿部 佳	ホスピタリティ・ツーリズム学部	教授
	神末 武彦	ホスピタリティ・ツーリズム学部	教授
	渭東 史江	ホスピタリティ・ツーリズム学部	教授
小樽商科大学	平尾 雅道	グローバル戦略推進センター産学官連携推進部門	学術研究員
	池澤 奈緒	学術情報研究支援係	係長
大分大学	松隈 久昭	経済学部	教授
	仲本 大輔	経済学部	准教授
東洋大学	森下 晶美	国際観光学部	教授
北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST)	敷田 麻実	地域連携推進センター	教授
	片岡 瑞貴	地域連携推進センター	研究員
	小川 将友	地域連携推進センター	研究員
	小竹 望	地域連携推進センター (共通プログラム)	研究員
山口大学	西尾 建	経済学部	准教授
青森大学	佐々木 豊志	総合経営学部	学部長・教授
		青森大学観光文化研究センター	センター長
和歌山大学	金岡 純代	観光学部観光実践教育サポートオフィス	特任助教

※他、観光庁から参事官および担当官、事務局(2名)が参加した。

(3) 実施内容

(3-1) 観光庁の取り組み等

観光庁資料「観光庁の取り組みについて」に基づき、参事官から説明が行われた。

■ 来年度以降の取り組み

- 1 国内交流の回復・新たな交流市場の開拓
- 2 観光産業の変革
- 3 交流拡大により豊かさを実感できる地域の実現
- 4 国際交流の回復に向けた準備・質的な変革

■ 人材に係る取り組み

- ◆ 人材不足に対応
- ◆ リカレント教育の充実: ①海外のホスピタリティ大学 EHLと青森大学の連携を開始、②コンソーシアム14大学と観光MBAとの会議体等、取り組みを考える。

(3-2) 山口大学における本年度の取り組み報告

山口大学資料に基づき、山口大学・西尾氏から説明が行われた。

- ◆ 講座の目的を①スポーツ観光(アクティビティも含めて、広義のスポーツ観光と捉える)、②SDGsの視点、③異業種間でのネットワークの構築、と設定した。
- ◆ 実施体制は、山口県スポーツ文化部、県観光連盟、日本スポーツツーリズム団体など。学内体制として、実施のためのオフィスを経済学部を設置した。
- ◆ 昨年度(2020年度)の内容と本年度(2021年度)の比較。SDGsの3つの項目に意識し、取り組んだ。
- ◆ 令和3年度は、8月25日(水)から11月25日(木)まで。①開講式②観光データとテクノロジー③ジオパーク&ユニバーサル④成功事例:廃校の活用⑤スポーツチーム、ジェンダーからの学び⑥修了式(ニューノーマル時代のスポーツ観光)、計6回実施した。また、追加講座としてスピノフ企画を実施。他大学との交流の一環として、滋賀大学のウェルネス講座との連携を図った。
- ◆ SDGsへの意識、不平等への意識づけ、ジェンダーも加えた。
- ◆ 講座の各テーマについて理解度を講座前と後において比較した。地元観光、県のスポーツ視点、プレゼン、ビジネスプラン作成において、理解度が上がった。

- ◆ ワークショップは、コンサル手法を取り入れ受講者に自由度を与えチーミングを行った。昨年度は、地域別に偏りが出ないようチーミングした。
- ◆ 受講者によるビジネスプランは、「HIPPOcampe」(合同研修において優秀ビジネスプランの発表とした)、「レノファ山口エコシステム」、「日本でこしかできない！ホテルケイブ」、「徳地まるごと村キャンプ」など、計16件のビジネスプランとなった。
- ◆ 修了式の午後に、シンポジウムを行い、NHK ローカルでも取り上げられるなど、地元では話題となった。
- ◆ 受講者のビジネスプランが、実際に事業開始となったものもある。地方都市にとっては、観光アクティビティによる効果や影響は大きい。
- ◆ 他大学との交流も進め、信州大学との取り組み(秋吉台を車椅子で訪れる)、滋賀大学とのヘルス&スポーツの相互交流、一橋大学と共催セミナーを行った。
- ◆ 来年度以降の自走化に向けて積極的に取り組む。

(3-3) 北陸先端科学技術大学院大学による共通プログラムの開発

北陸先端科学技術大学院大学資料に基づき、北陸先端科学技術大学院大学・敷田氏から説明が行われた。

- ◆ 各大学に共通する科目がある。例えば、地域性のない科目、会計、財務などを共通プログラムとしたい。
- ◆ マイクロレデンシャル認証基準を普及することも考える。
- ◆ オンラインツールが普及し、講座提供の拡大可能性(全国から受講できる)を考えたい。
- ◆ 自校以外のリソースを利用可能とするなど、講座の魅力を上げたい。そのため、①教育プログラム標準化→②共有化→③価値向上、これら3段階で考える。
- ◆ まずは、教育プログラム標準化のための要件をまとめる。プログラムの相互提供、今後オープン化することを検討。標準化によって各大学における利用可能性が向上する。
- ◆ 来年度以降の課題として、プログラム開発手順の標準化も検討する。①前提:共通化の環境や条件、②作成手順の標準化、③授業における要件(これは来年度以降に検討)、④開発手順(ステップ)。これからの議論としたい。
- ◆ 「共通仕様調査票」に記述し、返信をお願いしたい。提出期限、2月20日(日)まで。
- ◆ 講座が質問項目に当てはまらないなど各大学間の差異があることは認識している。例えば、拾いだせない項目、修了生のフォローアップなど。資料の読み違いなどがあることも想定している。

Q: 各大学ともに事情はある。今後のことも考えたい。費用や収入のことも考えなければならない。

A: 各大学によって事情はいろいろ。各大学で作られたプログラムを利用したい。協力をお願いする。観光産業に従事する人にとって、会計実務がわからないと観光ビジネスは出来ない。会計ほどの学校でも必要な項目であり、授業の内容はみな一緒になるであろう。共通プログラムの利用については、各大学の教員にお任せする。可能な限り、お互いに持っている教材を共有したい。教育実施は、皆同様の苦労がある。各大学においてどのような講座を実施されているのか、その内容を教えてもらいたい。

Q: 全体のシラバスをまずは示してもらった必要があるのではないだろうか。また共通プログラムの運営は、難しいのではないだろうか。

A: 全体のシラバスが揃えば、まずは違いなどがわかるようになるだろう。リカレント教育コースは、各大学で責任をもって設計してもらったことを想定している。事前学習、効果測定などを組み込んだ標準化したプログラムとしたい。その使用は各校の判断にお任せする。

(3-4) 北陸先端科学技術大学院大学における本年度の取り組み報告

北陸先端科学技術大学院大学資料に基づき、北陸先端科学技術大学院大学・片岡氏から説明が行われた。

- ◆ 本年度のプログラム概要として、地域観光、T型H型の開発に取り組んだ。対象者は、北陸3県など。
- ◆ 修了要件は、ポイント制とし、出席ポイント、内容ポイント等で成績を付け、修了とした。受講者に評価を見える化している。
- ◆ 過去の修了生との繋がりが出来ることがある。
- ◆ 令和3年度の開講状況として、ルーブリック方を標準仕様とした。授業時間を90時間と昨年度と比して増加とした。
- ◆ 受講の流れとして、①事前課題→②受講→③ミニットペーパー→④講義動画視聴(復習)→⑤事後課題としている。

- ◆ 受講者からのスクール評価は、平均 9.399/10 点と、高い得点を得た。
- ◆ 運営上の工夫として、ポータルサイトで連絡、課題発出を行った。ミニットペーパーの導入、オンデマンドで講義を見ることが出来る。運営会議を実施し、外部の評価者に講義内容を評価してもらうことで、受講者からの評価だけでなく、客観的な評価を導入した。
- ◆ 今後の課題として、運営事務局の人員確保、受講者と講師の確保、広報・周知、補助金の確保、修了後の受講者のケア(オンラインや対面のなど)が挙げられる。
- ◆ 当校の教育プログラムは、コストをかけている。そのため効率を上げることは今後の課題である。

(3-5) 各大学における本年度の取り組み報告

コンソーシアム 14 大学の教員から本年度の取り組みについて説明が行われた。

- | | |
|--------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 小樽商科大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・講座は、世界文化遺産や地域の観光振興などをテーマに実施した。 ・ビジネスプラン発表を行い、最優秀賞、特別賞を授与した。 ・受講者や地域関係者との深い繋がりができ、基盤づくりとなった。 ・受講者同士、本学と繋がりができ、今後、刺激、連携しあう基盤づくりとなった。 ・アンケートの分析結果を活かして、改善や新しい取り組みを検討したい。 |
| 大分大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・教育プログラムの実施は、2月と3月である。 ・内容は、中小旅館における基礎コース、実地研修コースとなる。 ・オンデマンドで行い、全6講座となる。 ・プログラムの内容は、毎年課題となっている。今後も大分県観光課と話し合いながら進めていく。 |
| 和歌山大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・公開講座として、教育プログラムを10月から12月まで開講した。 ・オンラインで開講し、全国からの受講を対象とした。 ・受講者の募集広報を全国の地域づくり法人(登録DMO)へ拡大した。結果として全5回のべ433名の受講となった。 |
| 青森大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・自走化3年目となる。食をコンテンツに開講を行った。 ・地元の方々を巻き込んでコンテンツの開発に取り組んだ。 ・雪のイムルーを取り上げ、イムルーマイスター講座も開始した。 ・観光庁事業でスイスのEHL(エコール・オテリエール・ド・ローザンヌ、スイスのMBAホスピタリティ大学)との取り組みを開始した。スイスやEHLには観光のノウハウがある。それを日本に導入することが目的である。セッションは5日間、十和田湖で実施する。 ・自走のため大学で予算を組む。また環境省の事業も受託し組み合わせで教育プログラムを実施する。 |
| 鹿児島大学 | (欠席) |
| 東洋大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・リカレント教育は、公開講座として開催する。公開講座は受益者負担(受講者による受講費の支払い)としている。 ・今年度は、受講者が集まらず催行できず。 ・東京都の受託事業を行っており、観光庁の受託事業とは別ものとして開催している(3年目)。平成31年度は、講座5回を開催した。 ・本事業のリカレント教育に受講者が集まらない、その理由を特定することは難しい。都会型の大学の観光リカレント需要は小さいと考えられる。 ・地方においては、地域活性化や地域貢献へ需要があり、また経営人材の育成に対する需要が一定程度あるものと考えられる。 |
| 明海大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・第4期を2月から開催した。 ・全3回15時間、オンラインで開催する。 ・宿泊業に限っている。ミドルマネジメントに限って講座を開催。テーマは当初から変わらず、人、金、地域ネットワークのマネジメントだが、今年度は時代に沿った課題、DX、衛生問題を加えている。 ・有償で人を集めることは、難しい。無償で続ける。 ・全国から集まる受講者は、宿泊のカテゴリがさまざま、今後はカテゴリを分けることも検討している。 ・修了生の振り返りの会も新メンバーを加えて引き続き開催する。 |

関西国際大学 信州大学	(欠席) ・ユニバーサルツアーをテーマに実施した。 ・今年度、受講者5名である。 ・3月17日が閉校式の予定である。 ・県のユニバーサルツーリズムの資料に掲載し、教育プログラムの発信を行う。YAHOO ニュースにも掲載された。 過去の受講生でユニバーサルツアーのファームを作って事業を開始した方もいる。 ・長野県からの受講者が主であるが、他県からの要望もある。今後、他県からの受講者の取り込みも行う。
横浜商科大学	(欠席のため提示資料を共有した) ・実施形態:受講者の都合で受講できるオンデマンド方式(Google Classroom に動画を掲載する) ・実施主体:横浜商科大学地域産業研究所(観光庁に後援を依頼) ・講演回数:5回(1回分は50分~60分) ・募集期間:令和4年3月1日(火)~6月30日(木)(予定) ・配信期間:令和4年3月14日(月)~9月30日(金)(予定) ・受講定員:100名 ・受講料:無料
愛媛大学	・法文学部、社会連携推進機構地域協働センター中予(学内組織)による共同主催で行った。 ・事例を現地からオンラインで中継することで、コロナ禍を乗り切った。 ・オンラインによる遠隔により、受講者の範囲が広がった。中央地域だけでなく地域の東部、南部、そして関西からの受講者が参加することが可能となった。 ・地域振興や物産、西条市(移住したい街No1)、南予(ファスティング、断食)の観光資源を紹介した。 ・受講者の活動として、「にぎわいづくり」(大街道商店街にひとが集まる催し)を行うことが出来た。この数年にない人の集まりが出来、地元では大きな話題となった。 ・受講者、地域の観光事業者、関係団体がなかよく、地域を作ることに取り組む。 ・来年度以降も自走を続ける。
滋賀大学	・本年度で取り組みは3年目となる。 ・WTP 講座(ウェルネスツーリズムプロデューサー養成講座)は本年度、21名の修了者であった。 ・基本知識、ツアーの体験、ビジネスプランの3本柱を基本とする。 ・多様な観光産業、WTP では業種を超えてコラボが可能である。 ・3年間で約100名の修了者が出た。今後、横の繋がりが期待できる。 ・本年度は、億単位のビジネスプランも出てきた。今後、この流れを作っていきたい。 ・来年度以降の運営方法は、検討中である。 ・修了者の交流方法を検討し、成功事例を作っていく予定だ。交流のためのプラットフォーム機能の構築を考えている。
北陸先端科学技術 大学院大学 山口大学	(上記項に記載) (上記項に記載)

(3-6) 本事業に係る問題・課題に係る議論

観光庁参事官から「令和3年度中核人材事業 事業総括に向けて」資料に基づき、本事業に係る問題・課題に対する提起が行われた。

政府に、教育未来創造会議が立ち上がった。その中の課題としてリカレント教育があり、観光におけるリカレント教育も含まれている。コンソーシアム14大学でも何が出来るか、観光庁でも検討を行っており、政府内での検討も進めている。不足するIT人材をどのように作るか。経産省によるIT人材育成講座と認定を受けると、厚労省の補助金を受けることが出来るプログラムもある。このコンソーシアムを今後どのように活かすか、継続的な取り組みを考えたい。

Q: コンソーシアムにおける交流が進んだ。またリカレント教育という言葉は、今年度は多く出て来た。愛媛大学では、予算の調整はまだだが、大学を上げてリカレント教育に取り組む。リカレント教育を観光庁から強く打

ち出してもらいたい。リカレント教育と本事業の位置づけを考えなければならない。観光人材に対して、観光庁から人材投資の重要性を発信してもらいたい。

A: (観光庁)

人への投資は、他国との比較でも日本は小さいとのデータがある。生産性向上で、産業が儲けられることを考える。再来年のR05の検討も進めている。

Q: どういう位置づけでリカレント教育を行うか、難しいところ。

観光産業が発展するには人材が必要であり、教育効果は産業界が受益者のはず。産業界を行政がもっと巻き込んでもらいたい。

産業界が金を出して人材を育成すべき。産業界にも当事者意識をもってもらいたい。

A: (観光庁)

相談させていただく。

Q: 観光とスポーツ、オリンピックの組み合わせなど、その時のテーマ、トピックに合わせたフレキシブルな講座を作り、教育することも考えられる。短期ものへの迅速な対応スキームも必要になるであろう。短いセッションも考えたい。2回、3回程度講座で、その時のことを迅速に学ぶ、そのような機会があってもよい。

A: (観光庁)

産業界では、回数の多い講座はあまり好まれないのではないか。オンラインが使えるようになり、そのような講座も行える環境になって来た。企業側へのアンケートによると、リカレント教育への期待はある。リカレント教育事業者と組む、大学と組むといった組み合わせがある。大学と企業が組むことも含めて、お知恵をいただきたい。

2-3) 合同研修

(1) 開催目的

優秀な受講者の成果(ビジネスプランや成功事例)を通じて、本事業の成果を共有する。また基調講演を行うことにより、観光産業の中核人材に対するメッセージを発信することを目的とする。

(2) 開催概要

(2-1) 日時・場所

日時	令和4(2022)年02月07日(月) 10:00 - 12:10
場所	オンライン (Zoom ウェビナー)

(2-2) 次第

時間	説明者	項目	時間
1 10:00-10:10	観光庁参事官	開会挨拶と本事業の説明	10分
2 10:10-10:40	京都大学経営管理大学院 経営組織論専攻・教授 若林直樹様	基調講演	30分
3 10:40-11:10	受講生A氏	山口大学における優秀ビジネスプラン (1)	30分
4 11:10-11:40	受講生B氏	山口大学における優秀ビジネスプラン (2)	30分
5 11:40-12:10	各大学	大学推薦による受講者の成功事例紹介 (複数名を紹介予定、各校2分程度)	10分
6 12:10-12:15	観光庁等	閉会挨拶	5分
計			175分

(2-3) 参加者

コンソーシアム14大学の教育プログラムを受講した受講者(本年度および過年度)			
京都大学	若林 直樹	経営管理大学院経営組織論専攻	教授
愛媛大学	和田 寿博	法文学部	教授
滋賀大学	上田 雄三郎	産学公連携推進機構	特任教授
信州大学	加藤 彩乃	全学教育機構	講師
明海大学	阿部 佳	ホスピタリティ・ツーリズム学部	教授
小樽商科大学	李 濟民	グローバル戦略推進センター産学官連携推進部門	特任教授

			部門長
大分大学	松隈 久昭	経済学部	教授
	仲本 大輔	経済学部	准教授
東洋大学	森下 晶美	国際観光学部	教授
北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST)	敷田 麻実	地域連携推進センター	教授
	片岡 瑞貴	地域連携推進センター	研究員
	小川 将友	地域連携推進センター	研究員
	小竹 望	地域連携推進センター (共通プログラム)	研究員
山口大学	西尾 建	経済学部	准教授
青森大学	佐々木 豊志	総合経営学部 青森大学観光文化研究センター	学部長・教授 センター長
和歌山大学	出口 竜也	観光学部	教授
	金岡 純代	観光学部観光実践教育サポートオフィス	特任助教

※他、観光庁から参事官および担当官、事務局(2名)が参加した。

(3) 実施内容

(3-1) 開会挨拶と本事業の説明(観光庁)

「観光庁の取り組みについて」資料により、観光庁参事官から説明が行われた。

〔観光庁による説明の様子〕

- ◆ 観光庁の動向
- ◆ 令和4年度:観光庁の取り組み
- ◆ 観光庁の人材育成事業



(3-2) 基調講演(京都大学・若林直樹氏)

京都大学・若林直樹氏の資料「観光産業とリカレント教育 ポストコロナに向けての EDTECH を活用した人材育成」に基づき講演が行われた。

[1] コロナ禍で観光産業のゲームは変わったのか]

- ◆ 観光はやはり顧客密集でしか、もうけられないのか?
- ◆ 観光産業の転機における社会人学び直しの意義
- ◆ 細かく事業転換できる組織能力

[2] 観光産業の経営課題とリカレント教育]

- ◆ 長期化する観光需要停滞とビジネスモデル転換
- ◆ 観光産業の経営課題(伝統的な経営課題)
- ◆ 独特の人的資本の問題(公式の訓練機会が少なく、人材開発の取組が弱い)
- ◆ コロナ禍の人材問題
- ◆ 観光産業のリカレント教育の課題

[3] 観光における社会人学び直しの意義]

- ◆ EDTECH が展開する新たな学び直し
- ◆ 京都大学観光 MBA の例:オンライン化と観光ビジネス教育の新たな取り組み
- ◆ OJT の抱える課題
- ◆ リカレント教育の意義
- ◆ 観光産業での学び直しの意味

- ◆ リンダ・グラットン 人生100年時代でいかに生産的に生きるか(3つの無形資産を手に入れる必要がある)
- ◆ リカレント教育の課題
- ◆ 観光産業での学び直しの課題
- ◆ リカレント教育のイノベーション
- ◆ Eラーニングのメリットと課題
- ◆ 観光のリカレント教育の将来

[4 まとめ]

- ◆ 観光産業の社会人学び直しの意義と課題
- ◆ 観光経営人材のコンピテンシーモデル(ビジネススクールのコンピテンシーは共通のラーニングゴール)
- ◆ 世界に選ばれるKYOTOで世界に選ばれる京大観光MBA

Q: リカレント教育の位置づけをどのように考えるか。

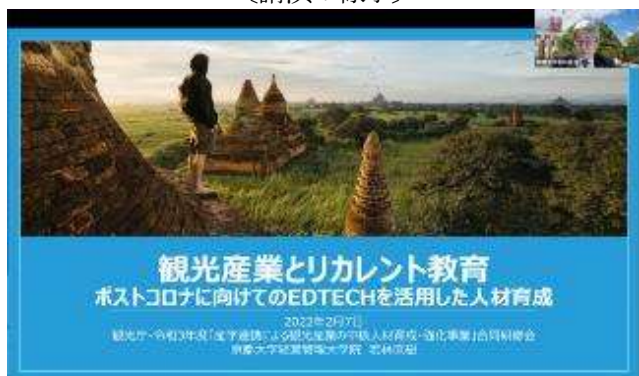
リカレント教育、働き方改革、SDGsの推進などとの関係で、社会人の学ぶ機会を作る場合、職場の理解や給料等の補助が必要だ。これは大学が講座を開催する場合の受講料徴収に関係する。政府の政策、経営判断についてどのようにお考えか？

A: 観光産業にはマクドナルド型、つまりフランチャイズ方式の経営が望まれる。

個人的に、リカレント教育を受ける受講者はアントレプレナーをめざす人が多いように思う。京都では起業家が多く出ている。投資を呼び込む必要がある。

学び直しには、スキルベースの勉強が必要。また目に見える教育が必要だ。京大では、日経ビジネススクールと連携してサービスMBA入門プログラムを提供しており、その他にもプログラム提供を行っている。

[講演の様子]



(3-3) 山口大学における優秀ビジネスプラン(1)

受講生A氏から資料に基づきビジネスプランの報告が行われた。

- ◆ 教育プログラムを受講して、心情の変化があった。
- ◆ アウトドア向けの車椅子「HIPPOcampe」がある。砂浜や畑に入ることが出来るようになる。車椅子を利用する子どもがターゲット。
- ◆ 「HIPPOcamp」をどのように広げるかが、課題でありそれをFC制で導入をする。果樹園でツアーを実施、実証をした。
- ◆ 山口県、ユーザ、アクティビティ事業者、UNITIライセンス所有者、4者がうまくいく仕組みで、アウトドア用車椅子のニーズ、市場を開発する。
- ◆ インスタグラムでの反応が良く、4日間で57件のタップがあった。インスタグラムの広告機能は安く、それを利用。ユーザのタップ率が高くコメントも多く付く。SNSは、インスタ、FBを利用している。
- ◆ 簡単な初心者向けツアーから始めているが、今後は宿泊プランにも広げていく。
- ◆ 海外からもユーザを呼び込み、山口県の活性化をねらう。
- ◆ この講座で学んだこと。①SDGs、②自分たちのプラン、③観光コンテンツのビジネスプラン、である。
- ◆ 得た成果として、①地域行政や公益団体とのネットワークが可能、②県内の人脈が広がる、③アクティビティ事業者との繋がりが出来た。

[山口大学・西尾氏からのコメント]

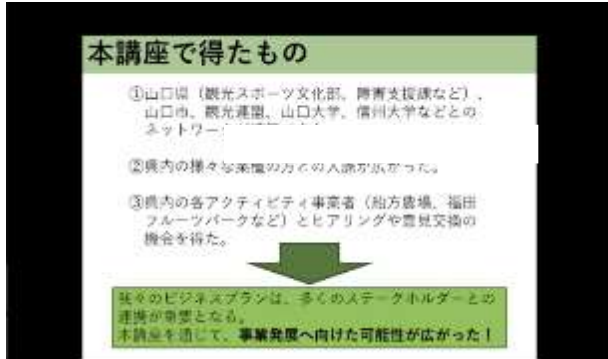
- ◆ SDGs 展開する取り組みとして始めた。
- ◆ うまくいったケースであろう。今後はライセンスの取得など克服すべき課題はある。

- ◆ 富士山の頂上まで上がった事例や水の中でも活用している事例がある。この車椅子ならどこでも行くことが出来る。

〔京都大学・若林氏からのコメント〕

- ◆ 行政、事業との連携、ソーシャルビジネスの観点がある。
- ◆ シェアリングエコミーを使った事業展開も考えられる。

〔報告の様子〕



(3-4) 山口大学における優秀ビジネスプラン(2)

受講生B氏から資料に基づきビジネスプランの報告が行われた。

- ◆ Jリーグのレノファ山口の試合観戦を含め、観戦から宿泊、観光をパッケージにしたのが、このビジネスプランである。
- ◆ 山口県内における消費は、一人あたり80,100円となる試算である。
- ◆ 広域で恩恵を受けるシステムとして、「レノファ山口エコシステム」と名付けた。
- ◆ パートナーとの協業をめざし、県内のスポーツチームに横展開していく。
- ◆ 講座を通しての学びとして、①意欲が高い方々とのつながり、②さまざまな視点、専門分野の講義を受けることが出来た、③観光、先端技術、障害者支援、スポンサー企業を得ることが出来たことである。
- ◆ またスピノフ企画等での体験、試合観戦、シーカヤック、クラブハウスの経験をする事が出来た。

〔山口大学・西尾氏からのコメント〕

- ◆ 受講生B氏は、昨年度は講師として、本年度は受講者として参加してもらった。
- ◆ ワークションの要素とB2Bの要素が含まれ、将来が期待できる。
- ◆ 滋賀大学でセミナーや講演を受けた。これらから繋がりを増やす。

〔滋賀大学・上田氏からのコメント〕

- ◆ 滋賀大学でもセミナーや講演を受けてもらった。これらからさらなる繋がりが増え、それが大きな資産となる。

Q: 他県との連携、地域の他の事業者との連携はどのようなものが考えられるか？

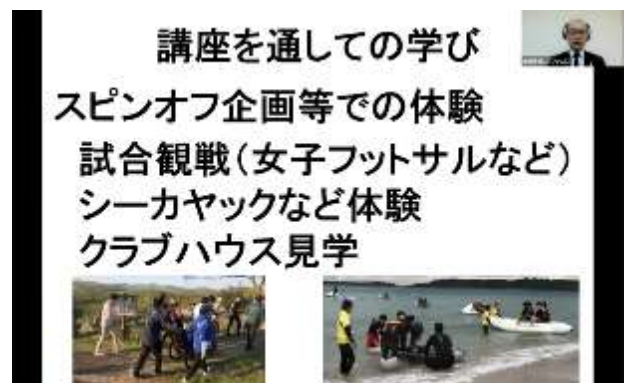
A: 観戦すると、地域の飲食で一杯サービス、お店で割引があるなどの特典を設けている。

Q: マラソンは、どうだろうか。

A: 周辺の都市でもマラソンがあり、地域にとってマラソンの集客力は魅力である。ただそこからの展開が少ないのでないだろうか。

サッカー観戦の場合、試合の後も、他の場所にまわる人が多いところが特徴だ。

〔報告の様子〕



(3-5) 受講者の事例紹介(愛媛大学・和田寿博氏)

愛媛大学・和田寿博氏の資料「愛媛大学の取り組みの紹介」に基づき、報告が行われた。

[事例1 「ポストコロナの中部・名古屋の観光 愛知と愛媛の観光・関係人口の推進」]

- ◆ 県外・中部圏居住で、本プログラムを初めて受講した。(中部在住)
- ◆ 受講生が従事する中部圏の観光物産販売事業の発展に向け、中部・名古屋の観光サービスについて紹介し、愛知と愛媛の観光・関係人口の推進を提案した。
- ◆ 本事例の特徴は、①豊富な観光資源、魅力的な観光コンテンツを盛り込む、②観光イメージの弱さから目的地となりにくいことを克服、③ポストコロナの観光の方向性を示す、ことにある。

[事例2 「ポストコロナの西条市の工芸の広報および物産販売」]

- ◆ 平成30年度に続いて、本年度も教育プログラムを受講した。令和3年に「睦 TSUMI」を起業した。(東予地域居住)
- ◆ 受講生による起業および西条市の伝統工芸継承プロジェクトの取り組みについて、受講生のHP等を使って紹介した。

[事例3 「ポストコロナの旅館の魅力開発 ファスティングプログラム」]

- ◆ 老舗旅館の女将であり、本プログラムを初受講した。(南予地域居住)
- ◆ 地域連携による取り組みと成果について紹介した。受講を通じて仲間づくりや励まし合いが進んだ好事例である。
- ◆ ファスティング(断食:体重減量)を老舗旅館の新しい魅力として開発した。

[事例4 「ポストコロナの道後のにぎわいづくり」]

- ◆ 旅館社員、他の受講生と連携して取り組んだ。(中予地域居住)
- ◆ コロナ禍により観光イベントが少ない中、旅館事業に加えバス運営を伴う旅行事業を開業し、業務を改善した。また道後地域での音楽家や子どもたちによるチンドン屋さんの練り歩きを企画・実施し、道後旅館等がSNSで広報し、市民・観光客がにぎわった。

[報告の様子]



(3-5) 閉会挨拶(観光庁)

観光庁から合同研修のまとめと閉会の挨拶が行われた。各大学の教育プログラムを受講することにより、受講者間に横の繋がりが出来、それが新たな事業開発、ビジネスになり、それが実りつつある。教育プログラムは、オンラインもあるため、是非、受講してもらいたい。今日の山口大学のビジネスプラン「アウトドア向けの車椅子HIPPOcampe」の報告にあった信州大学のユニバーサルツーリズムと連携したプログラムの創出がある様に、親和性の高い講座を受講することにより、知識の引き出しを増やして頂きたい。

2-3) 講座の枠を越えて情報交換を行える場

(1) 場の設定と提案

講座の枠を越えて情報交換を行える場として、①MS Teams、②Chatwork の2案をコンソーシアム14大学に対して事務局から提案を行った。

第1回全体会議においてその考え方と具体的な場の提案を行うとともに、令和3年9月14日(火)に、問題・課題等共有化ミーティングを実施し、14大学からコンソーシアムにおける問題・課題、教育プログラムの開発・実施における問題・課題、令和3年9月02日(木)、9月07日(火)、9月10日(金)の3回に分け、オンライン・プラットフォームに係る説明と、その実現可能性に対して検討、議論を行った。

オンライン・プラットフォームは、以下の4点をめざし、設定を行った。

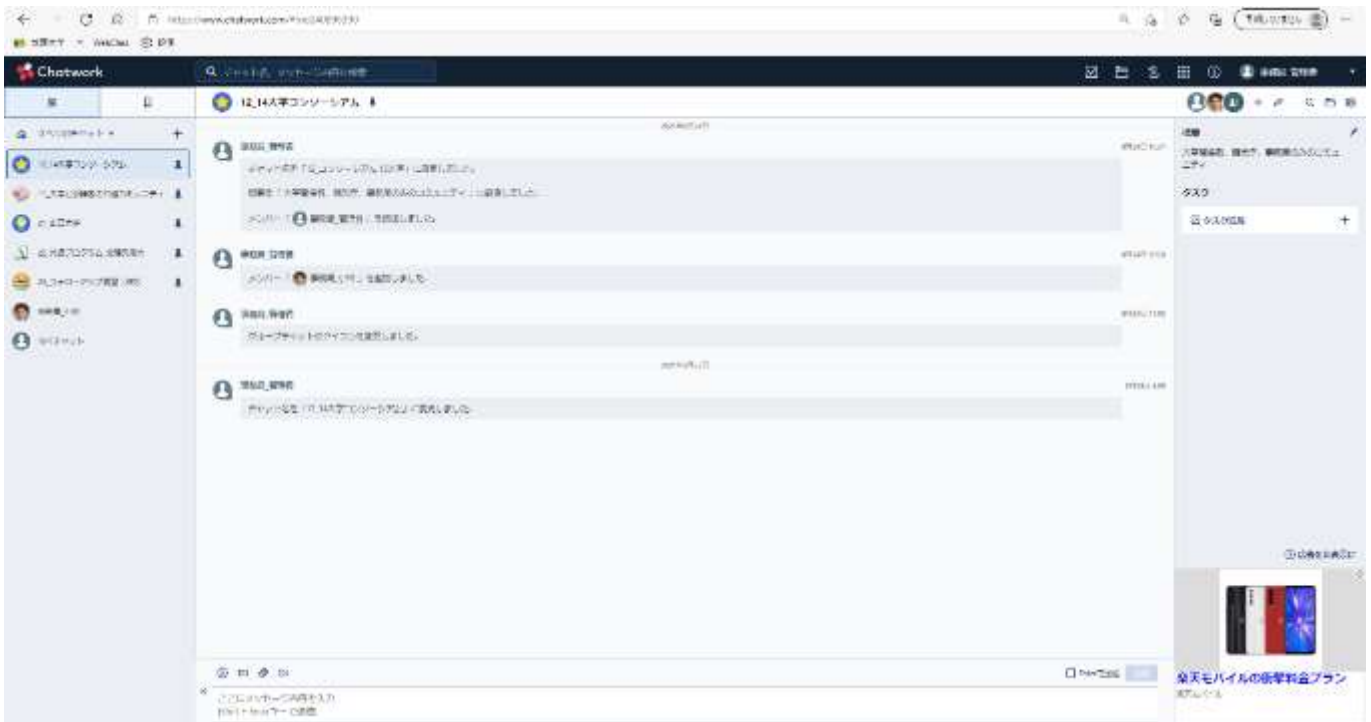
- ①ファイル交換を容易にする
- ②受講者と大学関係者が、意見交換を行える場の提供
- ③さらに当年度以降も、この関係やコミュニティを維持
- ④受講者から質問や現場で求められている事を吸い上げ、次の教育プログラムに生かす
- ⑤気づいた時、思いついた時に気軽に発信することによる利便性から、より高みの知識創造をねらう

コンソーシアム14大学の連携強化、コミュニケーションの容易な実現を図ることを想定したが、コンソーシアム14大学の過半から、判断が難しいとの意見を受け、下記の設定を行ったが活用していくためには課題が多い状況である。

(2) 提示を行った場

現在、コミュニケーション、協業、協働を容易にするためのグループウェアが多く出現している。その中から、低コスト、アクセスの容易さ、使いやすさ等から Chatwork を導入することを試みた。本年度は使用されることなく終わることとなったが、コンソーシアム14大学の連携や来年度以降の教育プログラムの改良、実施、各大学間の協業などを考えるに有効なツールとなり得るものとする。来年度以降の課題のひとつである。

■ [図2 Chatwork のポータル画面]



3章 フォローアップ調査

令和3年度

『産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務』
事業実施報告書

3章

フォローアップ調査

3章 フォローアップ調査

フォローアップ調査対象は、3校である。令和元年度(2019年度)から令和2年度(2020年度)まで、行政からの補助を受け教育プログラムの開発と実施を行い、令和3年度(2021年度)から補助なく各採択校自身により運営資金を確保し、自走化を開始した。その3校の今年度の実施状況を調査するとともに、今後も自立的に自走し、教育プログラムを持続的に実施するための課題等を明らかにすることを目的に、フォローアップ調査を行った。

フォローアップ調査では、以下の2つを実施した。

- 1) 令和3年度の教育プログラム実施体制等の調査(対象3校の教員、事務員に対するインタビュー調査)
- 2) 受講者へのインタビュー調査(対象3校の講座を受講した受講者に対するインタビュー調査)

3-1) 令和3年度の教育プログラム実施体制等の調査

(1) 目的

自走化を開始した3校において、今年度の実施状況を調査し整理すること、来年度以降も継続し本教育プログラムを実施するための課題等を抽出する。

(2) 調査対象大学(3校)

フォローアップ調査の対象となる大学は、以下の3校である。

- a. 愛媛大学
- b. 滋賀大学
- c. 北陸先端科学技術大学院大学

(3) 調査記録

本フォローアップ調査「1) 令和3年度の教育プログラム実施体制等の調査」は令和3年12月23日に、3校の教員や事務員にオンラインにて調査を行った。滋賀大学および北陸先端科学技術大学院大学においては、完了していない一部の講座が残る時点での調査となっている。

(3.a) 愛媛大学

■名称

愛媛大学観光サービス人材リカレントプログラム
(The recurrent program 2021 for personnel of tourism service)

■概略

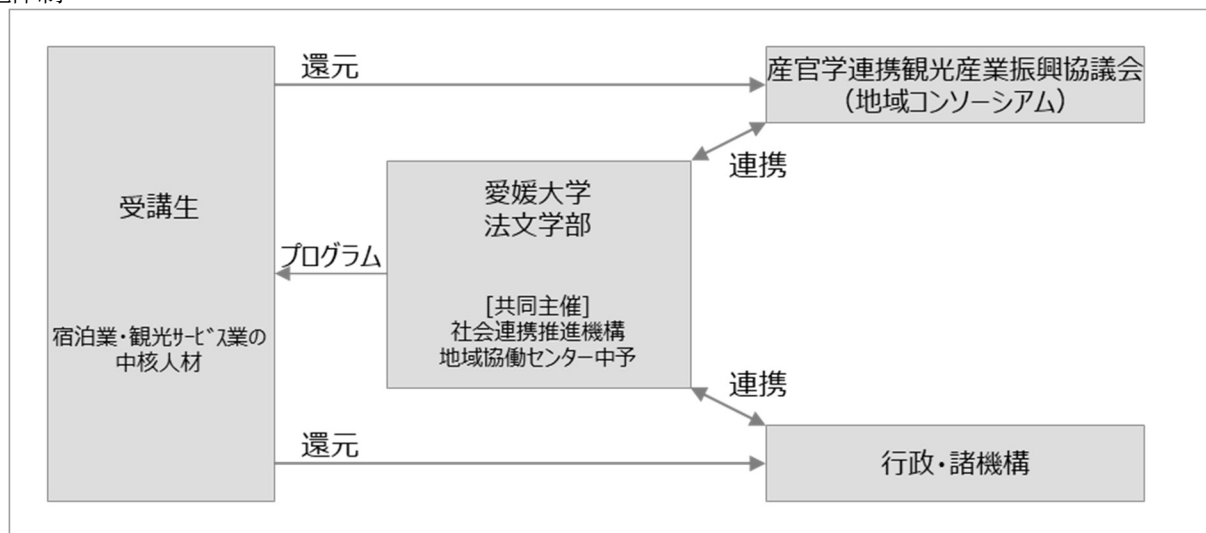
愛媛大学の令和3年度(2021年度)の教育プログラムは第6期となる。事業の実施部局は法文学部が担い、社会連携推進機構が支援し、地域コンソーシアム産官学連携観光産業振興協議会と連携し実施している。平成27年度の経済産業省の事業への参加以降、第4期中期目標期間において社会連携推進の一環として3期の事業を実施し、第4期以降は愛媛大学独自の事業として自走化、第4期・第5期期間には本事業に参加した。愛媛大学は多様な社会人を対象としたリカレント教育を展開しており、令和3年3月に設置した地域協働センター中予は観光人材育成による観光業の振興、地域振興に取り組んでいる。なお産官学連携観光産業振興協議会(令和3年度 会長:道後プリンスホテル社長・河内広志氏)は道後温泉旅館協同組合等の団体や個人が参加する地域コンソーシアムである。

これまで6期連続して受講者を輩出し、地域のネットワークを築く中核人材を育成している。地域における成果や成功事例が、これから出現することが期待される。

- ・理念:観光サービス業を、21世紀世界を牽引する地域と日本の基幹産業に発展させる。
- ・目的:ポストコロナに飛躍するため、主題を「ポストコロナの観光サービス向上」とし、リカレント教育(社会人の学び直し)を通じて、観光産業の振興と地域社会の多様かつ持続的な発展をめざす。
- ・主題:ポストコロナの観光サービス向上

実施時期	令和3(2021)年9月～令和3(2021)年12月
受講料	無料
受講者	本年度14名(予定定員10名) 愛媛県を中心に募集
方式	オンライン(コロナ禍により全講座をオンラインに設定)
授業時間数	全5回(および希望者に対する遠隔レッスン) 計28時間(オンライン3時間+授業15時間+自学10時間=28時間)

■実施体制



■対象とする受講者

- ◆ ①愛媛県・瀬戸内地域の観光サービスについて初めて学ぶ人
- ◆ ②観光地経営・旅行・交通・宿泊・飲食・物産販売等、観光サービス業についての学習経験や職業経験のある人(観光ボランティア、管理者、経営者、起業家、観光団体関係者)

■特徴

- ◆ ①社会人の学び直し(recurrent learning)を支援
講座は受講生が社会人の学び直しを楽しく意欲をもって取り組めるように目標実現を支援する。特に教育課程充実、交流促進、成果還元などを工夫する。
- ◆ ②教育課程(curriculum)の充実
講座は座学(講演)と実学(ワークショップ、視察)から構成し、双方向性・実践性・持続性を充実させる。特に宿泊業のケーススタディ、観光業の視察(対談に切り替え)、演習、受講生の研究・開発と発表等によって専門性・実践性を充実させる。加えてコロナ対策、SDGs推進と観光サービス業振興を工夫する。
- ◆ ③講師の魅力
講座は講師・助言者に大学教員、観光サービス業経営者、産官学連携観光産業振興協議会会員、観光省庁職員等を招聘して学術性・専門性・国際性・総合性等による魅力を高める。特に講師や助言者との対話を工夫する。
- ◆ ④交流の促進
講座は受講生と講師、関係者および受講生同士の交流を促進。特に講座での交流および講座を通じた持続的で多様な交流を工夫する。
- ◆ ⑤成果の還元
講座は修了をもって修了証を発行し成果を還元する。また受講生の研究・開発が人材育成、観光サービス業振興、まちづくりに還元されるように工夫する。
- ◆ ⑥産官学連携観光産業振興協議会の協力
愛媛大学は道後温泉旅館や愛媛県の観光サービス業の経営者などで構成する地域コンソーシアム産官学連携観光産業振興協議会等と連携し、社会人の学び直しのための人材育成講座の研究・開発、計画・実施・評価を行い、観光サービス業を地域の経済と社会を担う主要産業として振興してきた。本講座は前年度講座を継承し、受講生を儲かる観光サービス業を担う中核人材として育成する。講座は愛媛大学とコンソーシアム産官学連携観光産業振興協議会が連携して研究・開発、計画・実行・評価、教材等を開発する。特に講師・助言者の推薦や担当および交流の協力を要請。

■独自の取り組み

- ◆ 観光サービス業経営者・関係者等を講師に招聘する
- ◆ 修了証を発行し、職場の人事評価で活用可能とする

■創出する人物像(能力)

- ◆ 地域の観光サービス業に関する理解
- ◆ 儲かる観光サービス業の実態把握・政策立案・経営方針の構築と試行
- ◆ 観光サービス業関係者の連携の促進

■本年度のプログラムにおける工夫

- ◆ 令和2年度の観光中核人材育成講座とプログラムの経験を活かし、全5回の授業を遠隔形式で実施した。
- ◆ 広報により松山市をはじめとする中予地域に加え、遠方の東予地域、中予地域及び関西圏、中部圏に居住する受講生からの参加があった。また留学生(学部既卒・研究生)が始めて受講した。
- ◆ 第1回授業はコロナ禍で模索する受講生の交流をふまえ、激励することを重視して実施した。
- ◆ 第2回授業(ケーススタディ)は小樽商科大学と共催し、企画立案、道後旅館の調査及び教材作成、授業進行などを両大学で実施した。
- ◆ 第3回・第4回授業は視察を予定したがコロナ対策のため実施できなかったが、現地を拠点に遠隔形式で授業を実施した。
- ◆ 第5回授業は受講生の研究開発と発表の機会とし、主題にあった取り組みが紹介され、職場の経営に採用されたものも生まれた。

■本年度に労を要した点等

- ◆ 本学のコロナ対策をふまえた事業の企画立案、予算配分、実施主体などの確立。
- ◆ コロナ禍で事業を実施するための主題、講師、会場、担当職員などの設定。
- ◆ コロナ禍で模索する受講生の交流をふまえ、激励することを重視して実施した。
- ◆ 遠隔形式の授業は前年の観光中核人材育成講座とプログラムの経験を活かして実施したが、本年度は担当職員の出勤時間と経験不足などをふまえた対応が必要であった。
- ◆ 第2回授業(ケーススタディ)は小樽商科大学と共催し、内容は充実したが、手厚い準備を行った。

- ◆ 第2・3・4回は視察先を拠点に遠隔形式で授業を実施し、コロナ対策に努めた。
- ◆ 第5回授業の研究開発と発表にあたり受講生と事前準備を行った。
- ◆ コロナ禍での事業実施に当たり、他大学との交流機会が少なく、観光庁、コンソーシアム事務局、小樽商大との交流は貴重な機会になった。

■キーワード

- ◆ 観光サービス人材
- ◆ リカレント教育(社会人の学び直し)
- ◆ 産官学連携
- ◆ ポストコロナ
- ◆ SDGs
- ◆ 道後・松山・愛媛県・四国・瀬戸内

■標語

- ◆ 遠隔で楽しく学ぶ！
- ◆ 優れた講師！
- ◆ 仲間ができる！
- ◆ ポストコロナに対処する！
- ◆ SDGs 推進
- ◆ 持続的に発展する！

■本年度のプログラム

	日時	形式	題	概要
開講式	9月28日(火) 13:30~14:00	-	ポストコロナの 観光サービス向上	主催者挨拶：愛媛大学社会連携推進機構地域協働センター中予センター 来賓挨拶：産官学連携観光産業振興協議会
1	9月28日(火) 14:00~15:00	講演	総合研究	ポストコロナの観光サービス業と人材育成 愛媛大学法文学部・教授兼地域協働センター中予
	9月28日(火) 15:00~16:30	ゼミナール	総合研究	SDGsと観光サービス向上 産官学連携観光産業振興協議会会員
2	10月22日(金) 13:30~15:00	ケーススタディ	旅館業研究	道後温泉旅館・大和屋本店の観光まちづくり 小樽商科大学グローバル単体各推進センター産学官連携推進部門
	10月22日(金) 15:00~16:00	講演	旅館業研究	大和屋本店の経営とまちづくり 大和屋本店
	10月22日(金) 16:00~17:00	ワークショップ	旅館業研究	産官学連携観光産業振興協議会会員
3	11月02日(火) 13:30~17:00	講演	事例研究1	Fasting & Health Tour (食と健康の旅) 有限会社松屋旅館
		講演	事例研究1	宇和町のまちなみの魅力 西予市文化の里施設
		ワークショップ	事例研究1	愛媛大学社会共創学部兼地域協働センター南予
4	11月25日(木) 13:30~17:00	講演	事例研究2	周知北工芸の旅 えひめ伝統工芸士第229号・だんじり彫刻師
		講演	事例研究2	自治体の枠組みを超えたいしづちエリアの観光振興 株式会社ノヤマいしづち企画管理部
		ワークショップ	事例研究2	愛媛大学地域協働センター中予・副センター
5	12月07日(火) 13:00~15:00	研究・開発 と発表	研究と発表	ポストコロナの観光サービス向上の研究・開発 愛媛大学法文学部兼地域協働センター中予 産官学連携観光産業振興協議会会員
修了式	12月07日(火) 15:00~15:30	-	-	主催者挨拶：愛媛大学法文学部長

随時	9月21日(火) 9月28日(火)他 19:30~20:30	遠隔型 授業レッスン	(希望者)	遠隔型(オンライン)授業の接続およびSNSのレッスン
----	--------------------------------------	---------------	-------	----------------------------

■本年度のプログラム(補記)

回	形式	内容
第1回	講演1	本講座の序論としての総合研究である。日本の観光サービス業は内外からの観光客の多様なニーズに対応する一方、働き方改革や人材育成等の課題を生み出している。またコロナ対策、SDGs推進は喫緊の課題である。主題はポストコロナの観光サービス業と観光人材育成、講師の和田氏は近年の観光サービス業の動向と観光中核人材育成、ポストコロナの観光サービス向上、大学の講座の支援ならびに産学連携による自立・持続可能な仕組みづくりを解説する。 *キーワード：観光サービス向上 観光中核人材育成 コロナ対策 産学官連携
	講演2	主題はSDGsと観光サービス向上、講演1を受け、ゼミナール形式で受講生の交流を行う。また講師の和田氏、産官学連携観光産業協議会が受講生の交流をふまえて対談し、質疑応答に答える。 *キーワード：観光サービス向上 SDGs 観光中核人材育成
第2回	ケーススタディ	受講生は当日までにケーススタディ教材『道後温泉・大和屋本店の旅館経営』を読み、当日は小樽商大教員のレクチャーをふまえ、受講生が旅館経営について交流した。
	講演(講評)	大和屋本店は受講生の質疑に答える形で講評し、さらに受講生の質疑応答に答える。 *キーワード：道後温泉・大和屋本店の旅館経営 人づくり・宿づくり・まちづくり
第3回	講演1	(教員は西予市宇和町の松屋旅館などを拠点に遠隔授業を行う) 主題は「Fasting & Health Tour(食と健康の旅)」、講師は有限会社松屋旅館、老舗旅館の「食と健康の旅」など新たな試みを学ぶ。 *キーワード：宇和町 老舗旅館 食と健康 まちづくり
	講演2	主題は「宇和町のまちなみの魅力」、講師は西予市文化の里施設。 まちあるきをしながら魅力をお聞きする。愛媛大学地域協働センター南予の活動に触れる。
	ワークショップ	愛媛大学社会共創学部兼地域協働センター南予が助言を行う。 *キーワード：宇和町 老舗旅館 食と健康 まちづくり
第4回	講演1	(教員は西条市を拠点に遠隔授業を行う) 主題は「周旋と工芸の旅」、講師は、えひめ伝統工芸士第229号だんじり周旋師。 道後飛鳥乃湯の周旋も手掛けている。西条祭りに欠かせない周旋を学ぶ。 *キーワード：西条市 周旋 まちづくり
	講演2	主題は「自治体の枠組みを超えたいしづちエリアの観光振興」、講師は株式会社ソラヤマいしづち。石鎚山など自然体験ツアーを学ぶ。まちあるきをしながら魅力をお聞きする。愛媛大学地域協働センター西条の活動に触れる。
	ワークショップ	愛媛大学地域協働センター中予が助言を行う。 *キーワード：西条市 自治体連携 石鎚山 自然体験
第5回	研究・開発と発表	研究・主題は「開発と発表：ポストコロナの観光サービス向上の研究・開発」。 受講生がプログラムの学びを活かし、観光サービス向上の提案を行い交流する。 助言者は、愛媛大学法文学部兼地域協働センター中予、産官学連携観光産業協議会会員。 *キーワード：観光サービス向上 観光中核人材育成

■本年度の受講者数

〔本年度の受講者〕

宿泊	4
旅行	1
物産	2
企画	1
休職	2
振興	2
ボランティア	2
計	14名

男性	9
女性	5
計	14名

20代	3
30代	1
40代	4
50代	2
60代	2
70代	2
計	14名

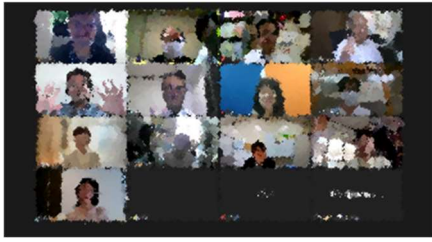
〔本年度の受講者の特徴〕

・オンラインにより、中予以外の東予・南予・県外からの受講者が参加可能となった。過年度のリカレントプログラムにはなかった受講者の居住地/就労地も受講者に加えることが出来た。

■受講者の研究

研究主題	属性	居住
ポストコロナの宿泊業の予約管理	宿泊業勤務	中予
宿泊業の旅行業企画	宿泊業勤務	関西
旅館業のファスティングプログラム	宿泊業勤務	南予
旅館業のファスティングプログラム	宿泊業勤務	中予
観光地の物産販売	物産販売	中予
西条市の民芸振興	観光まちづくり	東予
家族旅行と道後旅館への提案	公共機関	中予
名古屋の観光需要	物産販売	中部
松山の観光滞在の延長	就活	中予
地域に根差す新しい旅行	起業家	中予
ポストコロナの松山の観光ボランティア	観光ボランティア	中予
今治の地域振興と観光	地域振興	東予
観光英語ボランティア	観光ボランティア	中予
ポストコロナの韓国人の日本観光	就活	中予

■令和3年度 講座の実施風景等
〔第1回と開講式〕



〔第2回後の視察〕



〔第3回〕



〔第3回〕



〔第2回〕

〔第3回〕



〔第3回〕



〔第2回〕

〔第3回〕



〔第5回と修了式〕



〔受講者の提案により実現した「にぎわいづくり」〕



〔教育プログラムに対し連携、協力をいただいた地域団体「産官学連携観光産業振興協議会」〕



■ 来年度以降の課題

	領域	課題	補足
1	教育プログラム全般	学内における事業の位置づけ（再確認）、予算配分、事務局（担当者配置）の拡充が課題である。	愛媛大学は地域協働センター中予を設置し、観光人材育成を進めている。 https://chiikijn.ccr.ehime-u.ac.jp/
	事業実施と予算	令和3年度は、本学カレント事業30万円の予算を受けプログラムを実施した。本事業の位置づけと予算の継続的確保が課題である。	－
2	受講者	産官学連携観光産業振興協議会他との交流、そして受講生の安定受講や終了後の地元観光業での活躍が課題となる。 コロナ禍の観光業界には人材投資余力はない。したがって受講料を徴収することは厳しい。受講料を個人が支払うことも厳しい。 外国人・留学生の受講を進める。	－
3	シラバス	学部・院の授業に観光人材育成を位置付けることを検討中。	－
4	講座企画	研究は講義録などを作成しており、これを出版物にする、そのために予算を確保することが課題。 出版物を買ってもらうこと：協力金などを検討。	コロナ禍のため遠隔形式で実施したが、今後、対面を主とした遠隔の実施を検討。
5	受講者の能力	コロナ禍においては約3カ月に全5回の授業の開催が適格的だが、学びや仲間づくりなどの質の拡充を図る。	年間を通じて前期5回、後期5回などを実施したいところだが、コロナ禍と本学のコロナ対策のため困難。
6	教育プログラム実施	コロナ禍のプログラムとしてプログラムを更新する。 外国人・留学生の受講を進める。	修了生の満足度が高い。また次年度の受講などの意欲がみられる。外国人・留学生の受講希望や日本人受講生の交流希望がある。
7	教育プログラム実施後	修了生が研究・開発を職場の経営改革に活用する。	12-1月の観光需要回復において活用された。
8	その他	本学・学部・機構・センターなどの概要に合わせ更新する。 この教育プログラムを継続するための資金確保を検討している。 例えば、出版物を買ってもらうこと＝協力金、スポンサー、応援団として出資してもらうなど。 産官学連携観光産業振興協議会と連携し、企画立案や講師派遣などの支援を得ている。また協議会と観光庁・コンソーシアム事務局との交流は本学の事業や当地の理解にとって貴重な機会になる。	講義録などを作成しており、研究成果としてこれを出版物にすることを検討中。（そのための予算は別途必要）

■ 要望等

1	行政 (中央)	観光人材育成事業として国費補助、財政出動を願いたい。 観光人材育成講座への助成、交流会、視察などの呼び掛けも必要であろう。 さらに、講師派遣、交流会の主催も願いたい。	本事業で2年補助金を得ることは出来たが、大学取組が厳しくなっており、自走は簡単ではない。 行政は、大学、産業界と懇談を行い、地域の実情をつかみ、適切な予算配分を願いたい。
	行政 (地方)	愛媛県知事、松山市長は観光振興に熱心であり、期待が大きいことだ。更なる大学との連携を求める。 石川県などの例から、自治体の補助などを確立するため、観光庁事業を自治体に紹介するため、懇談機会を持ちたい。	（例：観光人材育成講座への補助など、現在は講座への講師派遣の協力を留まる）
2	観光産業	講師派遣への協力、助言、資料提供を求めたい。 大学の授業の講師を受けてもらいたい。また、観光振興づくりの懇談等にも積極的な参加を求めたい。	道後温泉地区、松山市における業者の連携は出来ている。 （平成16年の産官学連携観光産業振興協議会発足以降、大学との連携、大学・学生・若者の知恵を活用する、アルバイトや就労を目指すなどの経路がある。）
3	大学	本学の第5期中期計画期間における事業の位置づけを行う。学部・院の授業に観光人材育成を位置付けることを考えたい。（これはまだ教務担当委員が動かない）研究は講義録などを作成しており、これを出版物にする、そのための予算確保することが課題である。 中核人材の教育に加え、その前にあたる基礎教育も必要だ。	令和4年から国立大学法人の第4期中期計画に観光人材育成事業を組み込み、本学は理念としては座っているが、予算が欲しい。 また教員の教育を進めないと、この教育事業は持続できない。

(3.b) 滋賀大学

■名称

ウエルネスツーリズムプロデューサー養成講座 2021
(WELLNESS TOURISM PRODUCER SCHOOL 略称: WTP)

■概略

ウエルネスツーリズムは、自然散策、ヨガ、瞑想、フィットネス、スパ、食、レクリエーション、交流 などを通して、地域の資源に触れ、心と身体をリフレッシュし、明日への活力を得る旅のことである。

滋賀大学が立地する滋賀県は、平成27年に平均寿命で男性が全国1位、女性も4位となり、長寿県としてクローズアップされた。琵琶湖を中心に自然や文化資源が豊富で、県民が積極的にウォーキングやサイクリングなどの健康維持活動、スポーツに親しみ、禁煙や発酵食品など普段から健康や食にも気を配っていることが理由としてあげられる。ウエルネスツーリズムを展開するいい条件にある。シニアや外国人がツーリズムの主体となるなか、ウエルネスツーリズムは、これまでの観光の形態を滞在、体験型に変革していく大きな可能性を有している。また、アフターコロナ時代のツーリズムに関して、免疫力の強化に寄与するウエルネスツーリズムが旅の主流になることが期待される。本講座は、実践的なプログラムを通じて、事業創出、事業実施を推進する中核人材の創出、育成を図るものである。

実施時期	令和3(2021)年8月～令和4(2022)年1月
受講料	無料
受講者	本年度21名(予定定員15名) ホテル・旅館、観光産業、サービス産業や医療・福祉法人に従事している方 観光産業に新規参入を考えている方、観光戦略立案に関わる行政や関係機関の担当者
方式	対面およびオンライン(ハイブリッド方式) (第1回から第3回まではオンライン、以降は対面にて実施)
授業時間数	全9回

[令和3年度 観光人材育成事業 概要図]

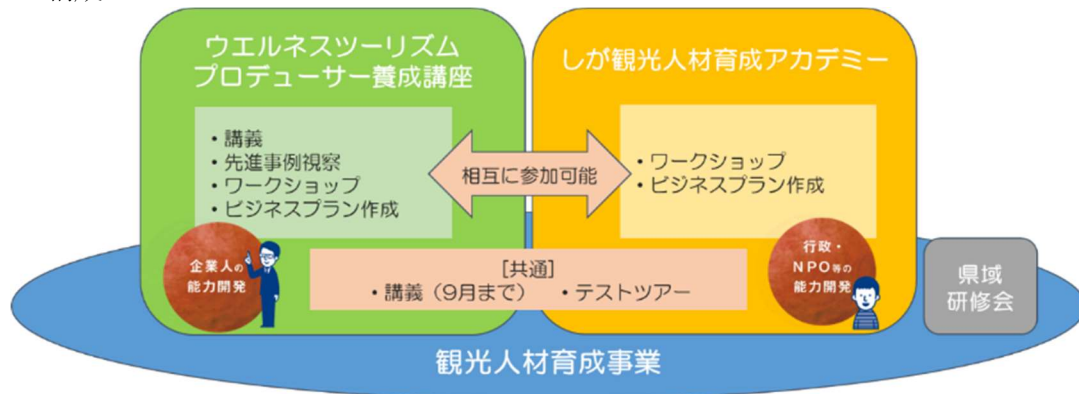


■実施体制



- ◆ 修了生に対して、滋賀大学学長名で修了証書を発行。
- ◆ 後援として、滋賀県、滋賀経済同友会、滋賀県旅館ホテル生活衛生同業組合、公益社団法人びわこビジターズビューロー、一般社団法人近江ツーリズムボード、滋賀銀行、関西みらい銀行、滋賀中央信用金庫、京都銀行、SOMPO ひまわり生命保険株式会社が参加している。これらの組織・団体は、ビジネスプランの発表時における審査員となっている。

■プログラムの構成



■特徴

滋賀大学の特徴は、「新しい観光ビジネスを創造」することにある。下図にあるように、観光産業(宿泊事業者、飲食事業者、交通事業者、旅行代理店、観光協会)が、地域の産業(ヨガインストラクター、病院医療関係者、ITベンダー、健康関連事業者、地域活性化プランナー)と結びつくことによるビジネス創造を、本講座を通じて地域資源の発掘や磨き上げによるビジネスプランの創出を目指している。

また、本学が独自に行う「観光人材育成等地域支援事業(アカデミー)」と本事業「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化(WTP)」を相乗りとし、講座を相互乗り入れにすることによって基礎講座、共通講座を同時に開講するなど、自走化、持続的な取り組みを可能とする工夫を行い、広範に地域の観光人材の育成に取り組んでいる。

多様な人材で新しい観光産業を創る

狭義の観光業界のみならず、様々な業界の知見を集結させ、ワンチームで新しい観光ビジネスを創造



業種を超えたコラボレーション

- ◆ アカデミー、WTPともにそれぞれ2年間実施、今年度から相互乗り入れで開始
- ◆ 観光協会、観光事業者、地域の産業を混ぜることによる誘発、創発をねらう

- ◆ ウェルネス＝観光イノベーションと位置づけ、事業者との掛け合わせ
- ◆ ウェルネスは、広がりが大きく、さまざまな事業創出が期待できる
- ◆ ウェルネスは、県が提唱しているシガリズム＝滞在型の観光、にも近く親和性が高い
- ◆ プランを考え、実装するところまでを本講座のめざすところとしている

■ 修了条件

- ◆ ①原則として全講座の受講
- ◆ ②ビジネスプランの発表
- ◆ ③講座での積極的参加
- ◆ 講師・アドバイザー等で組織する認定委員会が評価

■ 独自の取り組み

- ◆ 来年度(4年目)は、また新たな試みを検討。
- ◆ 企業を後援に入れ現実的なプラン創出をねらう(将来的な融資も視野に入れ、ビジネスプランの模擬発表の審査員に金融機関が入りブラッシュアップをしている。)
- ◆ 地域と金融機関の結びつきを作る。

■ 創出する人物像

- ◆ ゲームチェンジャーを養成することをめざしている。
- ◆ 学部講座(アントレプレナーシップ)+WTPによって、素早くいろいろなものを作ることが出来る人材を作る。

■ 本年度のプログラムにおける工夫

- ◆ 観光協会、観光事業者、地域の産業を混ぜ合わせ、新たな関係性、イノベーションが生まれることを考えた。

■ 本年度に労を要した点等

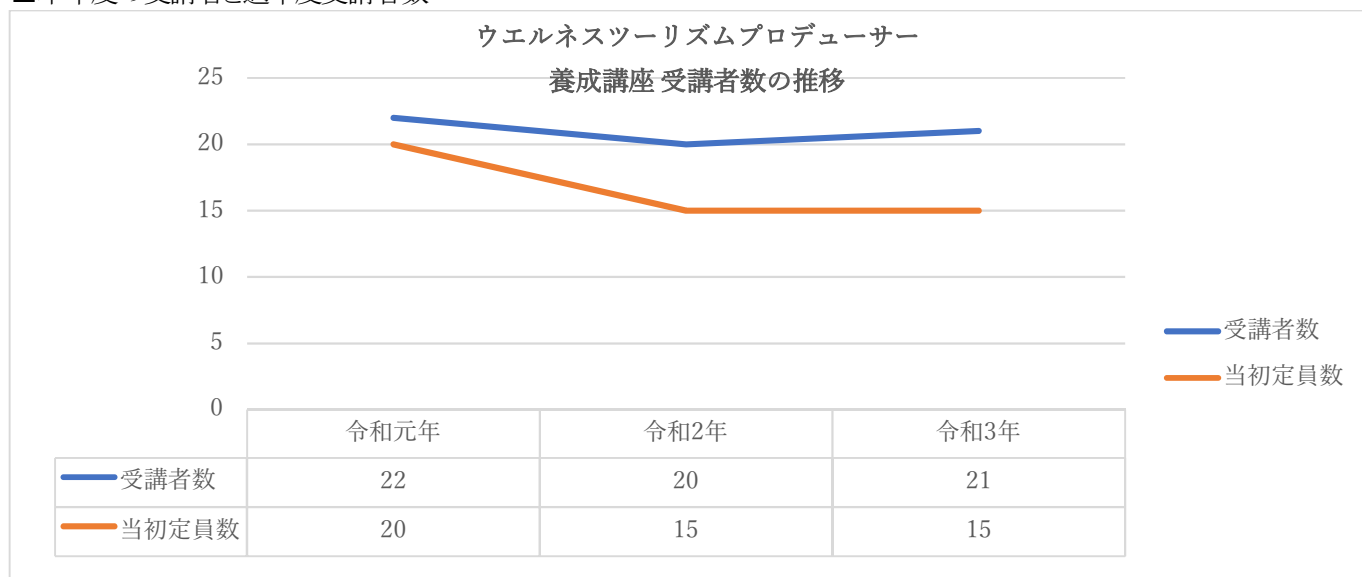
- ◆ 多種多様なバックグラウンドを持った受講生がいるため、細やかなニーズの把握に苦慮。
- ◆ 新型コロナウイルス感染拡大や、緊急事態宣言等の発令により、観光業界全体の沈下による関係者の意欲の低下、及び対面でのカリキュラム実施が制限されるなど、感染症対策の徹底に苦慮。

■ 本年度のプログラム

	日時	形式	題	概要
1	08月18日(水) 09:30~16:00	講演 ワークショップ	アフターコロナ時代のニューツーリズムを考える	講演①「日本の観光政策と人材育成について」観光庁 講演②「コロナ禍におけるウェルネスツーリズムの重要性」NPO 法人日本ヘルスツーリズム振興機構/兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学 講演③「アフターコロナのツーリズムの変化と求められる人材」滋賀大学産学公創対峙推進機構 ワークショップ：地域事業プランの課題提示
2	09月01日(水) 09:30~14:00	講演 ワークショップ	アフターコロナ時代の地域観光戦略を知る	講演①「観光危機管理」株式会社 JTB 総合研究所コンサルティング事業部地域戦略部 講演②「観光とデータサイエンス」滋賀大学データサイエンス学部 講演③「観光のマーケティング」静岡県立大学経営情報学部経営情報学科 ワークショップ
3	10月18日(月) 10月19日(火) 10月26日(火)	体験プログラム ワークショップ	テストツアーから考える	テストツアー概要 体験プログラム①「金勝寺苔フィールドワーク/ホースセラー」 体験プログラム②「ホースセラー/ヨガ(TCCセラーパーク内)」 体験プログラム③「金勝山での森林浴ヨガ/ホースセラー」 ワークショップ
4	09月26日(月) 09:30~12:30	講演	地域の資源やトレンドを学ぶ	現代人のストレスとリトリートの必要性 森とこころの研究所 所長 運動・瞑想・健康 滋賀大学 教育学部 教授 発酵・食べる力・生きる力 発酵・料理家

5	10月12日(火) 10月13日(水)	合宿	先進事例を学ぶ	神戸みなと温泉連(プログラム体験、講義) 神戸みなと温泉 連 多可の森健康ウォーキング(宿泊、プログラム体験、講義) 多可の森健 康協会 (講義) ウエルネスツーリズム 滋賀大学 産学公連携推進機構社会連 携センタープロジェクトアドバイザー ワークショップ
6	10月27日(水) 09:30~16:00	講義 ワークショップ	ビジネスプランを創る 1	商品企画の要諦 関西国際大学現代社会学部助教受 ビジネスプランの創り方 滋賀大学産学公連携推進機構特任教受 ワークショップ
7	11月17日(水) 09:30~16:00	講義 ワークショップ	ビジネスプランを創る 2	健康経営とは SOMPO ひまわり生命保険 ワークショップ
8	12月15日(水) 09:30~16:00	発表 ワークショップ	ビジネスプランを創る 3	模擬発表会 ワークショップ
9	01月19日(水) 13:00~17:00	発表 修了式	ビジネスプランを発表する	ビジネスプランコンテスト 修了式

■本年度の受講者と過年度受講者数



[令和元年の受講者]

業種分類	受講者数
観光代理店	1
異業種	1
異業種	1
宿泊事業	1
異業種	1
宿泊事業	1
宿泊事業	1
宿泊事業	1
異業種	1
宿泊事業	1
異業種	1
異業種	1
宿泊事業	1
観光事業	1
異業種	1
観光事業	1

[令和2年の受講者]

業種分類	受講者数
ヘルスケア業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業(宿泊)	1
観光事業	1
観光事業(スパ)	1
ヨガインストラクター	1
観光事業	1
観光事業	1
ヘルスケア業	1
観光事業(宿泊)	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1

[令和3年の受講者]

業種分類	受講者数
音声配信業	1
ヨガインストラクター	1
鍼灸師	1
観光事業	1
医療	1
観光事業	1
宿泊業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1
観光事業	1
宿泊業	1
観光事業	1
大学院生	1
観光事業	1
宿泊業	1

観光事業	1
観光事業	1
観光代理店	1
観光事業	1
宿泊事業	1
異業種	1
計	22名

観光事業（宿泊）	1
ヘルスクエア業	1
建築業	1
観光事業	1
－	－
－	－
計	20名

教育業	1
観光事業	1
ヘルスクエア業	1
観光事業	1
観光事業	1
－	－
計	21名

先進事例視察先 ADVANCED CASE STUDY

神保みなと温泉 麓
山と海に囲まれた異国情緒あふれる観光地。神戸、京都神で第一の観光地を目指して、温泉を堪能しながら、ウエルネスウォーキングをはじめとするさまざまなプログラムを体験します。



多可の森林療ウォーキング
多可町の豊かな自然を活用し、健康を創出しながら自分のペースでゆっくりウォーキングです。ただ歩くだけでなく、森林セラピストやカウンセラーのアクティビティを取り入れ、心身にリフレッシュできる内容です。





会場アクセス ACCESS

滋賀大学 大津サテライトプラザ
〒520-0056 大津市末広町1番1号
(JR大津駅前 日本生命大津ビル4階)
Tel / Fax 077-524-3682



JR琵琶湖線(東海道本線)「大津駅」下車、徒歩約1分

滋賀大学 彦根キャンパス
〒522-8522 彦根市馬場1丁目1-1
Tel 0749-27-1141 / Fax 0749-27-1431



JR琵琶湖線(東海道本線)「彦根駅」西口より、運行バス(約8分)にご乗車ください



お申し込み 下記の Web サイトの応募フォームへアクセスし、必要事項を入力してお申し込みください
滋賀大学ウエルネスツーリズムプロデューサー養成講座 特設 WEB ページ
<https://www.shiga-u.ac.jp/wtpschoo>
お申し込み締め切り 2021年 7月1日(木) 17時

選挙結果は、全国に2021年7月6日(火)16時までにご連絡します

滋賀大学 国立大学法人滋賀大学 産学公連携推進機構
 「ウエルネスツーリズムプロデューサー養成講座」事務局 (北川、上田)
 wtp-school@biwako.shiga-u.ac.jp ☎0749-27-1141 電0749-27-1431

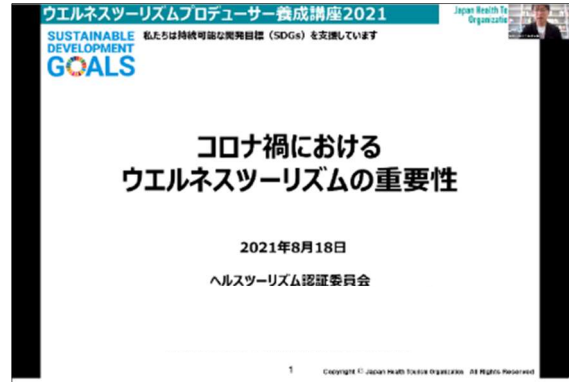
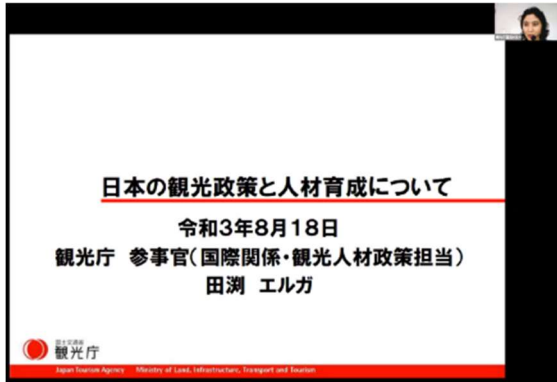
■本講座修了後の受講者からの声

滋賀大学ではWTP講座修了後に受講者にアンケート調査をしている。その中の「受講者の変化」項において、受講者から寄せられる声は積極的なものばかりであり、WTPが受講者に与えた影響、有益性の大きさが現れている。その結果を下に紹介する。

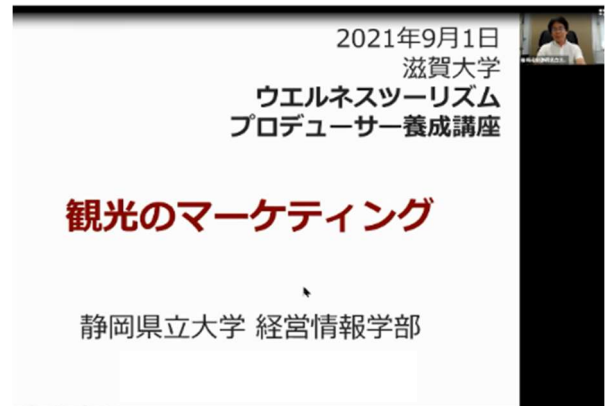
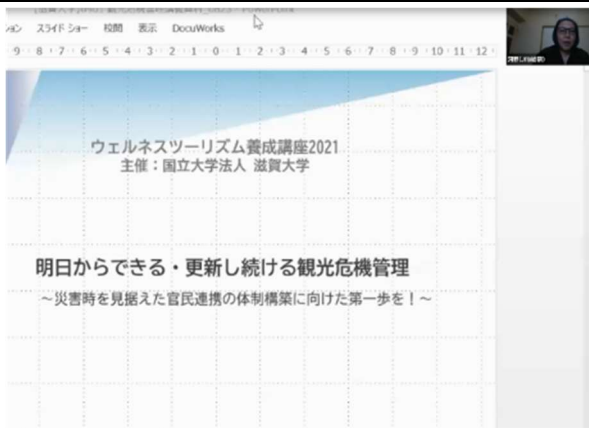
ツーリズムではありませんが、お陰様で、WTP で出会った仲間と仕事をして、滋賀県の補助金を頂きながら、臨床研究を実施（その結果、全日本病院学会雑誌の最優秀賞に選出）。
講座でご一緒させて頂いた皆さまとのつながりができ、何かあれば聞くことができるので心強い。
いつか実現したいと歩んできた事業化が、WTPの学びと繋がりの中で加圧し実現しつつある。
講座の皆さまとの交流が私の中で一番の財産。皆様の熱意と考え方には、とても刺激を受け、それ以降の仕事においても意識改革という点で活かされている。コロナ禍で、なかなか活発な交流や仕掛けができないが、参加して本当に勉強になった。
私が、今までやってきたことが、ちゃんと活かせる世の中が、来ると考える。
地域の人々とのネットワークの重要性に気づきました。もっと地元を有効活用したいと考える。
栗東観光協会との縁で、実証ツアーに参画した。
仕事に対する考えの幅が広がった。
滋賀県の観光業界で知り合いができて、情報収集や人の紹介といった面でメリットがあった。
インバウンド回復期に向けたプログラム作成を実施。
コロナ禍を経験し、社会情勢が徐々に変化していく様を実感した。自身を振り返り、働き方や生き方について考えるようになった。健康もその1つ。
多くのお繋がりを通じ、学びと実践の機会が増えた。ありがとうございました。
コロナ禍で消極的な状況だが、WTP 3期生へのモニタープラン実施を通じ、モチベーションが向上した。

■令和3年度 講座の実施風景

〔Session1 アフターコロナ時代のニューツーリズムを考える〕



〔Session2 アフターコロナ時代の地域観光戦略を知る〕



〔Session3 テストツアーから考える〕










〔Session3 テストツアーから考える プログラムチラシ〕

Ritto Wellness Tourism

栗東市 × 観光 × 健康

栗東ウェルネスツーリズム モニターツアー

10/18 mon 10/19 tue 10/26 tue

JRA引退馬(サラブレッド)によるホースセラピー
 森林浴ヨガ 金勝山での苔フィールドワーク
 地産地消の食提供

<新型コロナウイルス感染症対策について>
 ① 参加者全員マスク着用(乗馬はヘルメット着用)
 ② 参加者の体温チェック(乗馬は乗馬前)
 ③ 参加者の手洗い(乗馬は乗馬前)
 ④ 参加者の消毒(乗馬は乗馬前)
 ⑤ 参加者の消毒(乗馬は乗馬前)

観光庁 観光庁 地域の観光資源の魅力を上げ、観光振興に向けた取組を推進

モニターツアー日程・プログラム

雨天決行 荒天中止

10/18 mon	10/19 tue
金勝寺苔フィールドワーク/ホースセラピー 8:30 栗東駅集合/バス移動(栗東駅→金勝寺) 9:00 金勝寺参拝/拝観 9:15 苔フィールドワークもみぢテラリウム制作ワークショップ(講師:テラリウム作家 横山 誠) 11:45 ファンタイム(おにぎりランチ/田舎の云々やおにぎり等) マインドフルネスタイム(たてばねdripbag) 12:30 バス移動(森遊館→TCCセラーパーク) 13:00 TCCセラーパーク参観/ホースセラピー体験 近畿健康福祉センターによるワークショップ/アンケート 14:00 バス移動(TCCセラーパーク→手塚駅) 14:30 手塚駅集合/16:00まで新送り講座(栗東商工会議所)	ホースセラピー/ヨガ(TCCセラーパーク内) 9:00 栗東駅集合/バス移動(栗東駅→TCCセラーパーク) 9:30 ホースセラピー体験 ヨガ体験(講師:辻京子) 12:00 ファンタイム(おにぎりランチ/おにぎり等) マインドフルネスタイム(たてばねdripbag) 13:00 近畿健康福祉センターによるワークショップ/アンケート 14:00 バス移動(TCCセラーパーク→手塚駅) 14:30 手塚駅集合/16:00まで新送り講座(栗東商工会議所)

10/26 tue 昼食代1,850円

金勝山での森林浴ヨガ/ホースセラピー

8:30 栗東駅集合/バス移動(栗東駅→森遊館)
 9:00 森遊館参観/おにぎりランチ
 9:30 森林浴ヨガ体験(雨天時は室内ヨガ) 講師:辻京子
 11:00 シャワー-着替え
 11:30 ファンタイム(森遊館/金勝寺yogaランチ)
 マインドフルネスタイム(たてばねdripbag)
 12:30 バス移動(森遊館→TCCセラーパーク)
 13:00 TCCセラーパーク参観/ホースセラピー体験
 近畿健康福祉センターによるワークショップ/アンケート
 14:00 バス移動(TCCセラーパーク→手塚駅)
 14:30 手塚駅集合/16:00まで新送り講座(栗東商工会議所)



主な会場
 TCCセラーパーク 金勝寺 森遊館

講師
 辻京子(ヨガ) 横山 誠(テラリウム)

<持ち物・注意事項>
 ・モニターツアー昼食代は参加者ごとの支払いとなります。
 ・乗馬:乗馬プログラムについては乗馬しやすい服装をご用意ください。
 ・会場間の移動はグループでのバス移動となります。
 ・バス移動のため集合時間は時間厳守をお願いいたします。
 ・モニターツアーのため、貸出アンケートにご協力をお願いいたします。

<お問い合わせ>
 一般社団法人栗東市観光協会
 〒520-3017 栗東市栗東中子3丁目1-30(手塚駅2階)
 TEL 077-551-0125 / FAX 077-551-6158
 E-mail ritto-kankokyo@ritto.ocn.ne.jp
 URL: <http://www.ritto-kanko.com/>

■教育プログラム実施後の受講者等を交えたフォーラムの実施(計画)
〔滋賀大学 第5回 観光イノベーションフォーラム〕

■来年度以降の課題

領域	課題	補足
1 教育プログラム (全般)	本教育プログラムを持続的に実施するための運営資金の確保が課題である。 受講者を増やし、受講料を取ったとしても、まだ運営のための人材が不足している。	講座運営には、年4~5百万が必要となる。外音階講師への講師費用支払い、交通費、事務費用が必要となる。 受講料だけの運営は難しいと考える。補助金、スポンサーなどの資金原が必要となる。
2 受講者	全国からの応募がある。オンライン講座のみにするなど今後の開講方式について検討を行っている。 起業したい人、地域興しなど、ビジネスプランを作りたい人を対象とし、今後もその方向性は変わらない。	-
3 シラバス	-	ウエルネスをテーマとしているが、そのテーマは今後の社会変化に合わせることを考えている。 地域資源の再発見や、マーケティングマインドの向上など高価値づくりを目指している。
4 講座企画	-	-
5 受講者の能力	-	熱意の高い受講者が多い。WTPへは、自分で手を挙げて参加している。また、修了生の口コミでの応募者も多い。
6 教育プログラム実施	-	毎回受講者によるアンケートで講座内容を評価している。現時点では、その評価は高い。
7 教育プログラム実施後	100名くらいになる。→発表会、同窓会などで繋がりを広げる。他の県の繋がりも必要、山口大学と協業、連携を考えている。	別紙フォーラムを検討中(前掲「滋賀大学 第5回 観光イノベーションフォーラム」)
8 その他	観光は幅広であり、教育プログラムの組み立ては難しい。MBAのような高度な科目を用意すべきか、基礎科目を揃えるのが良いか、検討を続けている。	-

■ 要望等

1	行政 (中央)	中央行政の役割は、地域の新たな産業を興すこと。次の段階では、どこの、どこに国費を投じるべきか、示してもらいたい。 また国費は、重点化した国費投入をお願いしたい。	—
	行政 (地方)	—	—
2	観光産業	—	—

(3.c) 北陸先端科学技術大学院大学

■名称

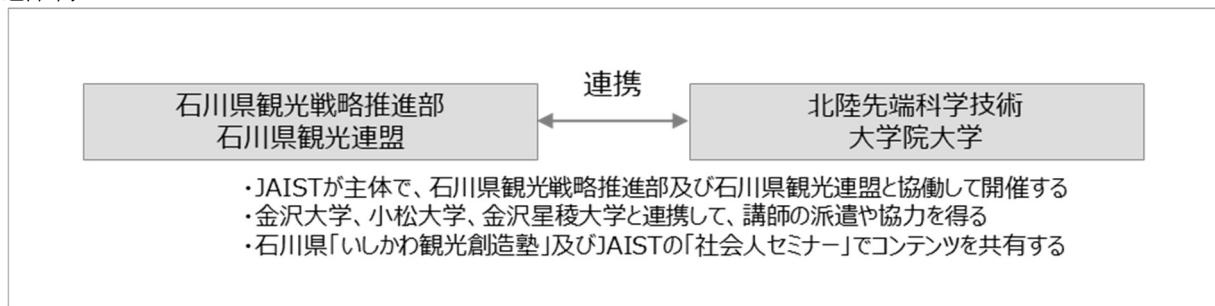
観光コア人材育成スクール

■概略

当スクールの基本コンセプトは「地域観光のイノベーション推進人材の育成」であり、インバウンドや ICT の影響で変化する観光に対応して、今後の地域観光を先導する観光産業における中核人材を、石川県・観光団体と協働で育成する。本プログラムでは、観光がグローバル経済や社会状況を反映して急激に変化する中で、多様な資源や関係者を連携して新しい観光サービスを地域から創出することが必要という前提で、人材育成で観光のグローバル化に対応する。

実施時期	令和3(2021)年10月～令和4(2022)年2月
受講料	80,000円(その他研修実費は別途精算)
受講者	本年度15名(予定定員20名) 北陸三県を対象
方式	対面およびオンライン(ハイブリッド方式)
授業時間数	90時間(15日間19講義)

■実施体制



- ◆ 大学の直営事業として実施(履修証明を発行する)
- ◆ 石川県からはそれぞれのプログラムへの相互人員派遣で共同開催
- ◆ 本学は教員1名と専任事務職員1.5名(地域連携推進センター)

■特徴

- ◆ 北陸三県の観光事業等に従事するマネジメント人材を対象とする
- ◆ 大学の正規プログラムとして履修証明証を交付する
- ◆ 授業時間数合計を増加させて90時間とした
- ◆ 事前事後課題の評価にはルーブリック利用を標準仕様とした
- ◆ コロナ禍に配慮して、受講生は北陸3県のみを対象とした
- ◆ 観光産業従事者をターゲットとし、主体的・対話的で深い学びを実現
- ◆ 学習におけるファシリテーションを基本とし、自律的な学習ができる
- ◆ 知識やスキル獲得を目的とせず、熟考、対話からの「気づき」を促す
- ◆ 観光業でのネットワーク形成を前提とした、総合的なカリキュラム
- ◆ ファシリテーション、アカウントティング、資金調達、事業計画、リテンションマネジメント、DMO運営を学べるよう講座を配置している

■独自の取り組み

- ◆ 本プログラムは「職業実践力育成プログラム(BP)」として令和2(2020)年12月23日(水)に認定された
- ◆ 北陸先端科学技術大学院大学として規則を制定し、本プログラムを大学の正式な履修証明プログラムとして実施する
- ◆ 厚生労働省の一般教育訓練給付金制度に認定された
- ◆ 広報(チラシ)の協力依頼
- ◆ 運営会議(評価会議)への協力依頼
- ◆ カリキュラム作成時のアドバイスを設けた

■創出する人物像

- ◆ 地域の観光イノベーション推進人材の育成
- ◆ 地域観光をリードするT型・H型リーダーの育成
- ◆ コロナ禍によるパラダイム・シフトに対応できる、レジリエンス能力を持つリーダーの育成

■本年度のプログラムにおける工夫

- ◆ リテンションマネジメント(優秀な人材を流出させない経営手法)の講義を追加
- ◆ DMO マネジメントの講義の追加(令和2年度に団体職員が多かったため)
- ◆ 運営会議(外部評価者)への講義を解放し見学を可能にした(リアルな第三者評価を導入するため)

■本年度に労を要した点等

- ◆ コロナ禍による、緊急事態宣言等の発令により、県境を越える営業活動ができなかった
- ◆ コロナ禍により、講義2週間前まで、講義スタイル(対面 or オンライン)を決定できない
- ◆ コロナ禍により、観光産業の打撃が大きく、受講生確保に苦労をした
- ◆ 厚労省の教育訓練給付金対象講義となったため、型にはまった運営しかできず、状況や要望に応じた柔軟な対応が難しくなった
- ◆ 大学の正式な履修証明プログラムとなったため、型にはまった運営しかできず、状況や要望に応じた柔軟な対応が難しくなった
- ◆ 上記の理由により、講師の要望に応えられないことも発生している

■本年度のプログラム

	日時	形式	題	概要
開講式	10月06日(水) 12:30~	オリエンテーション	-	スクールの目的、目標を共有し、受講生間の交流を実施する。
1	10月06日(水) 14:30~15:00	導入授業 講義	-	当スクールの開講期間において学ぶカリキュラムの内容の学習目標の解説を通して、モチベーションを高める。
2	10月06日(水) 15:00~17:00	講義 演習	最近の観光の動向について	観光の持つ可能性やビジネスとしての可能性など、観光の重要性を理解できるように基本概念や観光システムに関して共有する。
3	10月06日(水) 18:00~21:00	講演 ディスカッション	トップリーダーの講話と対話 I (ビジネスメンター)	ビジネスや仕事をどう認識し、その意味をどうとらえているか、これから何をすべきか、何のためにビジネスをするかなど、観光分野で仕事をする際に必要な基本的な思考や思考の背景となる観念を『ビジネス哲学』を通して学ぶ。
4	10月07日(木) 9:00~17:00	講義 演習	ファシリテーションマネジメント	チームで観光サービスを創り出していくためのファシリテーションスキルを学習し、チームビルディング能力を洗練するためのスキル獲得演習を行う。
5	10月20日(水) 9:00~17:00	講義 演習	アカウンティング・基礎編	『決算書が読める』=『企業の事業活動を通じて発生した取引が、どのように①貸借対照表、②損益計算書、③キャッシュフロー計算書に記録されるのかを理解している』という定義で、会計の仕組みについて学ぶ。
6	10月21日(木) 10:00~15:00	講義 演習	アカウンティング・応用編	事業を戦略的に運営して、持続可能にするための財務三表連動モデルについて、実務担当者から学ぶ。
7	11月10日(水) 9:00~17:00	講義 演習	ファイナンス・基礎編	観光産業、特に宿泊業のような装置産業では、多額の資本が必要であるためファイナンスの知識が不可欠である。装置産業としての観光産業のマネジメントに必要なファイナンスの基礎について学ぶ。
8	11月11日(木) 10:00~15:00	講義 演習	ファイナンス・応用編	事業をさらに充実させるためのファイナンス、特にDCF法による資産価値評価について実務担当者から学ぶ。
9	11月25日(木) 9:00~17:00	講義 演習	ホスピタリティ・イノベーション	今後の観光で必要になる新たなホスピタリティ概念を学び、受講生同士でディスカッションしながら、イノベーションプロセスを理解する。
10	12月01日(水) 13:00~17:00	講義 演習	イノベーションマネジメント I	「企業内起業」をテーマに急激な変化のある社会に対応して、新しいサービスを生み出す「リーダー像」のケースをもとに学習する。
11	12月01日(水) 18:00~21:00	講演 ディスカッション	トップリーダーとの講話 と対話 II	自社の事業と「地域資源」をつなげて新たな事業を生み出す事例や「従業員満足度」への配慮から生まれた新事業の効用を対話の中で学習する。
12	12月02日(木)	講義	イノベーションマネジメント II	「企業内起業」をテーマに急激な変化のある社会に対応して、新しいサービ

	09:00~12:00	演習		スを生み出す「リーダー像」をケースをもとに学習する。
13	12月15日(水) 09:00~17:00	講義 演習	リテンションマネジメント と人材確保、ES向上	あわら温泉グランディア芳泉のマネジメントの裏側にあった成功・失敗事例を題材に生産性向上に至る背景には何があったのか、現在の課題、将来的に目指すところなどを議論する。
14	01月12日(水) 09:00~17:00	講義 演習	DMOマネジメントI ケースメソッドI	組織改革ケースとしてホテル椿山荘東京を用いて、受講生同士でディスカッションし、リアルな体験から再現性のある教訓を学び取る。
15	01月13日(木) 09:00~17:00	講義 演習	DMOマネジメントII ケースメソッドII	(同上)
16	01月26日(水) 09:00~17:00	講義 演習	観光サービス創造マネジメント	新しい観光サービスを創出するための事業創造の思考法を学ぶ。特に、リスクを低減し、チャンスを最大化するための理命を学ぶ。その後新規事業の立案に必要な仮説の設定方法、検証プロセスを通じて事業構想の基礎を学習する。
17	01月26日(水) 11:00~17:00	講義 演習	ポストコロナ時代の観光サービス創造	(同上)
18	02月09日(水) 09:00~17:00	講義 演習	観光サービス創造演習	新しい観光サービスを創出するためのプランの提示を行い、これまで学んだことを活用したサービスプランの模擬発表を行い、フィードバックを得る。
19	02月16日(水) 13:00~16:00	演習	振り返り学習・発表会	学習成果の振り返りとそれぞれの学習成果の確認をし、各自の観光事業プランの最終発表会を行う。
修了式	02月25日(金) 15:00~17:00	修了式	-	履修証明書授与、記念撮影、優秀賞の発表を行う。

■本年度の受講者と過年度受講者数

[本年度の受講者]

#	性別	所属
1	女性	助教授
2	男性	旅館副支配人
3	男性	団体調査役
4	男性	役所主任
5	男性	役所主事
6	男性	役所主幹
7	女性	まちづくりコンサル副支店長
8	男性	観光系飲食部長
9	男性	公園 センター長
10	男性	ホテル旅館向け資材・情報販売 室長
11	男性	公共交通機関 営業支店長
12	女性	旅行会社
13	男性	IT系企業SE
14	男性	イベント企画運営会社 課長
15	男性	不動産会社

[過去の受講者の属性と人数]

DMO	6
IT業	5
イベント企画・運営	3
飲食業	4
卸・小売業	2
観光バス	1
業界団体	4
建築業	1
公共交通機関	2
個人事務所	1
個人商店	1
コンサル業	1
自然体験活動団体	3
自治体	3
自治体外郭団体	1
大学	1
地域おこし協力隊	1
不動産会社	1
ホテル旅館業	9
旅行会社	1
その他	1
計	52名

令和3年度(2021年度) 計15名
 令和2年度(2020年度) 計20名
 令和元年(2019年度) 計17名
 (合計52名)

■ 来年度以降の課題

領域	課題	補足
1 教育プログラム (全般)	国費等の補助金なく、継続的に実施は出来るが、R05以降はわからない。運営する人(教員、研究、事務局)の確保が難しい。講師の共有、シェア、派遣を相談できる場が欲しい。	—
2 受講者	今後、受講者を持続的に確保する必要がある。 (本年度は、定員に満たないため、全員受け入れ) また、受講者数増、受講料上昇が必要となる。 修了生組織の拡充を図ってきたい。	100名程度の受講生と受講料が必要と考えるが、教育の質を考えると、25名程度か30名程度が限界である。 共通プログラムでは、基礎的な能力で、多人数対応を想定している。講座の切り売りも可能だが、国立大学での実現可能性などは検討しなければならない。
3 シラバス	—	(振り返り、見直し、改善は、今後検討の予定)
4 講座企画	現在は、対面とオンラインのハイブリッドであるが、やはり講座は対面が原則である。 オンラインで行える講座、カリキュラムの充実を図りたい。	—
5 受講者の能力	受講者のある程度の能力が揃うことが望ましい。 授業内で発言し、議論できる程度の能力が受講者に求められるが、その水準に至らない受講者も多い。 肩書(課長、部長等)や能力の差が大きい。	MS Officeが使えるなど最低限のPC利用能力などは必要である。取り組みの意識が高い。事前課題の出し方、受講の意識を高める工夫もしている。 石川観光創造塾(初心者向け)が地元にはある。こちらを受けてから、本プログラムを受けることが望ましい。
6 教育プログラム 実施	—	各講義は、受講者からアンケートを取っている。また第三者(DMO、大学の先生など)評価を取り入れ、客観的評価を行い、第三者評価委員会で年度末に評価を受ける。
7 教育プログラム 実施後	教育プログラムの標準化推進、修了生組織の拡充を考えている。	—
8 その他	大学の事務局態勢(運営スタッフ確保)を強化したい。 受講者のメーリングリストなど観光産業に対する協力出来る態勢を整えたい。 講師選定、講師確保も課題である。	9月開講予定であったが、10月開講となり、開始時期が遅くなった。その理由は、厚労省の教育訓練給付金の認定時期との関係であった。

■ 要望等

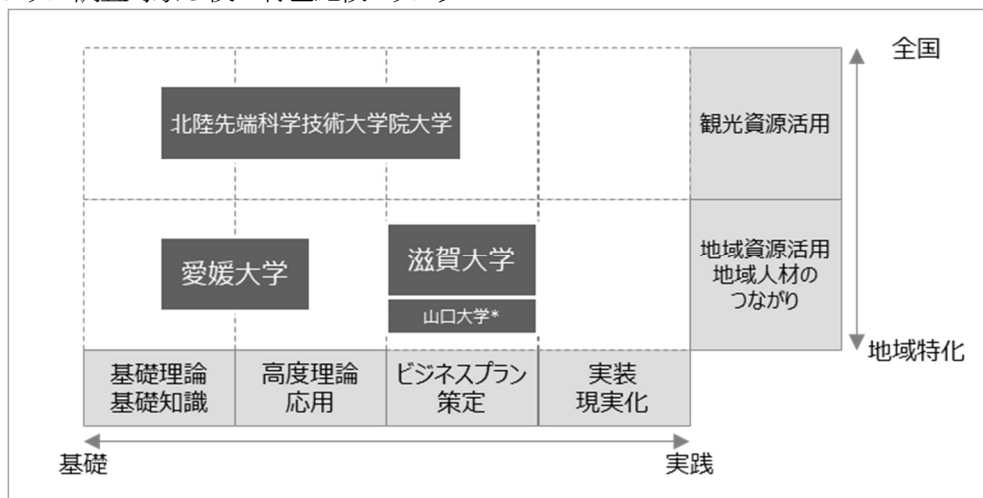
1 行政 (中央、地方)	受講生を集めるための広報、周知を広く、対象となる受講者に伝わる工夫を考えてもらいたい。 受講生候補者を出してもらおうなど、企業への広報、周知に協力してもらいたい。	—
中央行政	・他大学との連携(講師の共有・相互乗り入れ、受講生の交流) ・運営勉強会の実施 ・講師の登録(○○なスキル、知識、研究履歴) これらの機能を求めたい。	—
2 観光産業	観光産業において、人の育成、人材教育投資に対してもっと積極的であってほしい。産業界を支えるのは人である。	受講者が良い結果を自社内で出すと、それが口コミで広がる良い効果が出ている。受講生や企業がこのプログラムを受けるべきだという流れになってもらいたい。 大学は、暗礁に乗り上げるなど困ったことがあれば、答えることも行っている。

(4) 調査対象大学（3校）におけるフォローアップ調査結果まとめ

(4.a) 調査対象3校の整理

フォローアップ調査を行った3校の教育プログラムには、その内容に特徴や違いが見えた。その特徴は、地域性、理論(実践または実現性)に違いがあった。3校の特色を以下のマップに表示した。

〔図3 フォローアップ調査対象3校の特色比較マップ〕



大学の考え方の違いや地域の観光資源の活用や人材の活かし方、地域の向かうべき方向性などにより、その教育プログラムが異なり、その違いがはっきりと現れた。山口大学は令和3年度採択校であり、本年は教育プログラムの開発・実施の補助を得て推進している。本年度は2年目であり、来年度から自走化となる予定である。次章にて山口大学の教育プログラムについてその概要を記載した。比較参考のため、山口大学をマップに加えた。

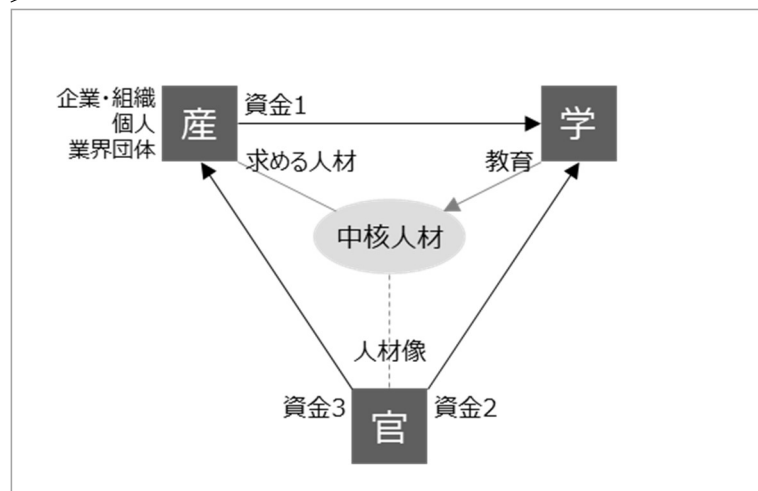
本事業は、「観光産業の中核人材育成・強化」である。しかしテーマとしている中核人材の人材像が異なり、提供する教育も、異なってくるのであろう。受け入れる受講者は、地域の人材と位置付けている点では、共通している。地域の人材を育成し、強化する点では、考えが一致している。中核人材は、その人材が存する地域により受けられる教育の内容が特定され、必ずしも観光産業の組織や人材にとって、求めている教育を享受できるとは言えない。

多様な教育プログラムが全国で開催され、それを人材や組織の要望に合わせ選択出来ることになれば、より多くの人材への教育機会が増すこととなるであろう。

(4.b) 課題の整理

フォローアップ調査では、3校ともに課題として運営資金を挙げている。つまり今後も持続的に中核人材を育成するためには、持続的な資金が必要であるとのことである。受講者またはその人材が属する企業が教育コストを負担することが一般的な姿なのであろう。

〔図4 産学官連携モデル〕



しかしながら現在は、大学の努力に依存しているところが大きい。本来、受益者負担の原則からすると、観光産業の企業、団体が中核人材のために持続的に大学へ教育の対価を払うことが一般的と言えるのであろう(図4の資金1)。しかし、近年のコロナ禍、観光産業の教育投資に対する考え方、資金力の弱さ、利益率の低さから、観光産業から資金を投じることが難しい状況にあることが指摘されている。「学」の努力に依存した現在のモデルには限界がある。中核人材の育成、強化を続けるのであるのであれば、残る「官」が当面または一定期間、資金を投じる必要がある(図4の資金2、資金3)。

本事業全体に係る問題、その他の大学から提示されている問題を含め大学から見た共通する問題を下表に記した。

1	期限	中核人材育成・強化の教育プログラムは、いつまで続けるのか。
2	組織	コンソーシアム組織の活動目的、方向性、将来のあり方は何か。 官がリードした本事業は、この先も官がリードするか。
3	教育	教育プログラムの受講者による選択の可能性、各大学間の連携の可能性。
4	資金	大学に対する資金の持続的な提供。

フォローアップ調査対象3校から提示された個別の問題・課題を含め、最終章〈事業総括〉において問題・課題の整理を行い、まとめを行いたい。

3-2) 受講者へのインタビュー調査 (3校)

(1) 目的

自走化を開始した3校における過年度受講者に対してインタビュー調査を行い、受講によって得た能力や技術をどのように実務で実現し、成果として獲得しているのかを明らかにすることを、本調査の目的としている。また自走化校となった3校がこれからも持続的に観光産業の中核人材に教育プログラムを提供するにあたっての受講者から見える問題・課題も明らかにしたい。

しかしながら受講後の時間が1から2年程度であることから、過年度受講者が組織や地域に影響力を発揮しているとは考えにくい。成果は、時間の経過とともに徐々に発現するすものであり、図5のように時間軸において成果段階を設定し、このインタビュー調査では主に下図の左半分に示す領域にその成果があるであろうと仮説を置き、インタビュー調査を行った。その調査記録は、以降の項を参照されたい。

〔図5 過年度受講者における成果仮説〕



基本質問は、以下の9項である。

- 1) 受講の動機またはきっかけ。(動機)
- 2) 受講は企業・団体からの指示や推薦か。(受講意思の所在)
- 3) 役職・役割の変化があった場合の理由。(組織の成果に対する認識)
- 4-1) 獲得した能力、技術、スキルの活用。(技術等の活用状況)
- 4-2) 能力、技術、スキルを活用した具体例。(上記の詳細)
- 4-3) 獲得した能力、技術、スキルの今後の活用。(将来的活用見込み)
- 5) 受講によって得たこと。(人脈、つながり、気づきなど)
- 6) 教育プログラムに対するご意見、ご要望、改善点など。(受講者としての要望)
- 7) 将来の自身のめざす姿。(将来展望)

これらの質問とともに、①意識している受講者にとっての成果〔顕在的成果〕、②意識はしていない受講者にとっての成果〔潜在的成果〕があるであろうことを考え、インタビューにより発掘を行いながら調査を行った。

(2) 調査対象者

インタビュー調査は、フォローアップ調査対象となる3校、愛媛大学(愛媛と略す)、滋賀大学(滋賀と略す)、北陸先端科学技術大学院大学(北陸と略す)の3校の教育プログラム(講座等)を受講した過年度の受講者の中から成果があると考えられる受講者を各大学から選出を依頼し、インタビュー調査を行った。

調査を行った対象者は、3大学計9名である。その属性は以下の表のとおりである。

〔表 調査対象者(9名)〕

名前	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
現在の年代	40歳代	60歳代	50歳代	50歳代	40歳代
受講時の組織	宿泊業	宿泊業	旅行代理店	観光協会	商工会議所
現在の所属組織名称	同上	同上	同上	同上	同上
受講時の役職・役割	取締役	WEB チームリーダー	営業担当部長	次長	地域事業・観光振 興課 課長
現在の役職・役割	取締役常務	同上	同上	同上	まちづくり・産業振興 課課長
受講大学名称	愛媛大学	愛媛大学	愛媛大学	滋賀大学	北陸先端大
受講年度	令和元年度 令和2年度	令和2年度	令和2年度	令和2年度	令和2年度

名前	F氏	G氏	H氏	J氏
現在の年代	40歳代	40歳代	60歳代	40歳代
受講時の組織	地域支援団体	設備・サービス 提供事業	経済団体	第3セクター
現在の所属組織名称	新設地域支援団体	同上	同上	同上
受講時の役職・役割	専務理事	事業開発 本部長	観光・広報担当 副部長	専務取締役
現在の役職・役割	代表理事	同上	同上	同上
受講大学名称	北陸先端大	北陸先端大	北陸先端大	北陸先端大
受講年度	令和2年度	令和2年度	令和2年度	令和2年度

(3) インタビュー調査記録

A氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月27日(水) 午前)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	観光業に携わっている身として、地元の知らない観光を学び視野を広げようと思った為。この講座の魅力は、現地で体験できること、その機会があることが魅力であった。
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	社長から興味あるなら、と言われ自分で判断した。
3	講座修了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	<p>■自分自身</p> <p>経営陣の中でもより現場社員と近い存在（潤滑油）かと思うので、経営陣と社員との良好な関係作りのため、現場の声を施策に取り入れていく雰囲気づくり等をさらに推進できるようになった。</p> <p>■企業</p> <p>改革を社員とともに実行していき、会社の評価を上げていくために、経営陣と現場の架け橋的な役割となっている。コロナ禍で経営陣も交代し改革を進めている。同族経営の難しさの中、企業をさらに前に進めて行く役割を担っている。</p>
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	日本政策投資銀行山事務所長による旅館・ホテルの財務管理の講義があった。利益水準から考えた現実的な借入金や残高水準などの知識（令和元年度）がある。銀行視点の優良可の基準がわかり自社の財務状況を評価する機会となった。伊香保温泉ホテル松本樓の社長による人材育成および社内エンゲージメント方法（令和2年度）がある。ランチ営業をやめた。それは人件費で負けてしまう。収益を分析して判断した。夜まで働く残業代が出る。宿泊のお客様に集中できるようになった。
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	<p>①以前に比べ、より利益重視の運営にしているための施策の参考となっている。</p> <p>②年2回県内の伊方町にある大和屋本店所有施設（長いこと無人）の清掃活動があるが、今年は社内エンゲージメント向上を目的に、新入社員8名全員を連れていき、清掃後は伊方町の海の幸でバーベキューを楽しんだ。</p> <p>③WEBでの顧客獲得を進めている。専務が主導し、1年前にWEBサイトを刷新した。OTAとの関係、販売も重視している。トライ</p>

	<p>アンドエアーで進めているところだ。平日の稼働を埋めるには、団体需要が重要、それには代理店が必要だ。</p> <p>④C/I、C/Oの時間はこれまで12:00-12:00だった。それを15:00-10:00に変更した。その時間、社員で清掃を行うことで外注費を削減した。副次的な効果として「部屋がきれいになった」と言われることが増えて来た。現場責任者による清掃のマニュアルなど、各社員のノウハウなど知を組織に蓄積することを進めている。</p> <p>⑤大きな変化による摩擦もあるが、社員の意識も変わってきた。顧客とサービスの関係を見極めることが重要だ。自社のポジションをどこに置かなどこれからも深く考えていきたい。</p> <p>⑥足湯を併設、いい足湯（無料）がある温泉宿を作った。現在はコロナで停止していたが、再開にあたって、カフェ、商店街と連携し、足湯カフェを開始した。マスコミでも取り上げられるなど評判は上々だ。各関係者の売上増に繋がっている。売上増よりもむしろ地域の人々と一緒に取り組んだことに意義が大きいと考える。</p>
4-3	<p>受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。</p>
	<p>回答 ①施策浸透のために、経営陣と現場との距離感が近いよう社員とのコミュニケーションに活かしている。</p> <p>②世の中の“なんとなくの情勢”やエージェントからの要請にまどわされることなく、「儲かる」を考えながらファクトに基づく判断をし、高付加価値化を目指す。</p> <p>■具体例</p> <p>③個性的な宿泊施設が多い中、顧客はそれらを比較する。当館としてはプラスアルファが必要となってきている。具体的取り組みとして、日本酒BAR、駄菓子屋BARを開始した。取り組みを検討するためにネットでアンケートし、市場の要望を収集した。また、クラウドファンディングで資金調達を行った。その結果を調査するための口コミ調査（大和屋い、などのワード）楽天、じゃらん、一休の口コミ欄をチェックしている。</p> <p>④専務が変革の起点となっている。このようなロールモデルがあると、他の社員にも伝わり意識改革が進む。</p> <p>⑤宿泊のお客様のために能の先生による能舞台講座を開いていたが、コロナ感染拡大防止のため中止した。新たな能舞台活用方法のトライとして、能舞台で能面や和傘などのアイテムを揃えて自由に上がって写真撮影を行える取り組みが、好評である。今後も続けていくなど、以前にはなかった試みにやってみる空気が出てきている。</p> <p>⑥海や山の体験に顧客のニーズがある。2次交通の利便性、ネットで予約するなどプランを組むことが出来るようになるなどの仕組みも考えていきたい。</p>
5	<p>上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。</p>
	<p>回答 ①観光に興味をもった様々な業種の方と知り合いになることが出来、その方々がテレビや新聞で活躍している姿を見ると励みになる。</p> <p>②県内でも新しいツーリズムの在り方が続々出てきており、世の中の多様化のニーズに合わせた事業を構築することが「儲かる」観光には重要である。</p>
6	<p>これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。</p>
	<p>回答 リアルとONLINEのハイブリッド授業において、技術的な部分でのスムーズな運営に期待する。オンラインでのLIVE講義は、魅力的である。しかし受講者の機器操作、大学側の機器操作など課題も残る。</p>
7	<p>将来のご自身のめざす姿について、教えてください。</p>
	<p>回答 ①自社の評価を高める経営者でありたい。年齢とともに頭が固くなる、体験もなくなる、見なくなる、書類でわかったような気になる、このような消極的な姿勢を戒めている。将来も現場主義で体験し、問題と向き合う経営者になりたい。</p> <p>②道後エリアの人気を上げる、エリア関係者がよりまとまり、地域価値を高めることをめざしたい。例えば、備品のシェア、人材共済シェアできるようなことも考えたい。</p> <p>③観光業はすそ野が広いが、その中心となるのは宿泊業であると思う。地域の観光業をリードしていきたい。</p>

B氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月20日(水) 午後)

1	<p>受講の動機またはきっかけを教えてください。</p>
	<p>回答 受講は4回目となる。初回の受講は、愛媛大学の契約職員として同講座開講に関する学内情報を知り、改めて観光サービス業に関する知識を深めたいと思ったことが理由である。</p>
2	<p>受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。</p>
	<p>回答 特になし。</p>
3	<p>講座修了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。</p>
	<p>回答 ①これからの観光サービス業への期待と、この講座による繋がりによって、再び観光サービス業に復帰した。神戸で働き学が培った知識やスキルを地元愛媛に戻り、活かす機会を得、企業に貢献することを期待された。またリカレント教育を知り業界への貢献を志した。</p> <p>②もっと出来ることがあると考える。着地型コンテンツ、魅力的なコンテンツに触れ、売り出せる資源がある。地域の売上、地域全体としての利益になることがまだまだ多く残されており、これらを発信していきたい。</p>

4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	①観光サービス業の中で、宿泊業は規模の大小に関わらず、交流する機会が稀である。異業種いらいまでもなく業界内での交流もない。この講座を受講することで、観光に関わる様々な仕事に携わる幅広い年齢の人々と関わりながら、より俯瞰的、長期的な視点も持ち、訪れる旅行者を受け入れる地域のひとつとして、どのようなサービスが求められるのか、新たなビジネスチャンスにつながると考える。 ②愛媛の観光資源は、うまくやれば、稼げる。横で繋がれば、付加価値が高くなるはずだ。観光業界の経営者に、共感できる目標や夢が見つけれないことも問題かもしれない。愛媛で観光ビジネスをもっと大きくするチャンスがある。例えば、温泉資源をコンベンションやイベントと合わせた売り方が出来る。 ③愛媛で出来ること、道後の売り出し方など、産官学の連携のハブが必要だ。予防医療、湯治の案もある。若返り、仕事を続けるために健康でありたい、生きがいを作ることを売り出すこともある。
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	新たに旅行業部門を立ち上げ、予約段階からの周辺観光地や商業施設を取り込んだ着地型コンテンツを自社ホームページで展開している。古民家との連泊宿泊プランや、それらの前後の宿泊施設の紹介や予約斡旋を行い、宿泊客の地域周遊と滞在時間の延長を促している。
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	①WEB上のビッグデータを活用したマーケティングやHP、SNSによる顧客に対応したタイムリーなコミュニケーションや情報発信を、効果的に継続し、効果を上げたい。 ②宿泊施設の特徴を活かし、おすすめプラン（着地型のプラン）として、地域の観光資源を集めた。このプランは、地域の方に電話をかけるなど地道な活動から始めた。 ③リカレント教育で得たことを活かした例として、人脈が活用できたことだ。古民家の民泊に声をかける、西条市、東温市での農業との連携を図るなどが出来た。 ④講座にある現地視察で知り合った人、ワークショップで学んだことが活かされている。しまなみ施設の見学は驚きであった。まずは観光業に携わる人が体験することが重要であり、それが人を呼ぶことに繋がる。このような体験を愛媛大学は提供してくれている。このようなマッチングを行う機会を業界は求めているのだろうと思う。
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	受講者との交流を通じて、コロナ禍でのダメージの状況を身近く共有することができた。全国各地域で、観光の復興を目指した様々な取り組みがなされる中、四国・愛媛の観光サービス業に携わる仲間として、地域のシームレスな協力関係こそが、お客様に選ばれる儲かる観光サービスの鍵となり得る。産官学が連携した人づくりから、観光サービスを生み出される。
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	夢やアイデアを実行に繋げ、継続するための支援や協力を望む。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	地域を繋ぐコーディネーターになりたい。また、企業内の企画（またはコンサルティング）、ただの企画ではなく、自ら行動を起こすコンサル、業界を引っ張っていくコンサルをめざしたい。また、地域観光のネットコンシェルジュも作ってきたい。

C氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月20日(水) 午後)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	1番の目的は、先生方、学生の皆様との異業種交流である。2番目は、地元観光を知らなかったことである。
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	いいえ。自分の希望である。コロナ禍で業務が少なくなっていたため、会社の承諾を得ることが出来た。
3	講座終了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	特になし。
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	京都のワックジャパン社長、ふなや・料理長の講演を聞き、知り合えたことが資産となった。
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	①当社企画の高校生「おせち」（松山学院高校：調理科製造）に、ふなやの料理長に監修をお願いし、令和5年からの販売に向け現在進行中である。また当校との協業により、当校の旅行をすべて請け負うことが出来た。 ②本講座を通じて、地元を知らな過ぎたことに気づいた。観光資源の詳細を知らず、それらを体験することはなかった。体験により、社内や顧客に案内する説得力が増した。
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	シクロツーリズムの代表、しまなみグリーンツーリズムの会長と交流できたことにより、個人旅行の問い合わせへの的確な対応を可能にし

	<p>た。また当社の旅行企画にその情報が活かされている。</p> <p>具体例としては、しまなみ（松山と広島を結ぶ橋のサイクリング）旅行プランを大阪本部とともに作成を行うことが出来た。また上記で得た人脈を、松山支店、新居浜支店などに紹介することが出来た。関西、九州の学校からの修学旅行や個人旅行の受注が増えることが今後期待出来る。</p>
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	<p>① 普段の仕事だけでは、愛媛大学の教員、太陽石油、日本政策投資銀行など、異業種の方々と知り合うことはなかった。名刺交換だけでなく、現場に行き知り合うこと、それが次の仕事に繋がる。また、受講者との横の関係（7回会うこと）が深まることがこの講座の意義だ。苦労を共にすると関係が深まる。講義の合間に会話することも多い、情報も取れる。大学講義だからその効果だ。年に1回、JATAの集まりがあるが、ここまで関係が深まることはない。</p> <p>② そもそも業界内での横の繋がりは希薄だ。繁忙、閑散、それぞれ違うので、業界内で集まることは難しい。行政が業界団体に働きかけ、横の繋がりを強くするようなことはあるかもしれない。</p> <p>③ 地元を知ることは、地方では大切だ。業界の人は、地域を知らないことが問題だ。地元の食の良さも知らない。これらを体験することから始まるのではないだろうか。</p>
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	コロナ禍は観光に大きな打撃を与えている。しかし観光は間違いなく「地方創生」の切り札であり、今後、ますます大きく育てる必要がある。地元愛媛の中高生、愛媛大学に入学した学生、地元出身者、他県出身者も含め、生涯ずっと愛媛県で働いていきたいと思える講座をお願いしたい。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	<p>① DMOに参画する、またボランティアでも良い、地元で誘客することができるコーディネーターをめざす。観光産業は、企業や業態が個別に動き、個々の最適化や収益を見ている。業界内の横の繋がりを作ることを重視したい。</p> <p>② 産業界だけでなく、このリカレント・プログラムのように、産と学の連携を図り、行政（県や市）を巻き込んだ地域一体型の行動が必要となると考える。産官学連携の事例としては、四国では高知県が挙げられる。県の予算で、東京で誘致パーティーを行い、都会からの誘客を積極的に行っている。産官学の一体的な動きが叫ぶようなことをしたい。</p>

D氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月28日(木) 午前)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	<p>地域の観光資源である山や旧街道を活用したウエルネスプログラムを企画し、着地型コンテンツを造成したいと考えていた。ウエルネスについて深い知識を得ると同時に、全国からお越しになる受講生との交流にも興味があった。</p> <p>滋賀大学「ウエルネスツーリズムプロデューサー養成講座」はピッタリであった。</p> <p>しかしウエルネスが地域にも全国的にもまだ定着していない。ウエルネスを広げるには、変化を可視的に見せる技術、顧客の行動変容と体験を伝える力が必要だ。（事例として、富士山の保養所でのデータ集めは、参考となった）</p> <p>ウエルネス＝健康、癒し、楽しく人生を送ること（「輝いた生き方」は、伝わりやすく変更した）。</p>
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	弊協会の会長よりウエルネスプログラムについて学んでくれるようすすめられた。
3	講座修了後、所属企業・団体において、役割・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	<p>地域の観光ガイド向けの講演を依頼されたことがあった。滋賀県からは、観光人材育成のモデルプランとして協会主催の実証ツアーに参加いただいたこともあった。今までと違う視点で団体や組織でウエルネスの重要性を伝える機会が増えた。</p> <p>協会としては、ウエルネスを軸にすることで、企画実施ができる企業や団体が増え、お繋がりや協働体制が地域内外問わず強化されつつある。地域の観光立並びに経済の活性化に繋がっている。</p> <p>実証ツアーには、地域の「住人参加型」を進めている（地域の人が語り部となり、地域と顧客が一体となる）。</p>
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	<p>地域ならではのウエルネスプログラムを造成し、地域の企業や市民を巻き込んだ着地型コンテンツの造成と、その構築したストーリーや事例を、現在、観光業でお悩みの各地域の観光協会や組織に広く開示しお伝えする。</p> <p>また私どもが教えていただけることも多い。</p>
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	<p>① 滋賀大学で受講中、「金勝ウエルネスセミナー」と題して、地域の山岳仏教の聖地金勝寺を舞台に、着地型のセミナーを開講した。</p> <p>② また、商品開発では協会のオリジナルブランド「たてば（立場）珈琲 drip bag」をマインドフルネスの提案とともに発表し販売をはじめた。またウエルネスと地域をテーマにした3分動画を作った。</p> <p>③ 滋賀大学でのビジネスコンテストで最優秀賞をいただいた。</p>

	<p>④そしてもう一つ発表したプランと合わせ着地型コンテンツ「ホースセラーを軸としたウエルネスツーリズム事業」を提案し、令和3年度の観光庁域内連携促進事業にも採択され、現在実施中である。栗東ならではのウエルネスプログラムを造成し、今期実証、来期以降で着地型コンテンツとして運用できるよう、近隣の市町ともに連携して進めている。</p> <p>⑤上記のプランを、栗東市以外の人を含め4名で取り組んだ。この講座を受けたことで繋がりができたからこそこのプランである。他の地域の人と組むことでアイデアが活性化し、プランを実現する力となった。他の地域の人から意見をもらえることは、とても貴重であり、この講座を受けたことにより築いた人脈をこれからも大切にしていきたい。</p>
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	<p>①受講を通じて得た知識と、受講生間の繋がりを、新たな観光コンテンツ作りに活かし、次の商品化を目指している。</p> <p>②今回の受講から商品化までのストーリーを、現在、コロナ禍で苦戦している全国の観光協会や団体、組織に、国の支援のもと勉強しつつ、異業種の交流の中から商品化できることを伝えていきたい。</p>
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	<p>①地域を超えた異業種の方との繋がりが大きい。今もそれは続いている。地域のことを違う角度から見ていただき意見お聞かせいただけたことが何より気づきとなった。</p> <p>②滋賀大学の先生方や大学院生、他の大学の大学院生からもビジネスプランに興味を持っていただき、繋がりができたことが次の展開となっている。そんな機会をいただけたことに感謝している。</p>
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	<p>①滋賀だけに限らず、遠い地域、遠い職種、遠い業界の方と知り合えるのもいい。エッセンスやアイデアは遠い方からもらえることがあると考える。（「苔テラリウムワークショップ」をツアーのコンテンツにすることが出来た事例がある）</p> <p>②プラン実務は協会で行った。プラン提案から実務に向けても、連携体制が取れるような仕組みがあると思う。</p> <p>③大学には、ウエルネスを意識する企業との接続、紹介もお願いしたい。スポンサーになってもらえると資金面で強力なパートナーとなる。</p>
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	<p>①滋賀県の人材育成と滋賀大が合流出来たことは大きな喜びとなっている。行政（地域、国）ともっと関わりを深めたい。地域のプロデューサーとして、人や組織の接続を続けていきたい。</p> <p>②この講座の中で行ったプレゼンで、キーワードを前面に出したことで、教習ご思いが伝わった。それはとてもうれしかった。このような喜び、学ぶことの喜びと大切さを多くの人に伝えていきたい。</p>

E氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月28日(木) 午後)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	<p>①新幹線糸富井開業（令和6年春）に向けた観光振興施策立案スキルの向上。</p> <p>②北陸三県の観光産業プレイヤーとの交流。</p>
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	<p>①所属団体の指示、推薦あり、大学からの誘いもあり。</p> <p>②所属団体の期待は、上記1の通り。</p>
3	講座終了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	<p>①所属課の変更はあったが地域振興部という同部署内で異動した。</p> <p>②新幹線糸富井開業は中心市街地に立地し、観光振興とまちづくりをコネクして考えていく必要あり。観光誘客だけでなく、郊外で完結している市民生活や企業活動の中心市街地回帰も、新幹線開業と結びつけて考えることが求められている。</p>
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	<p>①ケーススタディ、プレゼンの機会、グループ長としてのマネジメント（ファシリテーション講座）、会計知識（BS、PL）、ファイナンス（投資、M&A、DD、収益、旅館ホテルの企業価値）</p> <p>②現在は工業振興がメインの職務であるが、観光は県境を飛び越え、北陸3県でのまとまりを考える必要があると思っている。ネットワークづくり、ゲストの話がこれらに活用できる。</p> <p>③チームマネジメントに関する講義内容は現在の職位として大いに参考になった。</p> <p>④ブランド・ストーリー・ボードは担当する業務の目的再確認に役立った。</p>
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	<p>①体験型観光プログラム「ふくのね」の新規版発行（https://www.fukunone.online/）</p> <p>「ふくのね」は、紙からWEB発信に転換することができた。</p>

	②周辺地域では金沢市が強い。周りの都市は埋もれてしまっている。福井市の中心に強力な観光資源がない。「ふくのね」を効果的に利用してもらうためには、2次交通対策も重要である。これらの課題に取り組んでいる。
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	若手職員の育成を念頭に置いたチームマネジメントに活かされている。 例えば中小企業の事業計画作成支援や、セミナー企画が仕事としてあるが、観光は現場を知らないとその魅力がわからない。まずは自身が体験することが重要であり、それを若手職員に指導した。
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	①プレゼンテーション機会が複数あったことで、能動的に課題に取り組むことができた。 ②民間の経営者やミドル社員、支援機関職員などがバランスよく参加していた点は多様性があり、刺激があった。
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	①コロナ禍により、なかなか受講以外での受講生同士の交流が難しくなった。 ②観光というテーマであればなおさら、複数の近隣県エリアを対象とした受講者募集を継続していただきたい。 ③北陸三県で繋がりが出来たことは嬉しい。メーリングリストを活用して連絡を取る、仲間からの助言がもらえる。大学からのメーリングリストの提供は大変ありがたい。 ④商工会議所ではなかなか手をかけられない領域がある。だからこそその大学の今回のようなプログラム提供に期待している。 ⑤受講者は、現在の20名程度がちょうど良い数であろう。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	観光産業だけに限定せず地域貢献をしたい。人が幸せになるためにはやりがいのある仕事が必要、例えば、福井に拠点を置く企業数を増やす、企業規模を大きくするなど。質・量ともに多様な経済活動がなければ、地域の持続的発展も見込めない。

F氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月26日(月) 午後)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	観光を体系的に学びたかったから。観光を学問として学べる機会がこれまでなかった。観光マネジメントを理論的に学ぶ機会を得ることとなった。
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	自発的な応募である。
3	講座修了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	新しい団体をつくってTOPになったほうがいろんなことができると思い、修了後に団体を作った。 地方創生、地域、地元で仕事を作る、事業を作ることを目的とした団体である。県境を越えた価値や観光業界の支援を行っている。
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	アカウンティング、ファイナンスの講座が役に立っている。中小零細の企業に対する業務改善や支援などを行う上で役立っている。会計や財務は、観光業界の経営者や人材にとって弱い面がある。これらを支援している。
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	イベントを興す場合の、マーケティング、資金調達、収益計画等をアドバイスしている。 観光だけのアドバイスだけでなく、事業としてのアドバイスすることが、特にこの業界では重要であるとする。
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	人の繋がりが大切であり、本講座を通じて、和倉温泉、多田屋との関係が出来たことは大きい。人を紹介し、繋がることを団体として支援している。 ケースメソッドにおける実際の困った生々しいケースは、とても参考となっている。理想と現実との違い、周りの人々の調整などこの業界における共通の課題である。一方で、ケースメソッドにある設問が難しいところもある。経営分析などわかっている人には、わかるが、観光業界でわかる人は少ないのかもしれない。業界の人がわかる設問に変える必要がある。 ■業界における人づくりについて 観光業界における人づくりは、若い人を獲得し、どのように育成するか、大きな課題である。年配者があれこれ言うよりも、若い人を呼び込むには、若い人の発想が必要だ。多様性（老若男女）を受け入れる意識が重要だ。地元に対する愛は大切であるが、独りよがりではない。約1700の基礎自治体に住む顧客から観光地や地域が選んでもらえる、そのような効果的な訴求、発信を行うべきだ。いいものを高く売る工夫もしなければならない。商品・サービスの良さの訴求と顧客ターゲットを明確にする力が必要だ。 経営者は、会計、財務を知る、もしくはまずは簿記3級程度の知識を身に付けること。会計士や税理士に任せている、というのが多くの経営者に見られることだとして感じている。本当の原価はいくらなのか、それがわからなければ、適正な売値がわからないはずだ。 ■地域における取り組みについて

	個々の企業が個別に動く現状は、もう限界だろう。地域がまとまる必要がある。例えば、共同出資でLLC（合同会社）組成し、地域をリードする組織を作り、地域をまとめる、そして顧客に最大のサービスを提供する。そのようなスキームもあるのではないかな。観光の領域は広い。産業として大きなものが作れていない。個人で動くこともあるが、その程度に限られる。事例としては、北海道のネイチャーガイドの方から、ローカルイノベーションをめざす津別町の取り組みを本講座で聞くことが出来たことは、自分の財産となっている。
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	福井県内のつながりや北陸3県での人脈ができたこととても感謝している。
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	①大学に対して：業界内の人を繋ぐ役割をお願いしたい。また理論的なものだけでなく、実践だけでもダメである。アカデミックな知見を実践に活かすことが大切であり、期待している。 ②これから受講する方：観光業界で事業を起す、イベントを開催しようとすると面倒が多い。例えば、市、県、警察との調整など。ビジネスチャンスはあるので、そのような面倒に負けないで取り組んでほしい。 ③地域行政は、大学の吸引力も使って、スタートアップ支援も取り組んでほしい。事例としては福岡市のスタートアップ支援が挙げられる。例えば、ファンドを組むことで成長の期待できる企業への投資も考えられる。ふるさと納税にファンドへの基金を募ることも考えられる。 ④観光業界に関わる人は、さまざまな問題を自分の問題として捉えてほしい、決して他人ごとではない。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	①この団体を安定化させ、事業を継続していく。県境を越えた活動を広げていきたい。 ②観光業界には、若い人（20代）が集まらない。その理由は、若い人がこの業界（飲食、宿泊を除く）でどのような仕事をしているかわからない。一方で、この業界に関わる人は、若い人に業界をわかってもらう努力をしていない、また働きがいや伝わっていない。 ③ITに対する理解の弱さもこの業界の特徴だ。このような業界の問題解決にも関わってほしい。

G氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月27日(火) 午後)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	多方面の分野から参加者が集うため、多様な意見を聞く事ができ、新たな人脈、コミュニケーションが生まれる可能性に期待して参加した。
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	当社グループ会社からの勧めがあり、応募した。当社はホテル業向けにシステム販売を行っていたため、観光という見地からホテルや地域に向けた新たな事業創出の期待があった。ホテルに対する新しいサービス、オンデマンドビデオ、DX、クラウドサービスを新規事業として考える。
3	講座修了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	役職・役割について変化はない。今後、継続して新事業創出への期待がある。
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	①アカウンティングとファイナンスの知識 事業計画書作成により上記の事業の収支計画を作る。プレゼン演習で説明力を高めている。 ②マーケティングの知識 感覚の販売から市場の見える化、アンケートでニーズを掴み数値化、4P概念を活用している。
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	①アカウンティングとファイナンスの知識 社内のBS、PLへの理解が深まった。 ②マーケティング 手法を自社における新規事業の創出や推進の参考としている。観光業界は、人への投資、事業への投資が弱いところがあり、事業投資の必要性など考えるための基礎となっている。
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	今後の新規事業を立案していく場面で、仮説を立てて検証していく過程や社内プレゼン時の資料作成、プレゼンに活用していけると考える。社内プレゼン、数字で示す販売計画、説明、粗々のまとめ方、経営意思決定を通すためのまとめ方や説明などで活用できる。
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	参加しなければ出会えなかった方々と交流ができ、受講後も4~5人と交流している。その後の活躍を聞くと、とても刺激を受け、頑張る源にできる。また、様々な気づきがある、これまでの経験ではなかったであろうことを感じている。

6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	受講を検討し、もし迷っているなら、何も考えずにチャレンジするべきだと強く思う。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	①会社として、現在は過渡期にある。後輩、若手に対して、事業をつないでいく、会社に新規事業を事業提案していく、ことを続けていきたい。これまでホテル中心に販売活動を行ってきたが、地域として横の繋がりがうすいと感じる。観光業は地域としての売り出しが出来ていないことが問題であろう。 ②地域を売り出すことで、需給ともにWIN-WINとなるはずだ。個別にホテルなどが専ら長っても限界がある。温泉街などのまとまり、地域のまとまり、そしてその枠組みに参画するしきみを整え、地域全体のイメージを高めることをめざし、それらに協力していきたい。顧客視点から観光事業者にはうすいとも感じる。ノウハウを持っていかれるなど競合と協同関係を結ぶことは難しいかもしれないが、顧客に高い付加価値を提供することが優先されるべきだ。 ③旅館で働く女性、育休、産休、その補充を協力して人の融通を出来ないか。人のやりくりするツールがビジネスになる話も聞いた。意識を変えるなど、これら観光業界における問題解決人材を開発し、提供していきたい。

H氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月27日(火) 午後)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	仕事で観光業界を担当することになり、観光全般を学べることから受講した。
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	前年度から、地元大学からの紹介もあり、当組織から参加している。今回、受講を希望したところ、組織から快諾を得られた。また、観光庁事業であったことも要因の一つである。
3	講座修了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	①今年度から、観光業界責任者になり、受講において良かったと思っている。受講したことによる人脈の拡大や知識等を役立て、北陸地域の観光に貢献することを期待されていると考えている。北陸先端科学技術大学院大学の講座は、観光業界における情報に限らず、その他情報収集方法、行政で行っていることなど幅広く知ることが出来る、当組織の期待も大きい。また北陸の中での観光資源の活用例など知ることが出来る。 ②加えて、講師を含め、修了者間ネットワークが出来、メーリングリストを活用することで、情報交換ができるようになっている。とても心強いネットワークである。
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	幅広い分野を学び、新しい分野の取組みを紹介頂いたこと。さらに、講師陣、大学関係者、参加者等々の人脈が拡大し、ネットワークができ、今後も大いに役立てたいと思う。
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	スキルではないが、この講座によって人脈のネットワークができ、メール等で情報交換が出来るようになった。
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来るかと考えますか。
回答	受講したことで、誰かに何かを相談できること、励ましあえることは大きい。また、これまであまり知らなかった観光庁の取り組みも知ることが出来た。これらは業界の研究や発信に活用していきたいと考えている。
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	この講座を一緒に受講した直接的なつながり、修了者を含めた間接的なつながり、これらは私の財産となっている。
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	①観光業界には、議論の場や業界に関連する教育を受ける場が少ない。また他の業種のケースを知ることも大切だ。それにより新しい発想が生まれ、気づきが得られると考える。さらに観光業界や関連する業界の関係者だけでなく、他の業界の人々との交流も期待したい。 観光業界はコロナによりダメージをうけているが、観光は21世紀のリーディング産業と捉え、さらに活性化していくようご支援いただきたい。他大学との連携もはかり、他大学の講座を参加出来る、意見交換が出来る、観光庁他行政の方と意見交換ができるような講座も期待したい。 ②本事業の14大学における修了者の交流の場を、年に1、2回作ってもらいたい。例えば年に1回フォーラムを開催するなど。観光を盛り上げたい人が集まること出来る場の設定を期待したい。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	私自身は、観光業における就労経験はない。したがって客観的な視点から、産学官連携を含めた連携、マッチングや発信等を行っている。以下にある観光業界における問題を将来にわたって解決していきたい。 ■問題・課題について

	<p>観光業界の課題として、生産性の向上、所得増加、所得を上げる取り組みが必要だ。これらなくして観光業は活性化しない。付加価値をつける取り組みが必要である。夢のある産業でありながら、おもてなしの価値が認められない（日本の文化の一部になってしまっている）ため、おカネにならない。</p> <p>また、問題解決力、解決策への道標が少ないことも問題だ。あわせて観光業界に就労する人の意識改革も必要だ。いろいろな業態の人が集まることが出来る場の設定、また異業種間の交流も必要だ。</p> <p>■生産性向上について</p> <p>将来的には富裕層のインバウンドの取り込みなども考えられる。</p> <p>地域がまとまって地域ブランドを発信する成功事例が出せないか。そのためにはクリエイティブな人材が必要である。資金調達やクラウドファンディングもある。地元で有力、強力なリーダーを作る必要もある。やるべきことは多い。このスクールに行ったことが考えるきっかけとなっている。</p> <p>■付加価値について</p> <p>ブランド力、PR、魅力的なプロモーションビデオの製作、これらを実現可能にする人材を探し、取組んでいく必要があると考える。</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

J氏 インタビュー調査記録

(実施日時: 令和3年10月27日(火) 午後)

1	受講の動機またはきっかけを教えてください。
回答	<p>①会計、ファイナンスについての知識が欲しかった。②変化に対して柔軟に対応し、目標を持ってワンチームで連携していける組織にするにはどうしたらよいか。</p> <p>②アフターコロナにおいて観光業の進むべき方向性はどうか。これらを学びたいと思い受講した。</p> <p>当社は、池田町の第3セクターであり、地域に対する貢献を強く意識している。</p>
2	受講は企業・団体からの指示や推薦でしたか。
回答	日経新聞で記事を見て、自分の意思で参加を決めた。
3	講座修了後、所属企業・団体において、役職・役割の変化があった場合、その理由をどのように考えておられますか。
回答	特に役職の変化はない。
4-1	受講によって獲得した能力、技術、スキルのなかで、効果的、有効的、今後活用できると考えるものは何ですか。
回答	<p>①社内において事業を創出し、それを成長させるプロセスで活用している。</p> <p>これまで財務諸表の見方がよく分からないままであった。が、受講によって苦手意識を持つことなく資料を手にとることが出来るようになった。まだまだすぐに状況を読み込めるわけではないが、講義の時の参考資料など手にしながら進めている。</p> <p>②当社の事業は、町のアンテナショップから始まり、新しい施設の運営が助成し、人も増え（現在30から40名程度）、大きくなっている。このような中で、ミドル管理職の育成を求めており、ピッタリ合った。今回はステップ1として、苦手意識を払拭したかった。</p> <p>③これからは、人事評価、人づくり、人材育成を考えたい。</p> <p>また、この講座で同年代の方々、同じような問題を共有することが出来たことは意義深い。とても良い機会であった。</p>
4-2	上記で得た能力、技術、スキルを活用した具体例を教えてください。
回答	<p>昨年より取り組んでいた社内の新規事業（イントラプレーナ）の壁を突破するべく、独立した新部署を立ち上げる。（令和4年春より稼働開始予定）社内新規事業を始動させることの難しさを感じている。</p> <p>■当社の新規事業について</p> <p>農村教育、森林教育を始める。プレイ事業で顧客の反応、データ収集を行った。グリーンツーリズム、食や環境を知る事業も考えたい。</p> <p>事業を始めるにあたって、事業計画、収支計画、プレゼン、これらをご講座で学び役に立っている。特に、この講座で習った5分ピッチプレゼンが役に立っている。資料の作り方、伝え方は、学びとなり活かしている。</p>
4-3	受講によって獲得した能力、技術、スキルを、今後さらにどのように活かしていくことが出来ると思いますか。
回答	組織づくり、地域資源を活かした個性のある新規事業への取り組みなどを通して、チャレンジしていく組織風土を醸成していきたいと考える。
5	上記の能力以外に受講によって得たこと（人脈、つながり、気づきなど）がありましたら、教えてください。
回答	組織づくりにおいては、若い経営者の皆さんが、同じような課題を抱えていること、完全な解はないものの、それぞれの状況に応じて課題を解決し前進していることを知ることが出来た。自分だけではないという安心感、希望を持つことが出来た。
6	これから受講する方や、大学に対して、ご意見、ご要望、改善点などありましたら、教えてください。
回答	特になし。
7	将来のご自身のめざす姿について、教えてください。
回答	①次にバトンタッチする世代（30代）の育成が必要であると考え。管理職の資質がありそうな人もいる。学ぶ機会、もっと前段階の学びの場、自分が会社をどうするか、といった気づきを得る場が必要であり、作っていきたい。

	<p>②この講座は有益であり、次の世代の受講も考えている。例えば、商工会議所が行うセミナーもあるが、一過的なもので終わってしまい、横の関係を築くことは難しい。横の繋がりが出来ることがこの講座の利点である。</p> <p>■新規事業について 森林を活性化させる新規事業では、若手のアイデアが必要だ。若い人が主導できるような環境を整える管理者となっていきたい。アイデアを形にする、そして顧客に喜んでもらう、その結果、街が活性化する。そのために若い人を焚きつける、輪を作る、自分と同じようなやる気のある人を見つけ、やる気をもってやってもらう、そのような組織を作っていきたい。</p> <p>■投資について 今あるキャッシュをどのように投資するか。投資をしてリターンを得る事業計画を練る、そして事業運営を着実に推進できる管理者になりたい。</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(4) インタビュー調査まとめ

(4.a) インタビュー調査対象者から見える中核人材の姿

前項(2) 調査対象者において、インタビュー調査対象者の属性を整理した。その属性を含め、再整理を行い、本年度における調査対象3校における受講者に限定した範囲での観光産業の中核人材の姿を整理したい。

まずはインタビュー調査の対象とした9名の分類を下のマップで整理を行った。

■整理①インタビュー調査対象者の分布

[表 インタビュー調査対象者の分類マップ]

	説明	経営者 (取締役等)	業務執行 (管理者等)
主体	観光に対する中心的事業者 例：宿泊、飲食、代理店、観光資源など	A氏	B氏、C氏、
客体	観光を支援する事業者 例：地域プロデューサー、コンテンツづくり、組合、業務支援など	F氏	D氏、E氏、G氏、H氏、J氏

縦軸に主体、横軸に組織内での階層において整理を行っている。主体とは、観光産業において主軸として活躍する事業者である宿泊業、飲食業、旅行代理店、観光資源などと定義した。また客体は、その観光産業を支援する事業者である地域プロデューサー、コンテンツづくり、組合、各種団体、業務支援コンサルティングなどと定義している。

横軸は、その組織内での階層を経営者と業務執行(主に管理者)の2つに分け、整理を行い、インタビュー調査対象者9名をマッピングした。

分布に少々偏りはあるものの、概ねそれぞれの領域を網羅したインタビュー調査となっている。ここでは、観光産業は、主体が個々に自事業の収益や投資効果に目を奪われてしまい、地域としての魅力を減退させている可能性があるとの筆者の問題意識からの設定である。この筆者の問題意識は、前項<インタビュー調査記録>でも、インタビュー対象者が同様のことを述べていることから、地域の観光産業の成長を阻む要因の一つとして考えて良いのだろうと思う。観光産業はその主体だけでは成長が見込めないであろうとの仮説である。宿泊施設を設ける、飲食を出店する、観光資源をアピールする、などで利用者にその魅力を訴求する段階は過ぎ、地域としての魅力を訴求する段階に移行している地域が多いのであろうと考えるからである。

主体を支え、まとめ役となる客体との協業によって、地域がまとまり、その地域の利用者に対する付加価値をさらに高めることが、次の段階の地域の観光産業であろう。そのようなまとめ役、そしてまとめ役との意思を同じくし、議論を重ねることが出来る人材が、中核人材に求められる要素のひとつであると考えます。

■整理②[共通した成果の抽出]

また、前項で記したインタビュー調査記録から、受講者にある共通した成果を以下の表に整理した。

	受講者における共通した成果 (受講者による申告)
愛媛	<ul style="list-style-type: none"> 地域の観光産業に関係する人々の繋がりができたこと 地域にある観光資源に対し実際に触れる、深く知る機会を得たこと
滋賀	<ul style="list-style-type: none"> ウェルネスと地域の結びつけ、コンテンツを開発すること
北陸	<ul style="list-style-type: none"> アカウンティング、ファイナンスはじめとする経営の基本知識の習得 簡潔にまとめ、伝える(プレゼン)技術の習得

3校共通

- ◆ 人脈づくり（ネットワーキング）
- ◆ 問題・課題を共有できる安心感

3校共通にある「人脈づくり(ネットワーキング)」は、昨年度の報告書にもその成果として挙げられている。次項の受講者の問題意識にあるように、観光産業は個々の事業者において閉じた関係か抜け出せず、横連携が難しい業界であることがわかる。横の情報を取得する、横と密に連携し新たな付加価値を創造するといった動きが難しいことがインタビュー調査からも示される結果となった。

3校それぞれにおける受講者の成果は、それぞれの教育プログラムの特徴とその成果が関連している。これらは、以降の項<(4-b)調査対象3校の機能や役割のまとめ(受講者の声から)>において、各校の特徴と受講者の成果を合わせて論じることとする。

■整理③[受講者からの問題意識に関する整理]

インタビュー調査によって、観光産業に従事する人々の不安や悩みも同時に聞き取ることが出来た。インタビュー対象者に共通にある業界や所属する組織に対する問題意識を以下の枠に整理を行った。

観光産業における受講者からの問題意識（受講者共通の認識）

- ◆ このようなビジネスに関する知識を統合的に学ぶことができない。
(組織内研修も少なく、外部機関の研修を受ける機会も少ない)
- ◆ 事業をどのように考えるか、事業をどのように変えるべきか、競争力を高めるか、新規事業を開発するにはどのようにするべきか、このようなことを考えまとめるための技術を知らない。
- ◆ 組織内、また観光産業全体として事業の取り組みについての問題意識が薄いように感じる。
- ◆ 組織外の人を知らない。また知る機会もほとんどない。よって人脈が出来ない。横の繋がりが少ない。

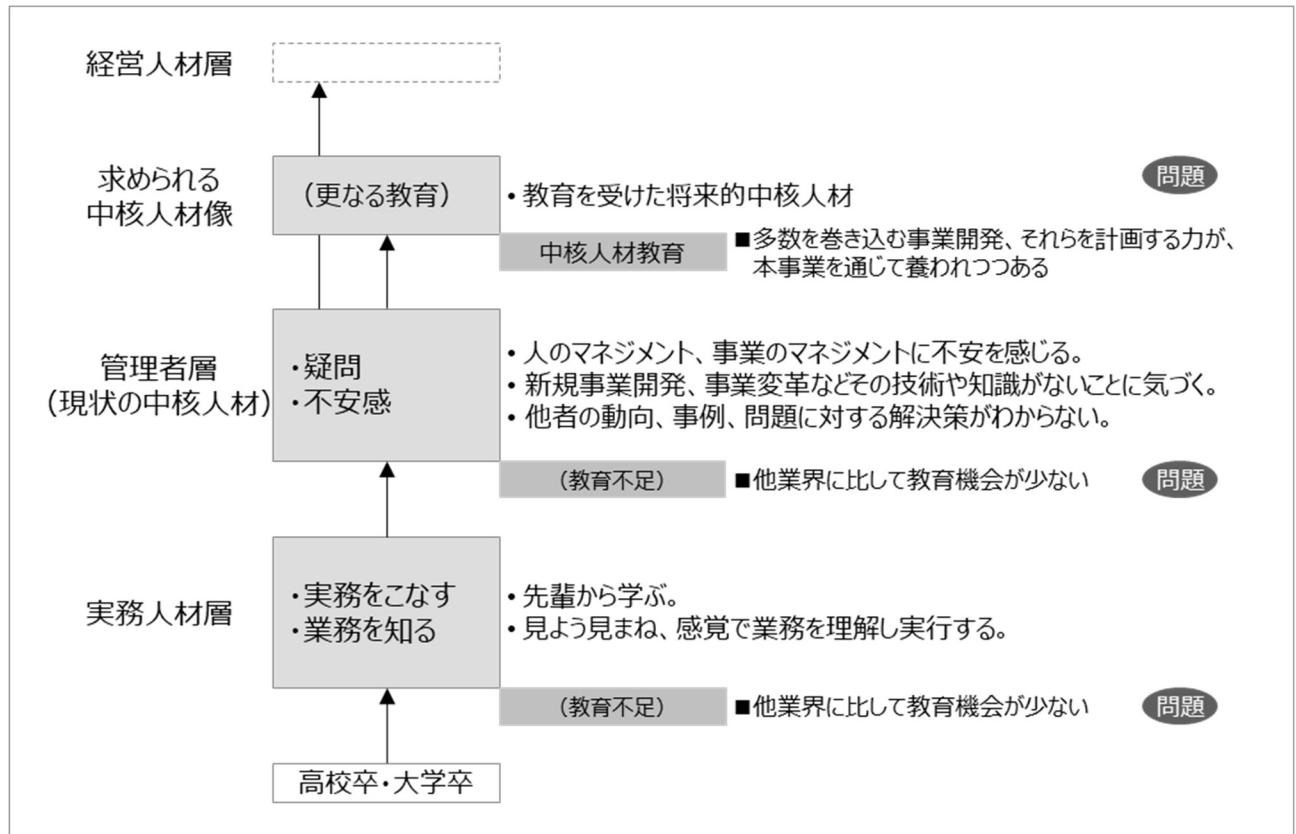
整理①から③においてわかることは、現状は、本教育プログラムの受講をきっかけに身近なところから着手し、教育プログラムにおいて得た知識や技術を活用した活動を開始していることである。将来的には、地域をまとめることに活躍したい、地域に貢献できる人材になりたいと答える受講者が多い。地域の活性化に対する意識は高く、さらに地域ブランドを高めたいと答えている。観光産業は、他の業界と比して地域との関係性、密着度が高いことがその特徴だ。地域の浮き沈みと事業が密接に関連していることから、地域への貢献を強く意識する方々が多いのだろう。このように地域と観光産業に対する愛着と強い意志を持った人材を中核人材教育によって教育し成長を促す。しかし、人の教育、成長には時間を要する。このインタビュー調査は自走を開始した3校に限定した調査であるため、まだまだ顕著な成果、定量的な成果を掴み取るところまでには至っていないが、時間とともにこの中核人材が近い将来、社会的に反響をもたらす成果に繋がっていくものと期待する。

■整理④[観光産業にある人材教育イメージの整理]

インタビュー調査データを基に、受講者が感じている観光産業にある人材育成イメージを図6にまとめた。簡単に述べると、管理者層(または現状の中核人材)になったものの、事業や人のマネジメントにおいて、疑問や不安を多く抱えていることがわかる。その原因は、実務人材階層時に必要な教育受講や知識習得の機会を失っていることにあるのだろう。本教育プログラムを受講することより、知っておくべきことが多くあり、まだまだ学ぶべき事項が多いことに気づいた、との声もいくつかあった。

観光産業として、また個々の事業者として、人を起点とするサービスを提供することにより付加価値を創出している業界でありながら、人への投資を怠っているということになる。もちろん、人への投資には資金が必要であり、その資金を生み出す原資が確保できない現状は、経営者にとっての悩みどころなのであろう。このような行政支援による教育プログラム受講機会を知り、活用することから始める、中核人材となる人材をもっと早い段階から教育の場に参加させることを経営者は検討すべきであろう。

〔図6 観光産業にある人材成長イメージ〕



■整理⑤〔中核人材のめざすべき役割イメージの整理〕

受講者に、「将来のご自身のめざす姿について、教えてください(質問7)」と、問うた。受講者に共通した答えの言葉はそれぞれ異なるものの、異口同音に返って来た答えは「地域をまとめ、地域を強くし、地域に貢献したい」ということである。では、本教育プログラムを受講した受講者がどのような人材像となり得る可能性があるのだろうか。そのイメージを図7に整理した。

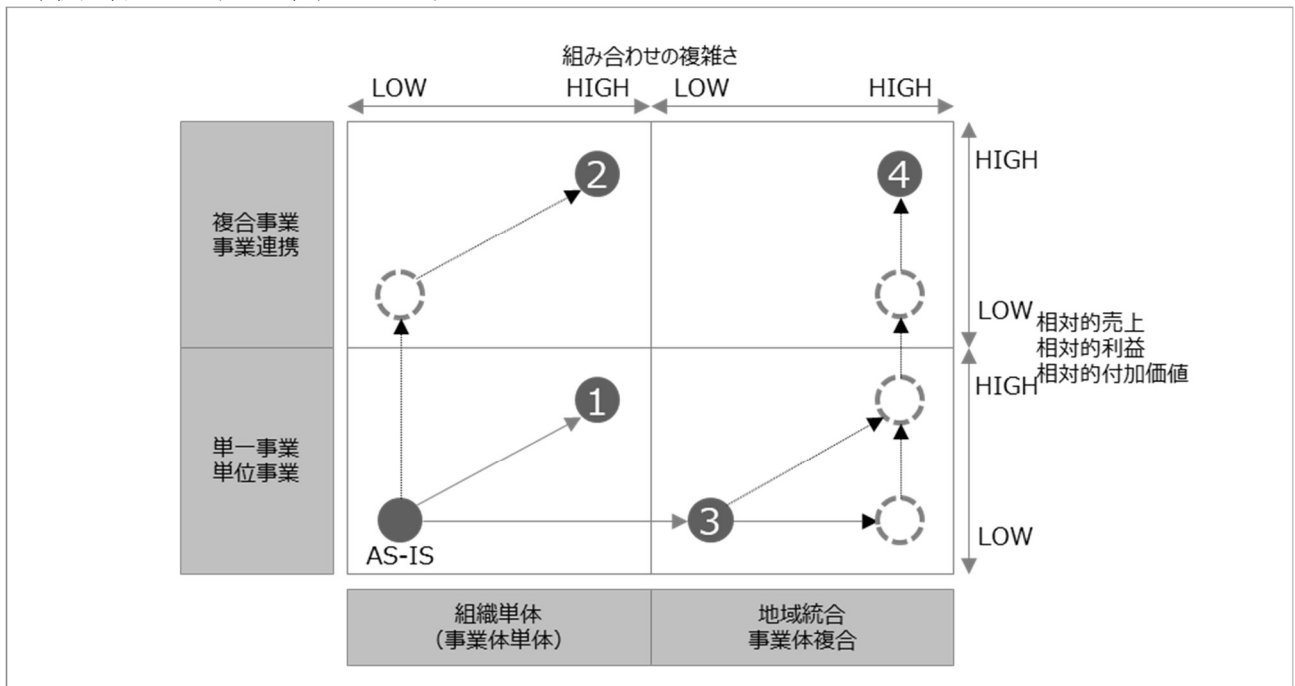
受講者から聞き取った将来の姿(ゴール)イメージを次図に記し、その姿を番号(1から4)で示した。1から4それぞれは、以下のように定めることができる。

- <1> 担当する事業の範囲において、他の事業と連携し売上、利益、付加価値を最大化する。
- <2> 関連する事業をまとめ、売上、利益、付加価値を最大化する。
- <3> 地域にある資源やコンテンツをまとめ、利用者の利便性を図る。
- <4> 地域にある資源やコンテンツをまとめ、地域ブランドを築くとともに、売上、利益、付加価値を最大化する。

インタビュー調査からは、中核人材の将来の姿として、<4>にあるポジションをイメージされている方が多いのかもしれない。大変心強い。しかし地域をまとめるには、個々の事業者との利害対立が顕在化する。この問題をどのようにまとめるか、中核人材の力が試される。まずは自組織内を変化させ、高付加価値化をねらう<1><2>、または地域がまとまることによる価値提供を事業者間で共有し、個々の事業者への利益に繋がることを伝え、まずは動き出す<3>をめざすところから始めることが、本教育プログラムを受講した中核人材が目指すところであろう。

インタビュー調査対象者およびそのデータに限って論じると、中核人材は問題意識を持ち常に考え続け行動を起こす人、と定義できるのかもしれない。これら中核人材の整理、および次項<調査対象3校の機能や役割のまとめ(受講者の声から)>を基に、最終章において求められる中核人材像についてまとめを行いたい。

〔図7 中核人材のめざすべき役割イメージ〕



(4.b) 調査対象3校の機能や役割のまとめ(受講者の声から)

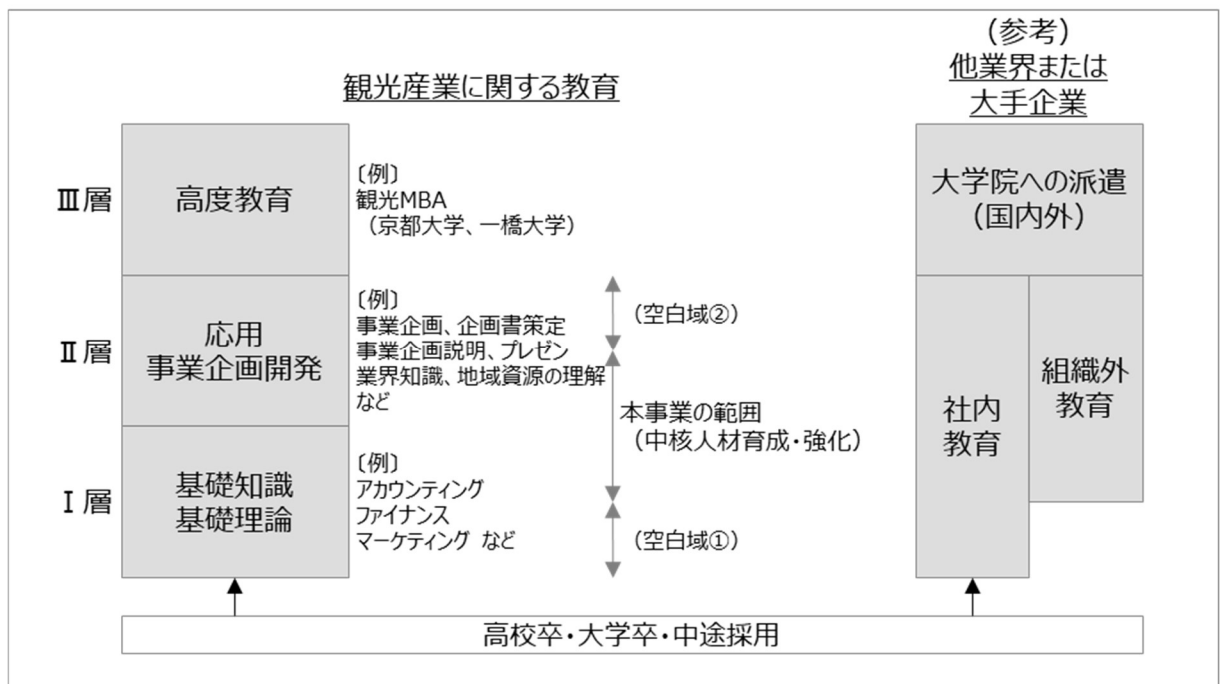
インタビュー調査(9名)のデータの範囲内ではあるが、受講者の満足度は高い。また全員が成果を得ているとしていることから、本事業は観光産業における中核人材の育成・強化の目的を一定に達成していると言える。しかし、インタビュー調査対象者は、3校でありその受講した講座は異なり、その内容も異なる。

ここでは、受講者が各大学の提供する教育プログラムを受講し、得た成果を各大学の特徴とともに考えてみたい。

■整理⑥〔観光産業における教育ステップ〕

受講者全員が、本事業の教育プログラムを受講し、成果を得ている、そしてその得た知識と経験を普段の業務に活かし、受講したことに満足していると回答している。そもそも観光産業において教育機会が少ない中でのこの産業に特化した教育であるため、受講者の普段の悩みや苦しみを解決するための糸口となっているのだろうと考えられる。

〔図8 観光産業と他大手企業における教育段階の概念比較〕



本教育プログラムは、そのプログラム内容は各校異なるものの、図8にあるI層の一部とII層の一部の範囲をカバーしていると考えられる。その範囲の上下に「空白域①②」があるように考えられる。「空白域①」は、本年度の取り組みにある「コンソーシアム共通における教育プログラム」においてその開発を行い、来年度以降に共通プログラムを実施し、中核人材に対し、まずは基礎知識や基礎理論を習得することから始まるのであろう。これにより、II層の応用や事業企画開発を組み立て、まとめ、経営者や金融機関等に説明を行うための土台が中核人材に養われる。

共通プログラムが全国的に提供されることにより、現在、各校で行っている中核人材への教育プログラムを「空白域②」に延ばすことが出来、さらに力強い中核人材の輩出、育成が期待出来る基盤が整うこととなる。コンソーシアムに参加する14大学には、中核人材を育成する教育をさらに強化していかなければならない。共通プログラムについては、4章で触れることとする。

以降の項において、各大学の特徴とともに受講者にみられる成果を考えてみたい。

■整理⑦〔愛媛モデルにおける受講者の成果〕

愛媛モデルは、大学が地域の様々な関係者を繋ぐマッチング・ハブ機能に、その特徴があると考えられる。受講者もその特徴に対し、大きな満足を示している。「整理③〔受講者からの問題提起に関する整理〕」に挙げられているように、人と人の繋がり、ネットワーキングの問題に講座の焦点の絞り込みを行っている。この点において、受講者の満足度の高さとともに、成功を収めている講座であると言える。地域の観光産業が活性化するためには、その関与者がまずは強い結びつきを持ち、地域の価値を深く理解し、付加価値を創出することを、愛媛モデルは狙っているのであろう。

地域の価値を深く知ることを具体的例で述べると、「しまなみ海道」を観光産業に携わる人が直接体験出来るのがこの講座にはある。重要なキーワードは、供給者、需要者の両方にとって「体験」である。地域の観光産業に携わる人々は、地域の観光資源を体験することが少なく、実際に体験することで利用者や旅行者の視点でその効用を肌身で感じ、それを生々しく旅行者に伝えることが出来る。これは供給者にとって説得力のある説明が出来ることでもある。

「しまなみ海道」とは、広島県尾道市から愛媛県今治市を結ぶ複数の橋をサイクリングなどで渡ることで、瀬戸内海の美しさを体験することが出来る観光コンテンツである。

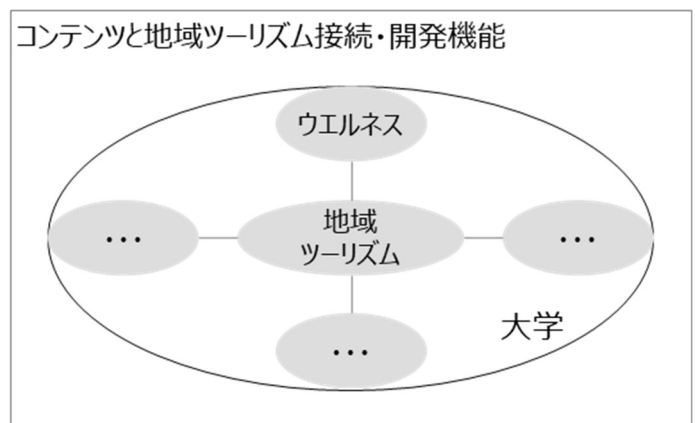
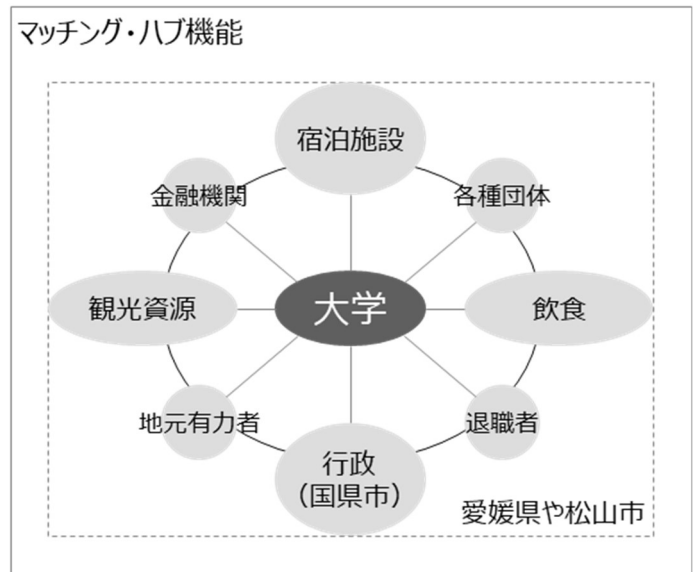
愛媛大学の令和3年度(2021年度)の教育プログラムは、第6期となる。このように毎年、受講者を輩出し、地域のネットワーキングを築いた中核人材を育成している。地域における成果や成功事例が、これから出現することが大いに期待される。

■整理⑧〔滋賀モデルにおける受講者の成果〕

滋賀モデルは、テーマと地域ツーリズムの接続・開発である。現在のテーマは「ウェルネス」であり、ウェルネスを地域の観光資源や文化と結びつけ、観光コンテンツの開発をめざしている。

滋賀モデルの受講者は、既にいくつも観光コンテンツを開発し、始動させている。その事例を紹介する。「金勝山ウェルネスツーリズムセミナー」、「Ritto Wellness Tourism」、「たてば珈琲」がそれぞれ利用者に提供されている。

「金勝山ウェルネスツーリズムセミナー」では、地域の観光資源である金勝山の金勝寺を活用し、地域で活躍するヨガ講師、和歌(百人一首舞)の講師を招き、身体を動かし、また心を豊かにすることで、健康を獲得し、地域の他の名所も案内する活動である。このセミナーに参加し、身体と心が豊かに、そして健康を考える機会を得た利用者は、地域のファンとなるであろう。(11月に実施)



「Ritto Wellness Tourism」では、地域の苔テラリウム講師を招き、緑に触れ、ヨガ、馬と触れ合うことでセラピー（癒し）を提供している。ストレスの多い現代社会において、居住する地域を一時離れ、滋賀に癒しを求める機会を提供する試みである。（10月に実施）

「たてば珈琲」は、市内にあるスタンドや地域を訪れた時、また各所で飲むことが出来るコーヒーバッグ式の簡易コーヒーである。「たてば」は、立場であり、栗東市を通る東海道、中山道にかつて存在した休憩所の名称である。地域を訪れた人たちが「たてば珈琲」を飲み、ひと時の休息を提供する試みである。この「たてば珈琲」は、通信販売でも販売されており、全国から取り寄せをすることが出来る。

ウェルネスをテーマとして、健康的な豊かな暮らしを実現する、そのための癒し、安らぎ心の安定を、地域各所で提供していることで、地域全体がウェルネスなのである。

滋賀モデルでは、このような事業の組み立て（ビジネスプラン）、また事業に必要な人の繋がりを提供している。ウェルネス、そして次の地域との接続を可能にするテーマの発掘が期待される。

■整理⑨〔北陸モデル〕

北陸モデルは、事業企画開発を行える人材となれるよう、その訓練を行う場の提供となっている。受講者からは、アカウントティング、ファイナンスを知ることにより、BS、PLがわかるようになってきたとの声がある。経営の基本要素であるカネを中心に、ヒト、モノ、情報に対するマネジメントの考え方は、受講者にとって新鮮に映ったようだ。

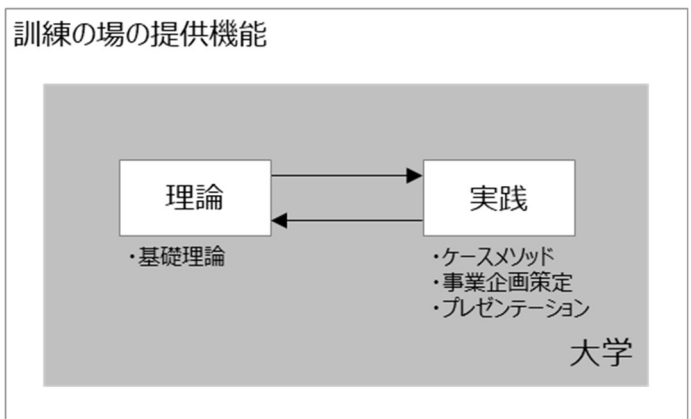
資金調達や会計情報は、ビジネスの上では、基本であるが、観光人材にとっては、経理部門や財務部門で働くことがなければ学べない知識となっている。また、ファシリテーション、イノベーションに関するマネジメントを教えている。それらは受講者にとって、これまでにない発見であったようだ。

講座の中で、理論と実践を常に意識させ、理論を理解するとともに、その得た知識を実施に計画書にする、またプレゼンテーションにおいて効果的に伝える訓練もしている。いかに優れた事業計画であってもそれが伝えるべき相手に伝わらなければ、意味がないということなのであろう。5分プレゼンテーションやブランド・ストーリー・ボードの組み立てのように、伝えるべきことを極限まで絞り込む、ストーリーづくり、論理構築は、観光産業で働く場では求められることが少なく、受講者にとっては貴重な機会となっているようだ。北陸モデルは、観光産業で働く人々の弱点を的確に掴んでいるように感じられる。

■調査対象3校における受講者視点におけるまとめ

フォローアップ調査においては、3校のみをその対象とし、受講者にとってはいずれかのモデルを受講しているのみである。受講者の声をまとめると、観光産業で働く中核人材にとっては3つのモデルいずれも受講したいと感じるところであらう。

それぞれの特徴を持つ3つのモデルいずれも受講し、教育と経験を積むことが、中核人材育成・強化をさらに高めることとなるのだらうとの結論に至る。ここ数年でオンライン・ビデオ講座の受講も可能になったことから、全国いずれの地域からもこの3つのモデルを受講できる機会が中核人材に与えられることが、彼ら彼女らから求められているのであろう。



4章 本年度に開発された教育プログラム

令和3年度

『産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務』

事業実施報告書

4章

本年度に開発された教育プログラム

4章 本年度に開発された教育プログラム

4-1) 山口大学により開発された令和3年度教育プログラム

■名称

「SDGsによる山口県のスポーツ観光講座 2021」

■概略

山口県は自然資源に加えて、歴史遺産など観光資源に恵まれているが、日帰り観光客が多く滞在型の観光客が少ない。本プログラムでは、山口県の自然資源を活かしたポストコロナでのスポーツ観光を通じて山口県のSDGs達成を図ることのできる担い手の育成を目指す。本講座では、アウトドアスポーツをはじめ自然や農村での体験ツアー等、広く身体活動（アクティビティ）をとまなう観光全般をスポーツ観光の対象とする。

実施時期	令和3年(2021)年8月～令和3年(2021)年11月
受講料	無料
受講者	本年度17名(予定定員15名) 山口県内対象
方式	対面形式(一部外部講師がオンラインにて参加)
授業時間数	全6回 スピノフ企画やシンポジウムの開催も有り

山口大学 令和3年度 SDGsによる山口県のスポーツ観光講座(第2期)

■事業概要

山口県は、自然資源に加えて、歴史遺産など観光資源に恵まれているが、日帰り観光客が多く滞在型の観光客が少ない。本プログラムでは、山口県の自然資源を活かしたポストコロナでのスポーツ観光を通じて山口県のSDGs達成を図ることのできる担い手の育成を目指す。本講座では、アウトドアスポーツをはじめ自然や農村での体験ツアー等、広く身体活動（アクティビティ）をとまなう観光全般をスポーツ観光の対象とする。

ポストコロナで山口県の観光資源を活かし地域にも幸せをもたらす新たな価値を創造する（アクティビティ×自然×文化×食）

■募集要項

対象者・人数：
スポーツ観光を推進する旅行、運輸業、自治体、DMO担当者、今後運営を考えている観光業、起業家、スポーツ関係の方など：
正受講生15名（原則ワークショップ・セミナーすべてのカリキュラムに参加できる人）
準受講生（一部のセミナーに参加）

実施場所：山口大学古田キャンパス、KDDI維新センターをはじめ県内各所

予定：8月下旬から11月下旬（全6回）

総時間数：55時間（自学時間を含む）


受講料：無料（食事および宿泊研修の宿泊費は自己負担）

■カリキュラム内容

- ①8月25日 開講式アフターコロナでのスポーツ観光（KDDI維新センター）
- ②9月1日 観光データとテクノロジー（山口県産業技術センター）
- ③9月15-16日 スポーツ観光の地域連携（西長門リゾートホテル）
- ④10月7日 ユニバーサルツーリズムを学ぶ（秋吉台国際芸術村）
- ⑤11月4日 スポーツチームとまちづくり（周南市立徳山駅前図書館）
- ⑥11月25日 最終審査会修了式（山口大学学生会館）

アフターコロナでSDGsを取り入れ山口県での観光の持続的成長を目指し地域とともに**観光商品、観光プロモーション、イベント**などを考え創造していく。受講しやすいよう、補講のためのEラーニングも取り入れる。自主化に向けた大学やスポーツチームとのスピノフ企画も組み入れていく。

アクティビティ
×
 自然×文化×食



■実施体制スキーム

国立大学法人山口大学と山口県観光連盟、山口県観光スポーツ文化部、公益財団法人日本交通公社、一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構、一般社団法人日本アドベンチャーツーリズム推進機構の協力で実施する

■対象とする受講者

- ①山口県内のホテル・旅館、アウトドア事業者、旅行・運輸、観光産業、スポーツチーム、観光戦略立案に関わる行政や関係機関の担当者
- ②全6回の講座に参加できる方を受講生とする。

■特徴

- ・県内外や海外のスポーツ観光の成功事例を紹介。
- ・SDGsの視点から山口県内の自然資源、スポーツ資源を再考。
- ・アイデアを実現するための異業種間でのネットワークの構築。
- ・地図情報システム QGIS の活用。
- ・一部参加を希望する方を準受講者とした。
- ・個人のビジネスプランとグループとしてのビジネスプランを作成。

■独自の取組み

- ・行政、自治体の方をはじめとして、山口県内にある研究機関、観光地等との関りを取り入れることで、ネットワークを構築。
- ・昨年は講師として登壇して頂いた方に、今年は受講者として参加。

■本年度プログラムにおける工夫

- ・昨年度のアンケート結果に基づき、カバーできていなかったSDGs項目を意識して講座を構成。
- ・SDGs-9「産業や技術革新の基盤をつくろう」では、工学部経由で山口県産業技術センターの協力を得て第2回「観光データとテクノロジー」講座の開催。
- ・SDGs-10「人や国の不平等をなくそう」では、信州大学の協力を得て第3回「ユニバーサルツーリズムを学ぶ」講座を開催。
- ・スピンオフ企画として、「スポーツチーム、施設見学とPRイベント」やシンポジウムを開催しネットワーク構築を重視。

■終了条件

- ・全講座の受講
 - ・講座討議参加
 - ・プロジェクトの作成等
- 講師・コーディネーター等で組織する審査員が評価

■本年度のプログラム

令和2年度に新規採択として実施をし、令和3年度は前年度の結果を踏まえ下記の通り実施した。

	日時	形式	題	概要
1	08月25日(火) 10:00~17:00	講演 ワークショップ	開講式 「アフターコロナでのスポーツ観光」	講演①「講座の概要」 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 講演②「プロジェクトの説明とチーム編成」 山口大学 経済学部准教授 グループワーク 開講式 「開講宣言」 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 山口県観光連盟専務理事 講演③「山口県の自然の魅力と観光庁講座による人材育成」 山口大学副学長 講演④「ニューノーマル時代の観光と人材育成」 観光庁参事官 講演⑤「ポストコロナでの地方観光」 日本総合研究所 主席研究員
2	09月01日(火) 10:00~18:00	講演 ワークショップ	「観光データとテクノロジー」	講演①「データからスポーツ観光を学ぶ」 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 講演②「ビッグデータから見る山口県の観光」 山口県観光連盟専務理事 講演③「心理学とテキスト分析から観光を学ぶ」 追手門学院大学 経営学部教授 講演④「すぐに使える！Googleマイマップ作成ミニ講座」 山口大学大学院 創成科学研究科 講演⑤「テクノロジーのスポーツと観光への活用-衛星による地図ソフト、ブラインドマラソンでの活用など-」 山口県産業技術センター 山口県産業技術センター

3	10月7日(水) 10:00~18:00	ワークショップ 体験プログラム	「ジオパーク&ユニバーサルツーリズムを学ぶ」	<p>グループワーク 講演①「秋吉台でのスポーツ観光への取り組み」 美祢市観光商工部観光振興課 講演②「山口県の自然とジオパークの取り組み」 山口大学地域未来センター特命教授 講演③「大自然はバリアフルだから、楽しい！」 合同会社SOU代表 講演④「長野県での取り組み」 信州大学学術研究院総合人間科学系 講演⑤「障害者差別解消法とユニバーサルツーリズム」 IOE RESEARCH プログラムディレクター 講演⑥「山口大学での取り組み (UNITI ライセンス講習実施報告)」 鳥取大学大学院 連合農学研究科 (山口大学所属) 山口大学大学院 創成科学研究科 山口大学大学院 経済学研究科 体験型車椅子(HIPPOCamp)の実演</p>
4	10月18日(月) 10:00~16:30 16:30~17:30 10月19日(火) 8:30~12:00	ワークショップ 体験プログラム	「スポーツ観光の成功事例紹介と地域連携」	<p>18日(月) ワークショップ、グループワーク 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 山口大学 経済学部准教授 講演①「広域連携アウトドア観光の取り組み」 長門市役所経済観光部観光政策課 講演②「スポーツ観光事例と広域連携について」 一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構事務局長 グループワーク中間発表(4プラン) 【コメンテーター】 山口県観光連盟専務理事 公益財団法人日本交通公社 上席主任研究員 地域活性化室長 一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構事務局長 山口大学 経済学部准教授 山口大学 農学部准教授 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 講演③「廃校利用およびライフセービングクラブの取り組み」と廃校見学 海耕舎</p> <p>19日(火) グループワーク マリンスポーツ体験講座 海耕舎氏</p>
5	11月4日(水) 10:00~18:00	ワークショップ	「スポーツチームとまちづくりを学ぶ」	<p>講演①「福田フルーツパークの活動」 福田フルーツパーク 代表取締役 グループワーク 講演②「スポーツチームをまちづくり、観光にどのように活用するか」 大阪体育大学学長・日本スポーツツーリズム推進機構会長 【特別企画】スポーツチームをまちづくり、観光にどのように活用するか 【司会】 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 【スーパーバイザー】 大阪体育大学学長・日本スポーツツーリズム推進機構会長 【パネラー】</p>

				YMGUTS ACT SAIKYO ながとブルーエンジェルス ミネルバ宇宙 レノファ山口 FC
6	11月25日(水) 10:00~16:30	講義 ワークショップ	修了式 「ニューノーマル時代のスポーツ 観光」	プロジェクト最終発表会 【審査員】 ・アドバイザーボード 山口大学副学長 観光庁参事官 山口県観光連盟専務理事 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 山口大学 経済学部准教授 山口大学 経済学部観光政策学科教授 山口大学 農学部准教授 山口大学 地域未来創生センター地域連携シニアコーディネーター 審査結果発表、受賞修了式 プレゼンター 山口大学副学長 観光庁参事官 【シンポジウム】ニューノーマル時代の山口県のスポーツ観光 「開会のあいさつ」 山口大学副学長 「SDGsによる山口県のスポーツ観光講座」を終えて」 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 「講座の振り返りと未来へ向けて」 本年度受講生代表 「ニューノーマル時代の地方観光」 観光庁参事官（国際関係・観光人材政策担当） シンポジウム：パネルディスカッション 「ニューノーマル時代の山口県スポーツ観光」 【司会】 山口大学 経済学部観光政策学科准教授 【パネラー】 観光庁参事官 山口県観光連盟専務理事 日本航空前山口支店長

■令和3年度:受講生の属性

【本受講者】

業種分類	受講者数
旅行・観光局	2
自治体・行政	7
企業	2
スポーツチーム	2
自営・その他	4
計	17名

男女比	受講者数
男性	11
女性	6
計	17名

■自走化へむけての体制整備

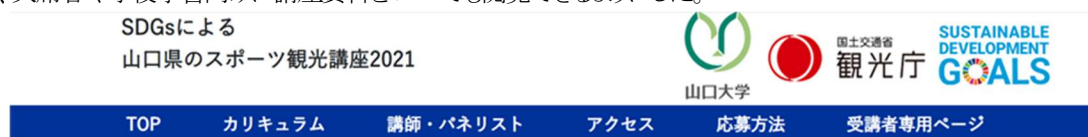
次年度の自走化に関しては、山口大学の地域創生センターの公開講座の中に「スポーツ観光講座」を開設し経済学部および経済研究科の専門授業の一部を組み合わせることで講座を運営していく予定である。17人の講座受講生に、大学および大学院での観光分野でのリカレント教育への関心を聞いたところ12人が「夜間・オンラインなど条件が整えば受講を検討したい」1人が「博士課程にチャレンジしてみたい」と回答した。受けてみたい専門分野としては、マーケティングが10人、ファイナンスが6人、データ分析と異文化コミュニケーション(英語教育を含む)が5人と続いた。これらの結果もふまえて、マーケティング系の専門科目に組み込むかたちで「スポーツ観光講座」を開講する予定である。

(参考) 広報活動、受講者募集活動

①ホームページの開設

受講者の募集、講座実施状況の紹介、受講者への情報伝達のため、本講座専用サイトを構築・開設。毎回の講座の状況を報告す

るほか、欠席者や事後学習向けに講座資料をいつでも閲覧できるようにした。



受講者専用ページ Content of the lesson

最新の講座情報や過去の講座情報を掲載しております。



「SDGsによる山口県のスポーツ観光講座2021」課題について(11月18日修正版)

[「SDGsによる山口県のスポーツ観光講座2021」最終課題提出について \(PDF:172KB\)](#)

優れた講師陣から学べ講座を通してネットワークも築ける



文化 × 食

■ 本講座について

山口県の豊富な自然資源、スポーツチームや五輪事前キャンプ地に使用した施設などのスポーツ資源を活かし、地域に幸せをもたらす価値を創造することを通して、アフターコロナでの観光およびスポーツの推進やまちづくりを推進する人材の育成を目指します。

※本講座では、競技スポーツ以外にもキャンプ、自然や農村での体験ツアー等、広く身体活動（アクティビティ）をとまなう観光全体をスポーツ観光の対象にします。



アフターコロナで山口県の自然資源やスポーツ資源を活かし
地域に幸せをもたらす新たな価値を創造する

- ① 県内外や海外のスポーツ観光の成功事例を紹介しレビュー
- ② SDGsの視点から山口県内の自然資源、スポーツ資源を再考する
- ③ アイデアを実現するための異業種間でのネットワークの構築

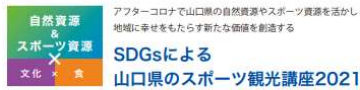
令和3年度 観光庁「産学連携による観光産業の中核人材・強化事業」

お問い合わせ

SDGsによる山口県のスポーツ観光講座事務局
国立大学法人 山口大学 経済学部 観光政策学科（西尾研究室内）
〒753-8511 山口市吉田1677-1 TEL:083-933-5517（担当:木寺、嶋尾）
メール:kanke-sdgs@yamaguchi-u.ac.jp

②パンフレットの作成、配布

7月にパンフレットを作成し配布を行った。



アフターコロナで山口県の自然資源やスポーツ資源を活かし、地域に幸せをもたらす新たな価値を創造する
**SDGsによる
山口県のスポーツ観光講座2021**

- 本講座について
- 山口県の豊富な自然資源、スポーツチームや五輪事前キャンプに使用した施設などのスポーツ資源を活かし、地域に幸せをもたらす価値を創造することを通して、アフターコロナでの観光およびスポーツの推進やまちづくりを推進する人材の育成を目指します。
- ① 県内外や海外のスポーツ観光の成功事例を紹介しレビュー
- ② SDGsの視点から山口県内の自然資源、スポーツ資源を再考する
- ③ アイデアを実現するための異業種間でのネットワークの構築

※本講座では、競技スポーツ以外にもキャンプ、自然・農村での体験ツアー等、広く身体活動(アクティビティ)をとらざる観光全体をスポーツ観光の対象にします。

■募集要項

対象者 スポーツや観光関連の自営業の方および起業を考えている人、スポーツ観光やアウトドア観光を推進する自治体担当者、観光コンベンション担当者、旅行会社、宿泊業、運輸、スポーツチーム、スポーツ施設の方など

人数 正受講生15名(原則としてすべてのプログラムに参加できる人)
※準受講生(希望する講座のみに参加一たし観光プロジェクトやまちづくりなどのアイデアの提供やアンケートなどに協力いただきます)

募集期間 2021年7月15日(木)～8月10日(火)
応募者多数の場合抽選者と観光庁との協議の上、正受講生を選定

授業時間 全6回55時間(自習時間を含む)

会場 山口大学吉田キャンパス、KDDI維新ホール、山口産業技術センター、西長門リゾートホテル、秋吉台国際芸術村、周南図書館ホールなど

授業講師 観光庁、観光系シンクタンク、スポーツ観光コンサルタント、自治体観光およびスポーツ担当者、学識経験者など多数

受講料 無料(宿泊研修における宿泊費、食費は自己負担になります)

■修了証の交付

カリキュラムを修了した正受講生(定員15名)に対して山口大学と観光庁長官の連名で修了証を交付します。
(③原則として全講座の受講②講座討議参加③プロジェクトの作成など)

■お申し込み・お問い合わせ

SDGsによる山口県のスポーツ観光講座事務局
〒753-8511 山口県山口市吉田107-1
国立大学法人 山口大学 経済学部 観光政策学(西院研究室)
電話:083-933-5517(担当:木暮、梅原)
「SDGsによる山口県のスポーツ観光講座」事務局
メール:kanko-sdgs@yamaguchi-u.ac.jp
メールをいただければ応募シートをお送りいたします

「SDGsによる山口県のスポーツ観光講座」ウェブサイト
http://www.yamaguchi-u.ac.jp/kanko-sdgs/index.html

新型コロナウイルス対策のため会場でのマスク着用、手洗い、消毒など感染防止対策にご協力をお願いします。



令和3年度 観光庁「産学連携による観光産業の中核人材・強化事業」

アフターコロナで山口県の自然資源やスポーツ資源を活かし、地域に幸せをもたらす新たな価値を創造する

SDGsによる 山口県のスポーツ観光講座2021

優れた講師陣から学べ講座を通してネットワークも築ける



自然資源 & スポーツ資源

文化 × 食

受講料
無料

開講/2021年8月末～11月末(全6回平日開催)

実施主体: 国土交通省観光庁 事業実施: 国立大学法人山口大学
連携: 山口県観光連盟、山口県観光スポーツ文化部
協力: 公益財団法人日本交通公社、一般社団法人日本スポーツツーリズム連携機構

カリキュラム Curriculum

会場、カリキュラム、講師は変更する場合があります

1	開講式「アフターコロナでのスポーツ観光」 ガイダンス・開講式	新山口駅前KDDI維新ホール
2021年 8月25日(水) 10時～17時	<ul style="list-style-type: none"> 講師の概要 プロジェクトの説明とチーム編成 ワークショップ: お互いを知る 山口県の自然の魅力と観光庁講座による人材育成 ニューノーマル時代の観光と人材育成 ポストコロナでの地方観光 交流会 	<ul style="list-style-type: none"> 山口大学経済学部観光政策学准教授 西尾 健氏 山口大学経済学部准教授 八代 拓氏 山口大学副学長 田中 和広氏 観光庁参事官(国際関係・観光人材政策担当) 田淵 エルガ氏 日本総合研究所 主要研究員 藤谷 浩介氏
2	観光データとテクノロジー スポーツ観光とテクノロジー	山口産業技術センター
2021年 9月1日(水) 10時～18時	<ul style="list-style-type: none"> データからスポーツ観光を学ぶ ビッグデータから見る山口県の観光 心理学とテキスト分析から観光を学ぶ 地図ソフト基本講座 テクノロジーのスポーツと観光への活用 JAXA 衛星画像見学と交流会: 交流を深めましょう 	<ul style="list-style-type: none"> 山口大学 経済学部観光政策学准教授 西尾 健氏 山口県観光連盟専務理事 上田 英夫氏 造手学院大学経営学部准教授 石盛 真徳氏
3	スポーツ観光の成功事例紹介と地域連携 セミナー・体験・見学	西長門リゾートホテル
2021年 9月15日(水) 10時(1日) ～16日(水) 昼食(2日間) 1泊2日 宿泊研修	<ul style="list-style-type: none"> 広域連携アウトドア観光の取り組み スポーツ観光事例と広域連携について 国内スポーツ観光の事例 ワークショップ: より深くディスカッション マリンスポーツ見学と交流交流会 【見学】 廣校活用事例 【見学・体験】 マリンスポーツ 	<ul style="list-style-type: none"> 日本スポーツツーリズム推進機構 専務理事 中山 哲郎氏 日本交通公社 観光政策研究部 活性化推進室長 中野 文彦氏
4	ジオパーク&ユニバーサルツーリズムを学ぶ セミナー・体験・見学	秋吉台国際芸術村
2021年 10月7日(木) 10時～18時	<ul style="list-style-type: none"> 秋吉台でのスポーツ観光への取り組み ユニバーサルツーリズムを学ぶ 山口県の自然とジオパークの取り組み ワークショップ: 中間発表会 【見学・体験】 景観調査 	<ul style="list-style-type: none"> 信州大学学術研究院総合人間科学系 加藤 彩乃氏 山口大学地域創成センター特命教授 脇田 浩二氏
5	スポーツチームとまちづくりを学ぶ セミナー・体験・見学	福地フルーツパーク、周南市立徳山図書館交流室
2021年 11月4日(木) 10時～18時	<ul style="list-style-type: none"> 【見学・体験】 グランピング&アクティビティーズからスポーツ観光を学ぶ スポーツチームをまちづくりに活用する 国内スポーツ観光の事例 ワークショップ: 最終発表会へ向けて 	<ul style="list-style-type: none"> 大阪府立大学学長・日本スポーツツーリズム推進機構 専務理事 原田 宗彦氏
6	修了式・ニューノーマル時代のスポーツ観光 発表会・修了式	山口大学吉田キャンパス 大学会堂
2021年 11月25日(木) 10時～16時	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト最終発表会 表彰式「観光庁講座を振り返って」 シンポジウム: ニューノーマル時代のスポーツ観光 	<ul style="list-style-type: none"> 審査員(講師陣・外部講師) 山口大学副学長 田中 和広氏 観光庁参事官(国際関係・観光人材政策担当) 田淵 エルガ氏 ゲストスピーカー

スピノフ企画 山口県内のスポーツチーム、施設見学会などを予定
●レゾナンスFC ●ながとブルーエンジェルス ●YMGUTS ●広島カブ(2軍) ●他

講師・パネリスト Lecturers & Panelist

	山口大学 経済学部観光政策学准教授 【全体コーディネーター】 実業金融機関、ニューランド・ワイカト大学勤務を経て2018年より現職。専門はマーケティング、スポーツツーリズム、趣味はスポーツ観戦、旅行、アウトドア全般。		山口大学 副学長 大学修了後、一般財団法人電力中央研究所勤務を経て現職。専門は応用地質学、趣味は映画ドラマ、旅行。
	山口大学 経済学部 准教授 (アドバイザー) 東京大学公共政策大学院、一橋大学大学院法務研究科、野村総合研究所を経て現職。専門は国際関係論。趣味は釣りやキャンプ等のアウトドア。		一般社団法人 日本スポーツツーリズム推進機構 会長 大阪府立大学 学長 ベンシル(ニア)州立大学で博士号取得後、鹿屋体育大、大阪体育大、早稲田大学を経て現職。専門はスポーツマネジメント、スポーツツーリズム。趣味はテニス。
	山口大学 地域創成センター 特命教授 産業技術総合研究所副所長・山口大学創成科学研究科教授を経て、現職。 専門は地質学、趣味はリコーダー演奏、サッカー。		観光庁 参事官(国際関係・観光人材政策担当) 文部省(現文部科学省)入庁後、学政、学術行政をはじめ国際機関や大学教員での勤務も経る。 内部研発の経験を経て、専任としてコンテンツ開発の担当を経て現職。趣味は旅行。
	信州大学 学術研究院総合人間科学系 講師 筑波大学大学院修了(体育学)後、特別支援学校勤務を経て現職。専門はインクルーシブ教育、信州の自然と野外教育の可能性をテーマに、フィールドをアウトドアに対応。		一般社団法人 日本スポーツツーリズム推進機構 専務理事 (アドバイザー) JTBでの海外ビジネスやスポーツ関連団体での経験を活かし、「スポーツ観光」と「スポーツによる地域活性化」に関わり、GLOBALとLOCALの融合を目指す。
	公益財団法人 日本交通公社 観光政策研究部 活性化推進室長/室長主任研究員 (アドバイザー) 山口大学 経済学部 准教授 (アドバイザー)		山口県観光連盟 専務理事 (アドバイザー) 大学卒業後日本交通公社(現・JTB)入社。 松江店長、山口店長、岡山店長などを経て現職。趣味はゴルフと旅行。
	造手学院大学 経営学部 教授 専任は社会心理学・コミュニケーション心理学で、コミュニティ心理学やスポーツボランティアなどを研究。 最近の趣味はトレイルランニング。		株式会社 日本総合研究所 主要研究員 徳山高校3年卒業。日本の全都市町村、海外114ヶ国を自費で訪問。サイクリングや登山などアウトドアを愛好。著書に「観光立国の定石」(新潮新書)など。

その他山口大学教員、外部講師多数

2020年受講生から
発案されたアイデア

- 「ジャパンエントラックを活用した広域アウトドアツーリズム」
 - 「関門海峡ガストロウオーキング」
 - 「広島カープOB・スカウト解説付き観戦 in 宇宇」
 - 「おひとり様限定プチワークショップ&農業体験」
 - 「レゾナンスからたづねる」
 - 「瀬戸内サーリング体験—プライダビリティ」
 - など多数
- 受講生の声
- 「講義で学んだ理論的なことに加え、グループでのいろいろな分野で仕事をされたという方が多かったことで、とても有意義な講座になりました。アウトドア企業家(女性)」
 - 「自然をフィールドとするアクティビティを積極的に展開していくためには、環境との調和等のSDGsの視点が重要だと感じました。自治体観光担当者(男性)」
 - 「山口県内資源の優位性・地域振興に関わる人脈・ネットワークを築けました。金融機関(男性)」
 - 「各回の講義内容に加え、県内の観光を中心に業務する担当者同士の、縁の繋がりを築くことができました。航空会社(男性)」
 - 「事業をするにあたり、地域にある資源を活用することで地域経済の成長につながることを意識だわりました。自治体観光担当者(男性)」

昨年度受講生の方のご所属先 山口県、山口市、美祿市、宇部市、長門市、萩市、観光コンベンション(山口市、宇部市、美祿市、長門市)、JTB、日本航空、東日本、サンインリゾートホテルサンポート、レゾナンスFC、広島カープ、ヤマキ建設、山形インディペンデントグループ、西京銀行、ミズノ、アウトドア、スポーツ観光に関する自営業者、地域と観光の関係など

4-2) 北陸先端科学技術大学院大学により開発されたコンソーシアム共通プログラム設計指針

コンソーシアム共通プログラムは、①共通教育プログラム(オンデマンド教材等)を基礎編とし、各大学で実施の教育プログラムを応用編とする、②基礎編をオンラインで受講する事で、自走化の負担を軽減することや、受講生等に実施プログラムを受講する前に受けてもらう事で、知識の土台作りをし、より効果のある教育を行う事を目指している。

下記に設計指針の概要を記載する。

1 はじめに

リカレント教育について、今何が求められているのかについて言及。また、観光業界を支える人材育成について述べている。

2 プログラムの開発の前提

2.1 リカレント教育の潮流

リカレント教育の歴史、現代社会における必要性を確認するとともに、リカレント教育の特徴や効果、近年採用されている教育手法について解説。また、産学連携に関する動向を紹介。

2.1.1 働き方改革におけるリカレント教育の重要性

働き方改革や副業、複業の増加、人材流出への対応、人材育成と業界のメリットなどや、プログラム受講によるメリットとデメリットを受講者個人・業界全体・事業者に分けて解説。

2.1.2 リカレント教育の効果

「目指す教育効果」

- ・一次的効果: デジタル化やポストコロナに伴う新たな産業形態に対応した経営改革・新規事業開発・組織改革思考を持った人材育成
- ・副次的効果: 人脈形成

2.2 カリキュラム体系化の意義と他分野の事例

他分野での事例(獣医学部、文化資源学など)、他のリカレント教育のコアカリキュラムを紹介し、カリキュラムの体系化や標準化の重要性を解説。

2.3 観光教育の潮流

海外での観光教育を紹介。大学や専門学校の観光教育、観光産業でのOJTの概観を述べ、本リカレント教育が担うポジションを提示。産学連携で観光分野のリカレント教育を実施する意義について解説。

2.4 社会人観光人材育成の動向

観光人材育成の最近の動向や観光産業の中核人材が担う役割、求められる能力を明示。また、本人が身につけたいスキルや希望する働き方など人物像を明示し、ステークホルダーとして、観光客、中核人材、上司や同僚の関係を解説。

2.5 観光庁における人材育成政策と中核人材育成コンソーシアム

観光庁のこれまでの取り組みと、中核人材育成コンソーシアムの取り組みと各校の講座テーマを紹介。

3 プログラムの作成

3.1 ポリシーの作成と体系化

3.1.1 プログラム作成の基本

大学教育で用いられる仕組み導入の意義、方法について解説。

3.1.2 プログラムに必要なポリシー

教育目的、対象者、育成する人材像、育成する能力について解説。

3.2 カリキュラム設計

3.2.1 カリキュラムポリシーの策定

カリキュラム設計をするにあたって、考慮すべき観点を解説。

- ・共通基礎科目と選択応用科目の整理
- ・教育手法の検討
- ・カリキュラム設計の判断基準
- ・コア科目の必修化について

3.2.2 授業時間数の数え方

講義実施時間そのものと、前後の予習・復習時間のトータルで、必要時間数を捉え、各種制度の要件時間数との兼ね合いについて解説。

- ・教育効果を上げるための時間設計
- ・各種給付金受給申請要件との兼ね合い

3.2.3 分野別カリキュラム案

観光中核人材の分野別の育成能力と授業科目群について解説。

- ・分野別の育成能力
- ・授業科目群

3.2.4 共通プログラムの策定

共通プログラムに必要な科目と、あり方について解説。

- ・「共通基礎科目」に含めるべき要素
- ・コンテンツ共有のあり方

3.3 教育コンテンツの作成

3.3.1 コンテンツ作成の方針

教育コンテンツとは何か、受講生にとって望ましく、価値あるコンテンツについて解説。

- ・教育コンテンツとは
- ・学習環境への配慮

3.3.2 シラバスの作成

- ・シラバスとは何か
- ・学びの質保証とシラバス
- ・シラバスの例

3.4 教授法の選択と講師の育成

3.4.1 教授法の選択

- ・リカレント教育とあくでいぶラーニング
- ・薫陶型研修とファシリテーター
- ・反転授業と額種時間の考え方
- ・科目と教授法の対応

3.4.2 講師の育成

講師自身のスキル向上や視野の拡張について解説。

コラム:受注案件の教育設計(JICA 北陸 観光開発政策研修の事例)

この事例では、教育カリキュラム作成のため、各種プロセスを実行しており、教育プログラム策定の参考として解説。

4 教育マネジメント

4.1 制度設計

受講者側と運営者側双方の制度設計の在り方について解説。

- ・運営組織
- ・履修証明プログラム
- ・職業実践力育成プログラム(BP)認定制度
- ・修了認定

4.2 受講者向けの設計

4.2.1 ミスマッチをなくす設計

受講者側のニーズを組んだプログラム開発や募集要項について解説。

4.2.2 モチベーションを高める設計

参加理由が異なる受講生が集まっているため、モチベーションを高めるための効果的な方法と注意点について解説。

4.2.3 受講生の学習効果を高める設計

受講者の疑問や悩みに応えるチューター等について解説。

4.2.4 受講生のネットワーク形成

ネットワーク形成の手段や重要性について解説。

4.3 教育プログラムのマネジメント

4.3.1 事務局運営

事務局の在り方と役割について解説。

4.3.2 受講や教育効果の評価

ルーブリック形式を用いた評価について解説。

4.3.3 受講生のネットワーク形成

教育プログラム内でのネットワーク形成の手段について解説。

4.4 教育プログラムの効果測定と評価方法

自己評価・他己評価などの測定基準を例示し、追跡調査の必要性について解説。

4.5 資金計画と制度設計

自走化に向けて押さえておくべきポイントについて解説。

4.5.1 資金計画

- ・受講者と出資者の関係
- ・優遇制度(給付金)
- ・単位認定制度

4.5.2 共通プログラムに必要なこと

- ・共通プログラム策定の意義
- ・シラバスの作成
- ・共通プログラム策定にあたっての留意点

5 おしまいに

6 参考資料

付録: 過去のカリキュラム、参考になる書籍リスト(分野別)

■内容を割愛していないコンソーシアム共通プログラム設計指針は、観光庁 HP にて掲載をしております。
(観光人材政策:<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/jinzai/renkei.html>)

5章 事業総括

令和3年度
『産学連携による観光産業の中核人材育成・強化に関する業務』
事業実施報告書

5章

事業総括

5章 事業総括

前章までにおいて、本事業、令和3年度「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化」の活動について整理を行った。本章において、これら活動から見えた問題・課題を整理し、事業総括として締めくくりたい。

5-1) コンソーシアムおよび大学における問題・課題の整理

3章のフォローアップ調査3大学(愛媛大学、滋賀大学、北陸先端科学技術大学院大学)、および4章の開発された教育プログラム(山口大学、北陸先端科学技術大学院大学)における教育プログラムの範囲内における限定ではあるが、問題・課題を下表に抽出した。

中核人材育成・強化事業を通じた業務は、特定の領域に限られる。コンソーシアムにおける2回の全体会議、合同研修、フォローアップ調査における3校(各大学の教員、職員、計9名の受講者へのインタビュー調査)である。そのため、コンソーシアム14大学または観光リカレント教育すべてに共通した問題・課題ではないことは、ご承知おきいただきたい。

問題1	<ul style="list-style-type: none"> 各大学が提供する教育プログラムには、ビジネス機会の発見やビジネスプラン策定に関わるものが、比較的多いが、観光事業や地域の観光経営のための基礎的な教育内容を提供する必要もあるのではないかと。 基礎的な教育プログラム提供の需要が見込まれる場合、現在策定中の標準設計指針をどの様に活用することが考えられるか。 オンライン教育が普及する中、各大学が提供する教育プログラムを、全国の中核人材が受講できるように工夫することは有効か。 各大学間の連携として、教員間の交流等が見られる所だが、その他にどのようなものが考えられるか。
課題1-1	各大学が提供する教育プログラムを、全国の中核人材が受講できるよう、大学間における協業を進める。当面は、オンラインによる教育プログラムの提供を行い、観光人材に対する教育受講機会を広げることが考えられる。
課題1-2	観光リカレント教育におけるカリキュラムモデルを構築し、大学間で共有化を図る。中核人材に求められるカリキュラム・マップと各大学の分担を定めることにより、網羅的な教育機会の提供を行う。 カリキュラムモデルには、基礎的な教育内容から、以下に記す思考訓練機会(課題3-5)まで、その範囲は広く設定する必要がある。 本事業で策定された共通プログラムは、全国の中核人材に受講機会が提供されるよう、オンラインの活用などの工夫を考えたい。①共通プログラム、②各大学の特色ある教育プログラム、③思考訓練機会、これらの段階的教育機会の提供となることから、本事業から想定が出来る。
課題1-3	各大学が提供する教育プログラムの、開講・受講、受講・支払い収受を行うための仕組み(中間システム)を設ける。また、その中間システムでは、教育プログラムの充実や、観光産業からの最新の事例などの収集と大学への提供機能も含む。
課題1-4	コンソーシアムにおける教員の交流等、関係が深められたことは、本事業の大きな効果であると言える。さらに進化を進め、各大学による教育プログラムの提供から、我が国の観光産業に対する教育プログラムの提供へと発展することを願う。各大学の特色ある教育プログラムを集め、知恵を結集し、我が国の観光産業の中核人材を育てる態勢の構築へと発展することが望まれる。

5-2) 観光産業に対する問題・課題の整理

本事業における教育プログラムを受講した受講者へのインタビュー調査を行った。観光産業およびその周辺事業に関わる従事者からは、観光産業に対する期待や喜びの声がある一方で、将来に対する不安もある。観光産業における経営者や責任者と、中核人材が一緒になり取り組む問題・課題を下表に整理を行った。

問題2	<ul style="list-style-type: none"> 自社組織や事業におけるイノベーションに取り組む力に欠ける。 また事業収益性が高まらず、観光産業の従事者の処遇は厳しい。
課題2-1	人手で業務を乗り越えることを脱却し、機械(IT)に置き換えることが出来る業務を抽出し、積極的に投資を行い、省力化を図る。従事者は、顧客接点に集中し、より高付加価値のサービスを提供する。
課題2-2	機械(IT)化により、収益性(粗利率、営業利益率)の向上を図り、従事者への処遇を改善する。
課題2-3	機械(IT)と人による業務再設計を行い、オペレーションの最適化、コスト低下を図る。
課題2-4	産業界は、「学」に対して、ITにより何が出来るのか、その発想を受講者が考える教育プログラムの提供機会を求める。ITのコーディングではない。ITシステム概念設計、実業務に落とし込めるシステムエンジニアリングである。受講者の声にもある、付加価値の高いサービスの提供、生産性向上へのひとつの方策である。

問題3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小規模事業が多く、イノベーション等の取り組みが進まない。 ・ また、イノベーション、改善・改革の成功事例、失敗事例を知る機会がない。
課題3-1	まずは、地域でまとめ、成功事例、失敗事例を含め、情報の共有化を図る。自社の事例を地域に開示するとともに、地域の他者事例も知ることを促進する。
課題3-2	自社単体で儲ける発想から、地域全体に人を呼び込み、地域で儲ける発想に転換する。
課題3-3	そのためにも、デジタルへの積極的な取り組み(DX)とその人材づくりを進める。
課題3-4	イノベーションは、競争の中から生まれる。自社や国内の観光産業における競合の定義を行う。またイノベーション発想のためには、他産業の多くの事例を知ることも有効である。産業界は「学」に対して、これらイノベーションを起こせる教育プログラムの提供機会を求める。
課題3-5	北陸先端科学技術大学院大学が提供するケース・メソッドがひとつの方策となろう。事業者は、これにより思考力を高めることが期待できる。 成功や失敗のケースを知ることも大切であるが、まったく同条件の事例は存在しない。ケースを読み、自分ならどう考えるか、周りの仲間や教員はどのように考えるか、そのような思考訓練の場の中核人材を出し教育することは有効な方策となるであろう。

5-3) 最後に（産学官の連携における課題）

上記に、産学官それぞれの問題・課題について整理を行った。これらを含め、今後もリカレント教育を進め中核人材の育成・強化を図ることをめざし、産学官において、共通した認識を深める必要がある。最後に産学官の連携を図り、上記の問題・課題に取り組む必要がある。

1	中核人材の姿の定義	<ul style="list-style-type: none"> ★ 産業界は、必要とする人材ニーズを明確にする。 ★ 「学」において、中核人材像の具体的イメージを策定し、その人材イメージを産業界に示し、産学において人材像を具体化する。 ★ 「官」は、その指導、調整等を図る。
2	ニーズを受けた教育プログラムの策定	<ul style="list-style-type: none"> ★ 「学」は、上記において抽出された人材像を作り上げるための観光リカレント教育におけるカリキュラムモデルを構築し、産業界に提示する。 ★ 産業界は、教育プログラムの受講に耐える中核人材に備える。本事業で策定された共通プログラム等の受講により、基礎的能力の育成が先決である。 ★ 「官」は、その後押しを行う。

日本政府の方針に沿い、観光産業を我が国の強力な産業へと進化を図るため、人材の側面から中核人材を含め観光産業に従事する人材を強化する。この点において、産学官ともにその方向性は完全に一致している。

しかしながら、その細部においては、産学官それぞれの視点や考えに異なるところも多い。産学官における議論を深め、観光産業を強化すべく人材育成手段について、その細部の整合を図るべきだ。

(1章から5章終わり)